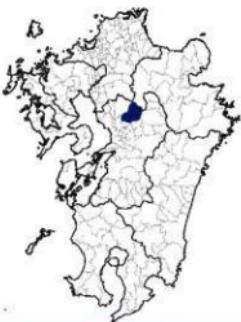


菊池氏遺跡

中世菊池一族関連遺跡群確認調査総括報告書



2023年

菊池市教育委員会

序 文

菊池市は熊本県北東部に位置し、阿蘇外輪山を源とする一級河川菊池川とその支流合志川、迫間川によって、豊かな自然環境が育まれています。

菊池一族の本拠地である当市の歴史は古く、特に南北朝時代には南朝方に最後まで忠節を尽くして戦った一族の姿勢は、後の世まで語り継がれています。また、一族の文武両道の精神は、すぐれた学者や教育家を多数輩出してきた文教の地として、今も受け継がれています。

本書は菊池一族の城館と考えられる北宮館跡や菊之池B遺跡、隈府城下遺跡をはじめとする関連遺跡の確認調査等の成果をまとめた総括報告書です。

確認調査では遺跡の実態解明と歴史的価値付けを目的とし、関連遺跡の現地踏査等は考古学的視点で実施しました。さらに、文献史料の調査・研究では、これまでの研究成果のまとめと新たな考察をおこないました。

本書が国民の共有財産である文化財の保護・活用及び学術研究の推進に寄与できましたら幸いに存じます。

最後に、確認調査から本書の作成にいたるまでご協力をいただきました多くの方々に、心から感謝申し上げます。

令和5年3月

菊池市教育委員会

教育長 音光寺 以章

例　　言

- 1 本書は、菊池氏遺跡の国指定化を目的として実施した、国庫補助事業に伴う確認調査等の総括報告書である。
- 2 本書は、令和元年度に刊行した「中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書」を基盤とし、令和元年度・2年度・3年度に実施した確認調査・現地踏査成果を追加し、考察を加えたものである。
- 3 本書には熊本県教育委員会が実施した隈府土井ノ外遺跡の発掘調査成果概要とその成果の再評価を行った中山圭氏の研究概要も掲載した。
- 4 確認調査や報告書作成は史跡調査検討委員会（甲元真之委員長）の指導や同検討委員会のオブザーバーである文化庁調査第二課・近江俊秀主任文化財調査官、熊本県教育庁教育総務局文化課職員の指導・助言のもと行った。
- 5 本書掲載の図面縮尺は遺構 1/40、遺物 1/3（陶磁器 1/2）を原則としているが、大きさの関係で異なる縮尺のものもある。
- 6 本書の執筆者は下記のとおりである。

第Ⅰ章	西坂 知絵
第Ⅱ章	末武希代子
第Ⅲ章	阿南 亨
第Ⅳ章第1節⑨	パリノ・サーヴェイ株式会社
第Ⅴ章	稲葉 錠陽
第Ⅵ章	鈴木 寛之
上記以外	西住欣一郎
- 7 本書の編集は西住が担当し、菊池市教育委員会生涯学習課が実施した。
- 8 本書に掲載した遺物写真は、熊本県教育庁教育総務局文化課文化財資料室写場で撮影した。
- 9 本書に掲載した遺物・実測図・写真等は、菊池市教育委員会生涯学習課で保管している。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の組織	2

第Ⅱ章 道路の位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第Ⅲ章 菊池氏の概要と事業目的

第1節 菊池氏の概要	
(1) 菊池氏略史	6
(2) 十八外城について	7
第2節 事業目的	8

第Ⅳ章 確認調査と発掘調査の成果

第1節 深川・北宮地区の確認調査の成果	
(1) 菊之池B遺跡の確認調査	10
(2) 北宮館跡（菊之城跡）の確認調査	48
(3) 確認した遺構の保護について	80
(4) まとめ	82

第2節 隈府地区的調査

(1) 守山城跡の測量調査	89
(2) 隈府城下遺跡の確認調査	90
(3) 隈府院馬場遺跡の確認調査	91
(4) 立石遺跡の確認調査	91
(5) 隈府周辺の現地踏査	95
(6) 隈府土井ノ外遺跡の発掘調査	98
(7) 隈府土井ノ外遺跡出土陶磁器の再評価	103
(8) まとめ	115

第3節 赤星地区的踏査

第4節 北宮遺跡の踏査	117
-------------	-----

第V章 文献史料調査

第1節 文献史料にみえる菊池一族	124
第2節 文献史料調査の課題	146

第VI章 北宮阿蘇神社の民俗学的調査

第VII章 確認調査の成果・考察・課題

第1節 深川・北宮地区的調査について	180
第2節 隈府地区的調査について	215
第3節 捜点移動について	217
第4節 菊池川を利用した交易	223
第5節 「福岡の市」から見た集散地の様子	237
第6節 和船について	240
第7節 課題について	245

総括 261

写真図版 265

報告書抄録 278

挿 図 目 次

- 第1図 菊之池B遺跡・北宮館跡周辺遺跡分布図
第3図 深川・北宮地区の確認調査位置図
第5図 R 1 調査区1号・2号石組実測図
(第1期～3期)
第7図 R 1 調査区1号・2号1期石組実測図・
土層断面図(2)
第9図 R 1 調査区2号石組2期深掘トレンチ
実測図
第11図 R 1 調査区1号石組3期実測図
第13図 R 1 調査区Ⅲ層出土遺物実測図
第15図 R 1 調査区出土陶磁器実測図2
第17図 R 2 B区3号石組実測図(検出時)
第19図 R 2 B区3号石組実測図(深掘1回目)
第21図 R 2 B区3号石組実測図(深掘3回目)
第23図 3号石組石材1
第25図 3号石組石材3
第27図 R 2 B・C・E・F区出土遺物実測図
第29図 R 2 C区実測図・土層断面図
第31図 R 2 D区実測図・土層断面図
第33図 R 2 F区実測図・土層断面図
第35図 北宮館跡トレンチ位置図
第37図 北宮館跡1トレンチ包含層出土遺物実
測図(1)
第39図 北宮館跡1トレンチ包含層出土遺物実
測図(3)
第41図 北宮館跡1トレンチ遺物集中箇所出土
遺物実測図(2)
第43図 北宮館跡1～3トレンチ出土遺物実測図
第45図 北宮館跡3トレンチ遺構実測図・土層断
面図
第47図 北宮館跡3トレンチ包含層出土遺物実測
図
第49図 北宮館跡4トレンチ東壁土層・2号溝跡
断面図
第51図 北宮館跡5トレンチ遺構実測図
第53図 北宮館跡5トレンチ土層断面図
第55図 北宮館跡5トレンチ4号・5号土坑出土
遺物実測図
第2図 菊池十八外城跡分布図
第4図 R 1 調査区土層断面図
第6図 R 1 調査区1号・2号1期石組実測図・土層
断面図(1)
第8図 R 1 調査区1号・2号2期石組実測図
第10図 R 1 調査区2号石組2期石間出土土師器
実測図
第12図 R 1 調査区出土遺物実測図
第14図 R 1 調査区出土磁器実測図1
第16図 R 2 A区実測図・土層断面図
第18図 R 2 B区3号石組(検出時)石積変化
ライン平面図
第20図 R 2 B区3号石組実測図(深掘2回目)
第22図 R 2 B区3号石組深掘り終了後の土層断面図
第24図 3号石組石材2
第26図 遺跡周辺地質図
第28図 R 2 B・C・E・F区出土磁器実測図
第30図 R 2 D区4号石組実測図
第32図 R 2 E区5号石組実測図・土層断面図
第34図 北宮館跡現況写真
第36図 北宮館跡1・2トレンチ実測図
第38図 北宮館跡1トレンチ包含層出土遺物実測図(2)
第40図 北宮館跡1トレンチ遺物集中箇所出土遺物
実測図(1)
第42図 北宮館跡1トレンチ遺物集中箇所出土遺物
実測図(3)
第44図 北宮館跡出土陶磁器・土師器実測図
第46図 北宮館跡3トレンチ包含層出土遺物実測図
第48図 北宮館跡4トレンチと1～3トレンチの断面
比較図
第50図 北宮館跡4トレンチ出土遺物実測図
第52図 北宮館跡5トレンチ4号・5号土坑実測図
第54図 北宮館跡5トレンチ石列跡出土遺物実測図
第56図 北宮館跡5トレンチIV層出土遺物実測図

- 第57図 北宮館跡5トレンチV層出土遺物実測図
第59図 歴年較正結果
第61図 治水地形分類図
第63図 守山城跡平面図
第65図 順府地区の確認調査・踏査位置図
第67図 順府城下遺跡表探・出土遺物実測図
第69図 順府城下遺跡の確認調査写真
第71図 順府城下遺跡井戸跡実測図
第73図 立石遺跡トレンチ配置図・土層断面図
第75図 順府城下遺跡の踏査写真
第77図 順府土井ノ外遺跡全体遺構配置図
第79図 順府土井ノ外遺跡遺構分布図(3期)
第81図 順府土井ノ外遺跡8号土坑・出土遺物実測図
第83図 順府土井ノ外遺跡9号土坑出土遺物実測図
第85図 順府土井ノ外遺跡出土輸入陶磁器・青磁盤・青花
第87図 類例伝世品・他遺跡出土資料1
第89図 赤星地区の踏査図
第91図 北宮遺跡踏査地点
第93図 北宮遺跡確認調査出土遺物・表探遺物実測図2
第95図 菊池氏略系図1
第97図 北宮阿蘇神社木造神坐像1
第99図 北宮阿蘇神社木造神坐像3
第101図 北宮阿蘇神社木造神坐像5
第103図 陣ノ内城跡と旧河道
第105図 陣ノ内城跡の関連施設3
第107図 相良頼景館跡と蓮花寺跡
第109図 蓮花寺跡石積基壇
第111図 菊池井手と菊池川旧河道比較図
第113図 川西遺跡位置図
第115図 川西遺跡II区集石遺構写真
第117図 沖手遺跡遺構配置図・全景・遺構写真
第119図 中須西原遺跡礫敷き遺構断面図
第121図 中須東原遺跡S X 1
第123図 中須東原遺跡S X 266
第58図 北宮館跡5トレンチIV層・V層出土遺物実測図
第60図 遺構の保護措置
第62図 菊池川旧河道と調査区
第64図 守山城跡周辺航空レーザー測量図
第66図 確認調査等による順府城下遺跡周辺想定図
第68図 順府城下道路確認調査平面図
第70図 順府城下道路出土遺物実測図
第72図 立石遺跡位置図、トレンチ1土層写真、現況写真
第74図 立石遺跡出土遺物実測図
第76図 順府城下遺跡の古写真
第78図 順府土井ノ外遺跡遺構分布図(1・2期)
第80図 順府土井ノ外遺跡1号・2号井戸跡実測図
第82図 順府土井ノ外遺跡8号土坑出土遺物実測図
第84図 順府土井ノ外遺跡出土輸入陶磁器・青磁類
第86図 順府土井ノ外遺跡出土輸入陶磁器・彩釉陶・釉洞ぎ碗皿・茶道具・硯
第88図 類例伝世品・他遺跡出土資料2
第90図 赤星地区踏査状況
第92図 北宮遺跡表探遺物実測図1
第94図 肥後国莊園分布図
第96図 菊池氏略系図2
第98図 北宮阿蘇神社木造神坐像2
第100図 北宮阿蘇神社木造神坐像4
第102図 陣ノ内城跡の関連施設1
第104図 陣ノ内城跡の関連施設2
第106図 相良頼景館跡の関連施設
第108図 相良頼景館跡・蓮花寺跡・船之瀬堰・船之瀬井手
第110図 北宮館跡の関連施設
第112図 菊池川全図と現在の菊池川
第114図 川西遺跡II区東側遺構配置図
第116図 遺跡分布図
第118図 中須西原遺跡礫敷き遺構
第120図 中須東原遺跡遠景写真・遺構配置図
第122図 中須東原遺跡S X 265
第124図 中須東原遺跡S X 119

第125図 中須東原遺跡S X22	第126図 中世今市遺跡礫敷遺構
第127図 朝駒矢田II遺跡	第128図 隈府地区の中枢部施設想定図
第129図 深川・北宮地区と隈府地区の遺構・遺跡 と拠点移動	第130図 肥前千葉氏関連遺跡位置図
第131図 肥前千葉氏の本拠地図	第132図 千葉城跡・古町遺跡出土遺物写真
第133図 益田氏本拠地図	第134図 蒙古襲来合戦絵巻3
第135図 菊池川旧河道と関連遺跡分布図	第136図 社遺跡と社遺跡出土遺物写真
第137図 唐人川関係写真	第138図 菊池川旧河道と河口の様子
第139図 木材・硫黄の交易ルート	第140図 『海東諸国紀』
第141図 駒智城跡木組遺構と窓穴	第142図 窓組みの図
第143図 高島船着場付近図	第144図 昭和20年代の高島船着場・旧高島橋周辺写真
第145図 「福岡の市」	第146図 明治期の北宮館跡(菊之城跡)周辺の絵図
第147図 一遍型絵の川船、蒙古襲来合戦絵巻3の船	第148図 速賀川の川船実測図
第149図 1・2号石組と旧河道との関係	第150図 菊池川旧河道の左岸想定箇所の起伏図
第151図 室町期菊池氏支配領域	

表 目 次

第1表 R 2 B区3号石組サンプル一覧表	第2表 樹種同定結果
第3表 放射性炭素年代測定結果	第4表 平安・鎌倉期の菊池氏関係史料
第5表 14世紀内乱期以降の菊池氏関係文書	第6表 江戸時代関東和船の規模別分布
第7表 遺物観察表	第8表 隈府土井ノ外遺跡遺物観察表
第9表 北宮遺跡表採遺物観察表	第10表 北宮館跡出土土製品・鉄製品観察表
第11表 菊池氏略年表	

写 真 図 版 目 次

図版1 調査区遠景、R 1 調査区1・2号石組	図版2 R 1 調査区1・2号石組
図版3 R 1 調査区土層	図版4 R 1 調査区1号石組、R 2 B区3号石組
図版5 R 2 B区3号石組(デジタル合成)	図版6 R 2 B区3号石組深掘後
図版7 R 2 B区3号石組深掘後、R 2 C区	図版8 R 2 D・E・F区遠景、R 2 D区4号石組
図版9 R 2 E区5号石組	図版10 R 2 F区、北宮館跡5トレンチ
図版11 北宮館跡5トレンチ遺構、北壁	図版12 菊之池B遺跡出土遺物
図版13 北宮館跡4・5トレンチ出土遺物	

第Ⅰ章 調査経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

菊池市北宮には、菊池氏が最初に構えた居館であると伝えられる市指定文化財北宮館跡（菊之城跡）が所在している。

平成24年1月24日、菊之池区長会長・深川区長より「菊之池城（館）跡地の試掘・調査実施についてのお願い」により調査、整備等の要望があった。これを受けて菊池市教育委員会では城跡主郭部分と想定されている筆にトレント3基を設定し、実態調査を目的とした確認調査を実施した。トレントからは溝跡、柱穴、土坑等の遺構を確認し、13世紀代の土師器壺、小皿を中心に多量に出土したことから、由来のとおり館があったことが想定されたが、ここだけでの調査では情報量が少なく全体像を把握するには至らなかった。そのため翌24年度も引き続き確認調査を実施する計画であったが、県文化課から菊池氏の発祥の地として国指定を目指すこと、単一の遺跡だけではなく菊池氏の遺跡を包括して広域的活用に取り組むよう提案があり、市として国指定を目指していく方針を固めた。平成26年2月27日に史跡菊之城跡現地指導・事前準備調査検討委員会を開催し、平成26年度から正式に菊池市史跡調査検討委員会を発足した。

北宮館とその後の本城と伝えられている守山城及び内裏尾を核とした、中世菊池氏関連遺跡を包括的な遺跡群としてとらえるようにとの委員会からの提言により、北宮館跡も含めて、市内の中世菊池氏に関連する遺跡の広域的な調査を開始した。平成27年度に現地の確認調査の実施をはじめ、現地踏査、文献調査、測量調査等の実施、その他開発事業に伴う確認調査の結果も参考にし、実態解明に努めた。令和元年度には平成27年度以前の調査成果をまとめた『中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書』を刊行した。

菊池市に関連した遺跡は深川・北宮地区と隈府地区に集中しているが、調査をすすめていく中で、中世前期（12世紀～14世紀初頭）の北宮館跡を拠点とした形成期（前期）と、中世中・後期（14世紀中頃～16世紀初頭）に隈府に拠点を移し、肥後守護職として領国制を整えた確立期（後期）に分かれるととらえられるようになった。その動向を一度に解明することは困難であり、作業内容も膨大なことが想定されることから、まず深川・北宮地区の北宮館跡とその周辺の前期菊池氏の調査に集中する方針を固めた。令和元年度と2年度には、北宮館跡と深川一帯の確認調査を実施している。この調査では深川一帯では石組遺構が、北宮館跡からは掘立柱建物、土器を埋設した土坑などが見つかるなど、大きな成果があった。

なお、北宮館跡は、これまで菊之城跡と呼ばれていたが、菊之城の呼称は近世からであり中世の文書には城名が明確に記されていないこと、確認調査や地勢から城ではなく館であった可能性が高いことから、国指定を目指す過程で呼称を変更したもので、字名から北宮館跡と記載する。また菊池氏に関連する遺跡をまとめて「菊池氏遺跡」と呼称する。

第2節 調査の経過

- 平成24年3月15～27日 北宮館跡確認調査実施。主郭推定箇所にトレント3基設定。土師器、輸入陶磁器等、溝状遺構、ピット、土坑等を確認。
- 平成26年2月27日 史跡菊之城跡現地指導・事前準備調査検討委員会を開催。
- 平成26～27年度 文獻史料調査。中世文書、並びに近世の永青文庫中より菊池一族、関連城館の抽出。
- 平成27年3月30日 第1回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
- 平成27年9月 守山城跡土壘実測調査。
- 平成27年12月1・2・17日 北宮館跡北側確認調査実施。城郭推定域の北側にトレント1基設定。土師器、磁器等、時期不明の溝状遺構を確認。

平成28年3月1日	第2回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
平成28年9月27日	航空レーザー測量により北宮館跡、守山城跡周辺の地形の図化。
平成29年3月10日	第3回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
平成29年4月11・12・18・19日	守山城跡直下隈府城下遺跡確認調査の実施。溝状遺構、ピット、井戸跡の検出。
平成29年10月30日	北宮館跡の対岸、赤星舟着場推定地踏査。造成された河岸に加工された石材確認。地元住民の話によると、昔は舟着き場があったと伝えられるが、石材は河岸造成をした際に移動したとのことである。
平成29年12月22日、平成30年2月20~22日、3月13・14日	別事業に伴い北宮館跡北側一帯の確認調査の実施。掘立柱建物跡、ピット、土坑、硬化面等を検出し、土師器、須恵器、輸入陶磁器等が出土。北宮館跡北側一帯には古代の遺跡が存在することが判明した。
平成30年3月26日	第4回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
平成30年4月	隈府周辺の現地踏査。
平成30年5月16日	北宮館跡の対岸、赤星舟着場推定地踏査。川港へ通じる1~6番までの“くんば”と呼ばれる小路の確認。港の確認はできず。
平成30年12月17・18日	深川周辺踏査。土師器、輸入陶磁器表探し。
平成30年12月25日	隈府院馬場跡確認調査。客土除去後に井戸跡確認。
平成31年1月8日	深川周辺踏査。古池地名調査。井戸確認。
平成31年1月23日	深川周辺確認調査。畑中の硬化面もしくは礎石の存在の有無を調査。
平成31年3月7日	菊池市文化財保護委員会坂口会長と共に深川周辺踏査。舟つなぎの伝承がある古木等確認。土師器、輸入陶磁器表探し。
平成31年3月14日	第5回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
令和元年12月4日～令和2年3月17日	深川地区R1調査区確認調査。土師器、輸入陶磁器等、石組造構確認。
令和2年1月30日	第6回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
令和2年3月4日	第7回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
令和2年3月28日	「中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書」刊行。
令和2年7月29日～10月20日	深川地区R2A～F調査区確認調査の実施。土師器、輸入陶磁器等、石組造構確認。
令和2年11月20日～12月10日	北宮館跡確認調査の実施。土師器、輸入陶磁器等、掘立柱建物跡、土坑確認。
令和3年3月2日	第8回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
令和4年1月12日	北宮阿蘇神社周辺表探し。輸入陶磁器等確認。
令和4年5月19日	第9回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
令和4年9月14日	令和4年度第1回中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会報告

第3節 調査の組織

調査主体 菊池市教育委員会

調査責任者 倉原 久義（菊池市教育長）平成22年7月8日～平成26年7月7日

原田 和幸（菊池市教育長）平成26年7月8日～平成30年7月7日

渡邊 和博（菊池市教育長）平成30年7月8日～令和3年7月7日

音光寺以章（菊池市教育長）令和3年7月8日～

調査範囲 権川 健治（生涯学習課長）平成23年度

原本 裕之（生涯学習課長）平成24・25年度

田馬 晴雄（生涯学習課長）平成26・27年度

徳原 猛（生涯学習課長）平成28～30年度

山本美千代（生涯学習課長）令和元・2年度

古庄 和彦（生涯学習課長）令和3年度～

調査担当 坂本憲昭、西住欣一郎、北原美和子、末武希代子、西坂知絵、阿南 亨（生涯学習課）

調査協力者 横田佳男（文化庁）、太田幸博（元熊本県教育委員会）、岡本真也、木村龍生、木庭真由子（熊本県教育委員会）、美濃口雅朗（熊本市教育委員会）、中山 圭（天草市教育委員会）、上高原 聰（甲佐町教育委員会）、永井孝宏、上村麻紀（多良木町企画観光課）、馬場正弘（菊池市立戸崎小学校）、永野弘明、西村沙保理、坂井泰雄（熊本大学院生）、早川和子（京都府）、杉村彰一（熊本市）、高山敏朗、堤 克彦、坂口金次郎、角田孝信、輪田たつえ、橋本以疏（菊池市）、成富なつみ、鷺崎有紀、中尾健照、茨木浩一、土野道貴、久保田陽香、田中 晚、椎葉天昭、栗原明美、栗原広子、井上多恵子、上田則行、宇野文子、垣田 優、藤本広美、田上征郎、中川 治、中川秀美、平野智子、藤永一也、古田喜美子、守井昭雄（菊池市教育委員会）

名前	所属	専門分野	年度	備考
甲元 滉之	有識者	熊本大学名誉教授	考古学	平成25年度～ 現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員
北野 隆	有識者	熊本大学名誉教授	建築学	平成25年度～ 現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員
山尾 敏孝	有識者	熊本大学名誉教授	土木工学	平成25年度～ 現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員
鶴葉 錠陽	有識者	熊本大学人文学部文庫研究センター長	歴史学（中世）	平成25年度～ 現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員
小畑 弘己	有識者	熊本大学人文学部社会科学研究科教授	考古学	平成25年度～ 現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員
鈴木 寛之	有識者	熊本大学人文学部社会科学研究科教授	民俗学	平成25年度～ 現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員
小野 正敏	有識者	人間文化研究機構理事	考古学	平成25年度～ 現地指導・事前準備検討委員会
坂口金次郎	有識者	菊池市文化財保護委員会会長	平成25年度～平成30年度	現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員
田中 忠彦	有識者	菊池市文化財保護委員会会長	令和2年度～	史跡調査検討委員
荒木 文代	有識者	菊池市文化財保護委員	平成30年度～	史跡調査検討委員
光永 明徳	地元代表	菊之池区長会会長 上西寺区長	平成27年度	史跡調査検討委員
宮本 啓一	地元代表	菊之池区長会会長 南古閑区長	平成28年度	史跡調査検討委員
高山 孝雄	地元代表	菊之池区長会会長 神来区長	平成30年度	史跡調査検討委員
松岡 洋二	地元代表	菊池地区長 上西寺区長	令和元年度	史跡調査検討委員
櫛川 健治	地元代表	菊池地区長 中西寺区長	令和2・3年度	史跡調査検討委員
前田 讓	地元代表	菊池地区長 野間口区長	令和4年度～	史跡調査検討委員
高山 由朋	地元代表	深川区長	平成27年度	史跡調査検討委員
富田 恒一	地元代表	深川区長 菊之池区長会会長（29年度）	平成28・29年度	史跡調査検討委員
松永 信也	地元代表	深川区長	平成30年度～	史跡調査検討委員
櫛川 博久	地元代表	深川区長	令和2・3年度	史跡調査検討委員
後藤 一清	地元代表	深川区長	令和4年度～	史跡調査検討委員
松崎 英紀	地元代表	北宮区長	平成27年度	史跡調査検討委員
石潤 博人	地元代表	北宮区長	平成28・29年度	史跡調査検討委員
北村 克己	地元代表	北宮区長	平成30年度～	史跡調査検討委員
川口 龍生	地元代表	北宮区長	令和2・3年度	史跡調査検討委員
棟敷野浩一	地元代表	北宮区長	令和4年度～	史跡調査検討委員
坂本 奠	地元代表	菊池神社宮司	平成27～28年度	史跡調査検討委員
戸高 八徳	地元代表	菊池神社宮司	平成29年度～	史跡調査検討委員
佐藤 信清	地元代表	北宮阿蘇神社宮司	令和4年度～	史跡調査検討委員
近江 俊秀	有識者	文化庁文化財第二課 主任文化財調査官	平成25年度～	アドバイザー
		歴史文化財（中近世）	平成25年度～	
		熊本県教育庁教育総務局文化課	平成25年度～	

史跡菊之城跡 現地指導・事前準備検討委員会 史跡調査検討委員会委員 名簿

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

菊池市は九州の中部熊本県の北部に位置し、東に阿蘇郡、西に山鹿市と接し、北に大分県と県境を接する。平成17年3月に旧菊池市、七城町、酒水町、旭志村の4市町村が合併して現在に至る。市の面積の大半は山地が占め、起伏の激しい北部の八方ヶ岳連山と、なだらかな裾野を持つ東部の鞍岳につらなる山々は標高が1000mを測り、南西部に向かってゆるやかに傾斜していき、標高400~100mの丘陵地が広がる。菊池を流れる主な河川は菊池川、追間川、合志川である。ともに多くの支流を伴いながら西進し、阿蘇山の大爆発で形成された阿蘇溶結凝灰岩（火碎流堆積物）を侵食して流域に平野部を形成する。

第2節 歴史的環境（第1図）

【旧石器時代・縄文時代】

旧石器時代、菊池川流域の伊野遺跡、原遺跡、細長地区では数点のナイフ形石器、長野地区では黒曜石製の尖頭器、鞍岳山麓では馬糞塚遺跡から石槍、湯舟地区から尖頭器が採取されている。

縄文早期から中期にかけては、早期の押型土器などが少量出土する他、めったな生活痕跡はみとめられない。後期から晩期は、平野部や台地に大規模な生活拠点が出現する。菊池川流域の平野に天城遺跡、花房台地上に万太郎遺跡、木槻子遺跡群、台地の南に三万田東原遺跡、合志川をはさんだ南の丘陵に伊坂遺跡群などが所在する。三万田東原遺跡は、昭和6年に県内の考古学研究の中心的人物であった坂本経児氏によつてトレンチ調査がおこなわれた。住居址、多量の土偶が確認された熊本を代表する縄文時代の遺跡であり、縄文土器の一型式である三万田式土器の指標遺跡である。また近年の研究では、クロム白雲母を原材料とする玉の製作遺跡であるとの指摘がある。

【弥生時代】

菊池川流域に西寺遺跡、北田遺跡、外園遺跡、合志川流域に藤巻遺跡、平町遺跡があげられる。弥生時代後半に、菊池川上流域の台地上では、小野崎遺跡、うてな遺跡、山鹿市の方保田東原遺跡で大規模な環濠集落が営まれていた。鞍岳から延びる丘陵上に位置する藤尾石墓からは、約10基の支石墓、積石墓4基、甕棺墓2基などが発見された。外園遺跡、うてな遺跡からは、中国の新代（9~23年）に鋳造された古銭貨泉が出土している。

【古墳時代】

合志川流域には久米若宮古墳など5世紀代の古墳群、合志川支流の塙浸川流域には大陸の様相が見てとれる5世紀代の古墳群、菊池川左岸の花房台地には木槻子（フタツカサン）古墳、木槻子高塚古墳などの6世紀前半代の古墳、菊池川右岸には袈裟尾高塚古墳など6世紀中ごろの古墳群が所在し、流域ごとの古墳の変遷をみてとることができる。また菊池川や合志川にも小規模の横穴墓が点在する。

【古代】

天智2（663）年の白村江の戦いの後、唐・新羅軍の侵攻にそなえて配置された城のひとつが鞠智城（くじの城）であると考えられ、『統日本紀』に修復の記録がのこっている。大化の革新以降の郡国制の下、肥後国は14の郡に編成された。現在の菊池は菊池郡と皮石郡、後に皮石郡から分離した山本郡の一部が現在の菊池にあたり、菊池郡と皮石郡は菊池川と合志川流域を主体とする郡であったと考えられる。菊池郡は9郷あり、そのうち8郷は現在の地名から菊池と七城にまたがる一帯。皮石郡は現在の旭志と酒水、山本郡は現在の酒水の西部と想定される。『日本書紀』では持統10（696）年の4月、肥後國皮石（合志）郡の郡名が初見される。



- 1 菊之池B遺跡 2 北宮館跡 3 北宮阿蘇神社 4 菊之池A遺跡 5 北宮遺跡 6 深川遺跡 7 深川古屋敷遺跡
- 8 西寺遺跡 9 条里跡 10 赤星遺跡 11 赤星福土・水溜遺跡 12 条里跡 13 北田遺跡 14 天城遺跡
- 15 戸崎城跡 16 藤田上原遺跡 17 亘遺跡 18 止林城跡 19 築地横穴群 20 限府守山遺跡 21 限府郷木遺跡
- 22 限府塙木屋敷遺跡 23 限府院馬場遺跡 24 限府藪の内遺跡 25 限府前田遺跡 26 限府南田遺跡
- 27 限府町遺跡 28 限府城下遺跡 29 限府屋敷遺跡 30 限府土井ノ外遺跡 31 限府北小路遺跡
- 32 限府孔子堂遺跡 33 孔子堂跡 34 限府北城下遺跡 35 守山城跡及び内裏尾 36 玉祥寺遺跡 37 裂姿尾遺跡
- 38 限府南古町遺跡 39 立石遺跡 40 神来遺跡 41 車町遺跡 42 竹ノ上原遺跡 43 山崎遺跡 44 西村上遺跡
- 45 長田狐塚遺跡 46 条里跡

第1図 菊之池B遺跡・北宮館跡周辺遺跡分布図

当時の九州の交通網は、大宰府を中心として整えられていた。鞠智城は後に肥後国北部に位置する政庁のような役割をはたしたと考えられ、大宰府との間に車路と呼ばれる官道が通っていた。花房台地上の万太郎遺跡、医者どん坂遺跡では、古代官道が敷設されていたことも判明しており、遺跡周辺にも車町、車地、馬渡の地名がのこる。

【中世～近代】

中世菊池一族は蒙古襲来時には国防に務め、南北朝時代は南朝方の懷良親王を擁し、九州の南朝勢力の中核であった。隈府土井ノ外遺跡では14世紀後半～15世紀前半の館跡が確認され、当時から隈府の街並みが形成されていたことが推測される他、市内各所で中世の景観がうかがえる。この他、菊池市南部は合志一族の勢力圏であり、南北朝期には宮方、武家方が争う緊迫した情勢をうかがうことができる。菊之池A遺跡では土師器、輸入陶磁器が出土しており、菊池氏の当主館と推測されている北宮館跡の後背に、関連した施設が存在した可能性を示す。

戦国時代後半になると菊池氏の力は衰え、隈部、城氏などの家臣の力が台頭し、彼らの動静が肥後国衆一同のきっかけともなる。その後の菊池は細川氏の肥後藩政下、隈府が在町として栄えた。

近代、花房台地上に約150haの面積に大刀洗陸軍飛行学校の花房分教所として菊池飛行場が建設された。戦後も利用された給水塔をはじめ、兵舎や弾薬庫、格納庫の外壁など当時の建造物群が現在ものこり、医者どん坂遺跡では射爆場と演習弾がセットで発見された。

第Ⅲ章 菊池氏の概要と事業目的

第1節 菊池氏の概要

(1) 菊池氏略史

菊池氏は九州肥後国（現在の熊本県）北部を中心に、勢力をもつた豪族である。延久2（1070）年に初代則隆が北宮に居を構えてから、約460年存続したと伝えられる。初代則隆の出自については諸説あるが、現在は大宰府の有力府官であり、大宰府に赴任した藤原氏の一族と結合し定着したものとする説がもっとも有力である。12世紀後期の6代隆直の頃には、肥後の主要な武家を率いて平家方と戦う肥後國最大の勢力へと成長した。

次いで鎌倉時代には、本領の菊池郡から菊池川河口の港湾都市玉名までをおさえ、得宗権力と強く結びつく。蒙古襲来時には『蒙古襲来絵詞』にも表現されているように10代武房が活躍し、国内御家人を統率し恩賞申請に深く関わる菊池氏の地位は高かったと考えられる。鎌倉時代末期には、12代武時は大覚寺統の後醍醐天皇の輪旨を受け、北条氏が博多に設けた九州探題を攻めて、倒幕の嚆矢となった。その後の南北朝時代では、13代武重から17代武朝まで一貫して宮方（南朝）に仕えた。特に15代武光は後醍醐天皇の皇子懷良親王を迎えて宮方の肥後國守護として勢力を伸ばし、一時は大宰府に征西府を打ち立て、九州の大半を掌握するほどであった。

武光の孫武朝の代で南北朝が合一し室町幕府体制が確立すると、恭順した菊池氏に対して室町幕府は肥後守護職を与え厚遇した。これは肥後の領国經營ができる実力者が室町期を通じて実質、菊池氏だけであったことを示す。北宮阿蘇神社（菊池三社大明神）に肥後國一宮の阿蘇十二神の神像を寄進し、一国祭祀、段銭、棟別賦課、所領安堵、給与や軍事勤員等、守護としての公的権限を行使し、肥後守護職として高い権勢を誇ったとみられる。この間、現在の菊池市中心部にあたる隈府の町は、肥後國の守護所として発展したと考えられる。

このように、菊池氏は平安時代末期の肥後國衙在庁の最有力武士、鎌倉時代には鎮西随一の国御家人、南

北朝時代には方勢力の主宰者、そして室町時代の肥後国守護と、九州の中世史を体现する存在として11世紀から16世紀初期まで国内武士團でも高い権威を維持しつづけた。東國から下向した勢力以外でその国の守護となった者は、九州では菊池氏をおいてはかにない。

しかし室町時代後半の動乱の時代には徐々に権勢は衰え、近世を得たずに直系は途絶えた。菊池の勢力が衰えた後の肥後北部は、大友氏や龍造寺氏など他国の勢力を後ろ盾とした隈部、赤星、城の三家老が権勢を争った。

近世、菊池の権力の中心であった隈府は、細川藩政下、在町として栄えることとなったが、依然地元の菊池氏への敬愛の情は大きかったとみられ、江戸時代の後半に地元の有力商人が書き綴った『鷺屋日記』では、菊池当主の年忌の記載が度々見られ、墓を建立するなど顕彰する動きがあったようである。また『肥後國誌』などの文献でも、菊池氏累代の系譜、古城などの史跡の記述があり記憶の途絶はみられない。現在、菊池氏の動向は実証されていないものが多いが、近世からの通説伝承からうかがうことができる。

(2) 十八外城について（第2図）

菊池では、現在は菊池神社となっている本城守山城を囲うように配置された山城やとりでを、江戸時代のころから「菊池十八外城（以下、十八外城）」と呼びならわしてきた。しかしこれら一群の城館は場所こそ比定されているが、その真偽、城域の確定や規模などは充分に究明されていない。また近年の研究の進展や考古資料の増加にともない、これまでわれわれがとらえてきた十八外城の姿が、中世の城館の実態を反映しているとはいがたいことが指摘されている。

菊池における中世の城の記録としてもっとも古いものは建武3（1336）年の『小代光信軍忠状』『託磨貞政軍忠状』の「菊池山城」の記述である。これだけでは所在は読みとれないが、この時期にはすでに城は築かれていたことがわかる。また翌年の『託磨宗直軍忠状』には「菊池渡山」での合戦が記されている。渡山は現在の菊池の中心隈府の東隣の「亘」に比定されることから、近隣に山城が存在していた可能性を示す。つづいて『忠良惟澄軍忠状』『忠良（阿蘇）惟澄申状追書写』には「菊池陣城」「菊池本城」「外城」「隈部城」の記述がある。この両文書は武家方の合志幸隆に「菊池陣城」「菊池本城」を奪われ、その後奪回したことを見たものである。この城はその名のとおり本城であったと推測され、「菊之城」にあたると考えられる。同時に地名から「守山城」ではないかと思われる「隈部城」が存在すること、「外城」と呼ばれる城がすでに存在することがわかる。17代武朝の時代、永徳元（1381）年の『深堀時久軍忠状』では「菊池陣城」「隈部城」、『深堀時弘軍忠状』では「菊池館城」「隈□（部か？）城」、『安富了心軍忠状』では「熊耳城」の記述がある。これらは、武朝がたてこもっていた「隈部城」「熊耳城」が落城したことを記しており、15代武光の菩提寺が菊池神社の下に位置する熊耳山正觀寺である立地を考えると、「隈部城」と「熊耳城」は同一であり、「守山城」にあたることは確実である。これに対して、この時期隈府周辺で一町四方の館跡が築かれていることから、本拠機能はすでに隈府一帯へ移っていたと考えられ、「菊池陣城」「菊池館城」は当主館としての役割を終えた「菊之城」を指すのではないかと思われる。さらに『今川了俊書状』では「陣の城」「くま（隈）目の城」「木野城」が記されており、「くま（隈）目の城」が「隈部城」、「陣の城」は「深堀時久軍忠状」などに記された「菊池陣城」「菊池館城」と同一のものと考えてよいだろう。また、弘和2（1382）年の『菊池武朝申状写』『栗室親善申状写』では「守山城」の記述があり、当時からすでに守山城の城名で呼ばれていたことがわかる。

このように、中世当時の現存する文書からは、菊池氏が本城を護るために外城を築き、それが十八外城と呼ばれていた事実はない。ではいつのころから十八外城がみられるようになるのだろうか。

時代が下り、江戸時代前半の17世紀後半に宗善右衛門が著したと考えられる『菊池温故』で「菊之池」「守山之城（隈府古城）」「木庭村城山古城」「今村茶磨山城」「染土村古城」「茂藤里村古城」「木山村古城」「虎

口村古城」「白木村古城」「出田村古城」の10城。森本一瑞が著した『古城考』では「隈府古城」「茂藤里古城」「城山古城」「出田古城」「菊池古城」「木山古城」「陣内古城」「染土古城」「虎口の古城」「八方獄古城」の10城がそれぞれ記されている。中世の城館はすでに古跡としてあつかわれており、伝承や通説で、当時の人々に存在が伝わっていたことのあらわれであろう。

寛政6（1794）年に渋江松石が著した『菊池風土記』で「菊之城」「戸崎城」「古池城」「城林城」「元居城」「黄金塙城」「市成城」「掛幕城」「鷹取城」「五社尾城」「葛原城」「亀尾城」「馬渡城」「打越城」「正光寺城」「増永城」「台城」「神尾城」が十八外城としてあげられ、初めて十八外城が提唱された。

『菊池風土記』以外で、十八外城とは明らかに異なる城の存在が示されていることから、菊池周辺には18以上の城が築かれていたと推測される。また十八外城に数えられている城にも、真偽が明らかでないものや平野部に築かれているため館ととらえた方がよいものもある。かつては当主館であったとみられる北宮館（菊之城）があげられていることをみても、城の性格に関係なく、きりよく18ヶ所にまとめられたものと推測される。ただし『菊池風土記』以前に呼ばれていなかったかどうかは不明である。

嘉永2（1849）年に田中元勝は『桃元問答』で「寺尾野」「盤闇久（ばんじゆく）」「虎口」「穴河（穴川）」などの諸城、「陣の城」「木野の城」「水鳥の古城（台城）」をあげ、「（前略）菊池の十八外城といふは是も土俗のいひ傳へたことなればいつ頃の事なりしもさたかならざれども（後略）」と、地元でいつのころから伝えられていたかは定かではないとしているもの言及しており、渋江松石が提唱した十八外城は、ある程度、知識人の人口に膾炙していたものと理解してよいだろう。

十八外城は昭和40年代に市の文化財に指定を受けている。多くが発掘調査などによる実証はされておらず、所在地の比定はそれ以前の伝承によるものであろう。今後は北宮館跡だけでなく、他の城についても確認調査などにより実像を解明することが課題である。

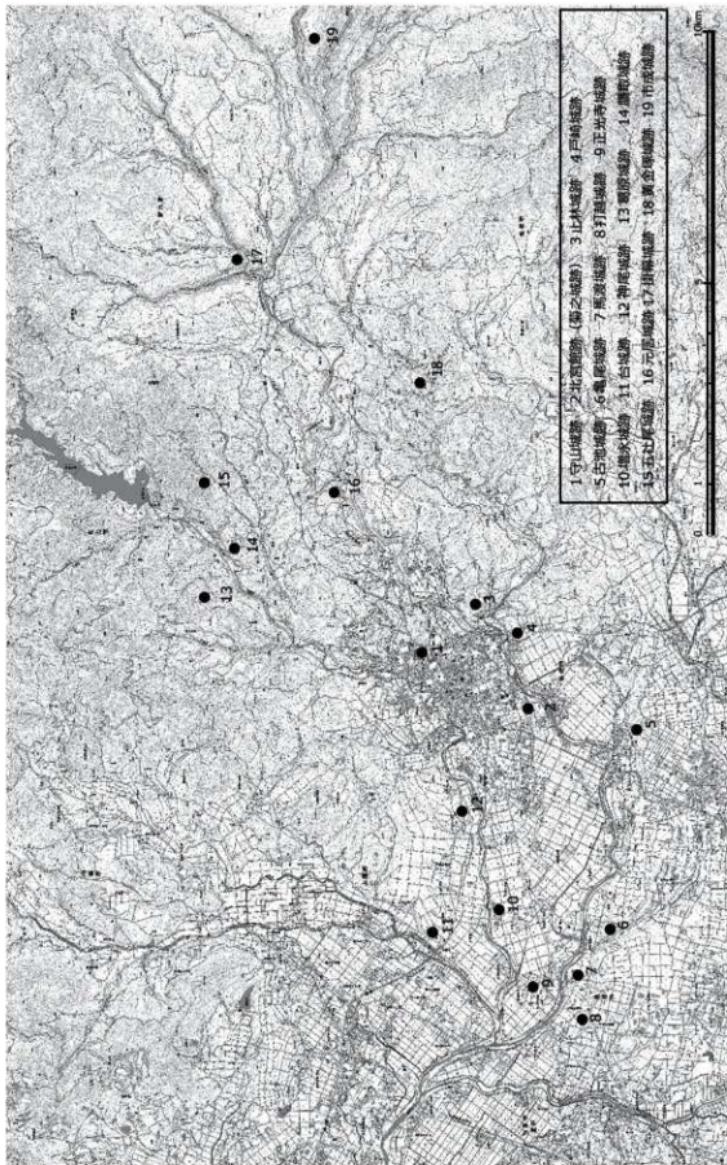
第2節 事業目的

前節で述べたように、菊池氏は11世紀から16世紀初期まで中世肥後国を代表する武士団であった。鎌倉時代には国内の有力御家人として勢力を持ち、南北朝時代には九州官方勢力として動乱の中心であった。南北朝合一後も室町時代を通して肥後守護職にあり、権力がおよぶ支配領域は肥後・筑後二ヶ国にまたがる。菊池氏が中世の九州において政治、軍事、文化の面から果たした役割は大きく、その活動の足跡をたどり、歴史的価値を解明することは、肥後ののみならず九州の中世史を理解するうえで、欠かせないといえよう。

しかし菊池氏の正統は16世紀初頭に途絶えており、それ以降は記録の断絶がみられる。そのため菊池氏の動向は伝承などに依るところが大きく、近代に入り再評価されるようになってからも、歴史的な価値が実像を反映しているとはいがたい。地元菊池では現在でも、皇室への忠誠が戦前に高く評価されていたことも含めて、菊池氏に対する敬愛の念が深いが、江戸時代に著された書籍をもとにした伝承の影響が強く、実態は充分に解明されていない状況であった。近年は中世当時の一次資料を基にした検討が進み、実像は徐々に明らかにされつつあるものの、発掘調査等による実証は充分ではなかった。

平成23年度に地元区から、北宮館跡の実態調査が要望された。菊池市教育委員会による確認調査の実施により、遺構の検出、遺物の出土などの調査成果があり、初代則隆が最初に居を構えた場所との伝承も併せて考えると、この場所が菊池氏の本拠である可能性は高く、実態を解明する糸口になるのではないかと考えられた。この調査をきっかけとして、菊池市教育委員会は菊池氏の実態の解明を進めていくこととなった。

本事業は菊池氏の城跡およびその周辺の発掘調査、文献調査、踏査などを実施することにより中世の景観の復元を試み、ひいては肥後國中世史を体现する菊池氏の動向を理解し、その実像、歴史的価値を解明することを目的とする。



第2図 菊池十八外城跡分布図

第IV章 確認調査と発掘調査の成果

第1節 深川・北宮地区の確認調査の成果

(1) 菊之池B遺跡の確認調査

① 調査区の設定と名称について（第3図）

現地踏査の成果を基に確認調査候補地を選択し、地権者の同意が得られた箇所を調査区とした。確認調査は令和元年度と令和2年度に実施した。令和元年度の調査区は1箇所なので、R 1を調査区の頭に付けて「R 1調査区」とした。令和2年度に実施した調査区はR 2を頭に付けて、調査開始順にA区～F区とし、「R 2 A区～R 2 F区」の名称にした。各調査区の所在地は下記のとおりである。

R 1調査区：菊池市深川菊ノ池63-1（深川区のゲートボール場）

R 2 A区：菊池市深川菊ノ池64-5

R 2 B区：菊池市深川菊ノ池63-6

R 2 C区：菊池市深川菊ノ池60

R 2 D区：菊池市深川菊ノ池36

R 2 E区：菊池市深川菊ノ池30-1

R 2 F区：菊池市深川御興体349

② R 1調査区の確認調査成果について

調査区は略長方形の平面形を呈し、北端・南端の長辺は約5.5m～6m、東端・西端の短辺約4.7m～4.8mである。当初、細長いトレンチでの確認調査を行っていたが、1号石組の一部が明らかになったので、石組の形状を把握するため、調査区を拡張した。拡張後の確認調査は必要最小限度の範囲で掘り下げを行い、可能な限り現状を保存することに努めた。

a 土層について（第4図）

第4図は調査区の土層図である。調査区の東壁をA-B、南壁をC-D、北壁をE-F、西壁をG-Hとした。調査区の基本土層は下記のとおりである。

表土：ゲートボール場の表面土で、砂が多く含んでいる。厚さ約20～50cm。

I層：灰褐色土の水田耕作土である。調査区西側に隣接する佐保川八幡宮への御神米を以前に栽培していたものである。層の厚さ約5～15cm。

II a層：灰褐色土の水田床土である。鉄分を多く含み、粘性がある。層の厚さ約5cm～13cm。

II b層：橙褐色土の水田床土である。鉄分を多く含み、粘性がある。層の厚さ約4cm～20cm。

II c層：II b層より黒味が強い。層の厚さ約1cm～15cm。

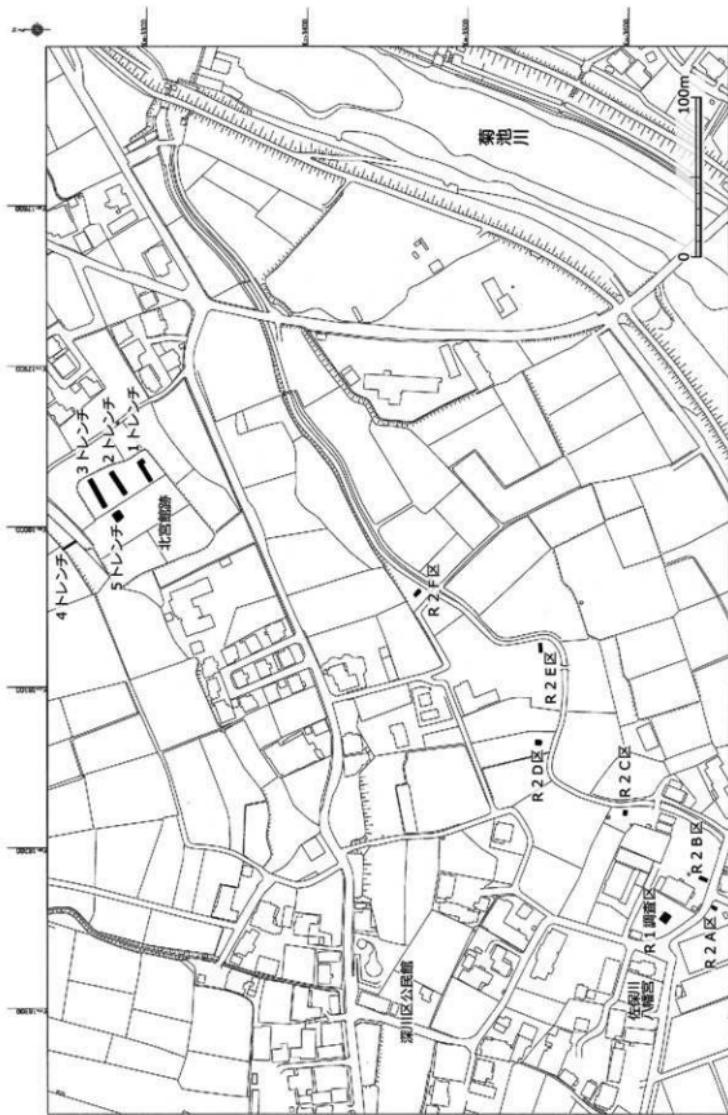
III a層：暗褐色土で、粘性がある。土の粒子は粗い。炭化物・砂礫・橙色粒を含む。土師器・青磁・近世陶磁器を包含する。層の厚さ約4cm～35cm。この層が堆積したことで、石組は機能しなくなる。

III b層：III a層よりやや明るい暗褐色土である。土師器・青磁・近世陶磁器が出土する。層の厚さ約4cm～35cm。この層の堆積で石組の機能は停止する。

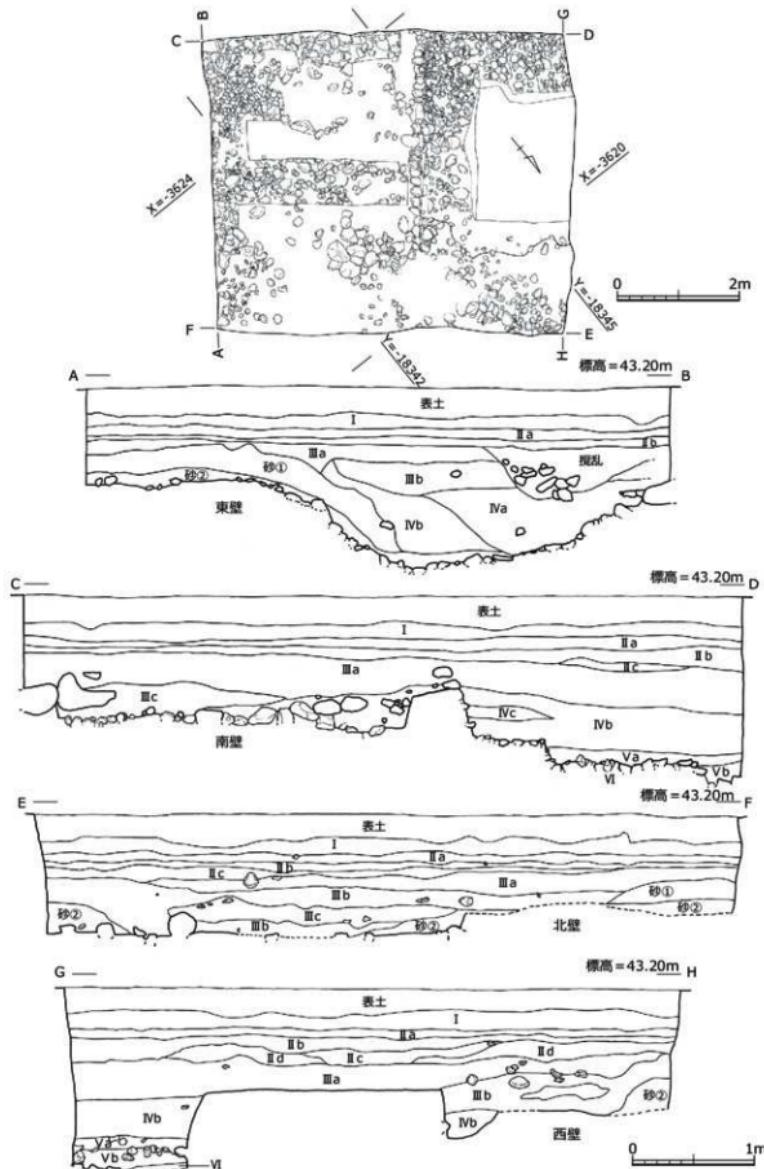
III c層：小礫（砂利）を多量に含む層で少量の暗褐色土が混じる。南壁・北壁の土層で確認できる部分的な堆積層である。層の厚さ約2cm～40cm。

IV a層：暗褐色土で黒味が強い。土師器・青磁などの遺物包含層である。1期～3期の石組の覆土である。層の厚さ約2cm～50cm。

IV b層：IV a層よりやや明るい土層で、土の粒子が細かく、粘性が強い。土師器・青磁などの遺物包含層



第3図 深川・北宮地区の確認調査位置図



第4図 R1 調査区土層断面図

である。1期～3期の石組の覆土である。層の厚さ約5cm～50cm。

V a層：黒褐色土で、やや粘性がある。土師器・青磁などを包含している。この層は2期石組の覆土や基盤となる層である。この層は南壁・西壁で確認できる。層の厚さ約10cm～25cm。

V b層：V a層に砂が混じった層である。土師器・青磁などの遺物包含層である。2期石組の基盤層で、この層より上位に石を積んでいる。南壁・西壁で確認できる層である。層の厚さ約10cm～15cm。

砂①層：灰褐色の砂層で、砂の粒子が細かい。河川で運ばれた砂の堆積層と考えられる。層の厚さ約2cm～25cm。この層はIV a・IV b層より下位で、VI層より上位の層である。V a・V b層との上下関係を確認できる堆積箇所がない。

砂②層：砂①層より砂の粒子が粗い灰褐色の砂層である。河川で運ばれた砂の堆積層と考えられる。層の厚さ約2cm～25cm。この層IV a・IV b層より下位で、VI層より上位に堆積している。V a・V b層との上下関係は確認できない。

VI層：暗褐色土で、砂礫が多量に含まれる。部分的に橙色の鉄分を含んでいる箇所がある。1期の石積の基盤となる層である。南壁と西壁の深掘りした箇所で確認した。層の厚さ約2cm～10cm。

堆積する範囲が限られた層

東壁土層の擾乱層：III a層を掘り込んだ擾乱層である。最深部の層の厚さ約40cm。

南壁土層のIV c層：IV a層に砂粒が混じった層である。層の厚さ約2cm～10cm。

西壁土層のII c層：II a層に黒色土が混じった層である。層の厚さ約2cm～15cm。

西壁土層のII d層：灰褐色土層で、II a層・II b層より鉄分が少ない層である。層の厚さ約2cm～15cm。

b 確認した造構について（第5図）

この調査区で確認した造構は、西側で検出した1号石組と東側で確認した2号石組である。1号石組と2号石組では、造構の基盤となる層の違いから2時期に分けることができる。さらに、1号石組では石組の積みなおしを1回行っており、3時期の変遷が確認できた。

1号石組と2号石組の時期は、VI層を基盤として、その上面に石を積んでいるのが1期で、第5図ではビンク色で示している。V a層・V b層の基盤層の上位に石を積んでいるのが2期の石組で、第5図では青色で表現している。1号石組の南西端部の直線状の石組の一部とそれに続く周辺の石組を2期の石組の上面に積み直したもののが3期の石組で、第5図では黄色で彩色している。

2期の石組下部に、1期の石組が存在している。そのため、1期の石組の全体を確認するには2期の石組を掘り下げ、取り除く必要がある。2期の石組の掘り下げを行うことは造構を壊してしまう。それで、1期の石組の概要が把握できる必要最小限度の範囲の掘り下げを行うことにして、小トレンチを設定した。1号石組の小トレンチは調査区の西角に設定した。2号石組では、調査区の東壁のほぼ中央部に直行する状態で小トレンチを設定した。

調査区の北東隅近くの砂①層面でピット1基を確認した。このピットは底面近くの深さ約5cmしか残ってなく、どの時期に伴うかが明確にできなかった。ピット平面形は楕円形で、長軸約30cm、短軸約24cmである。ピット覆土は黒褐色土で、しまりがあり、橙色粒を含んでいる。

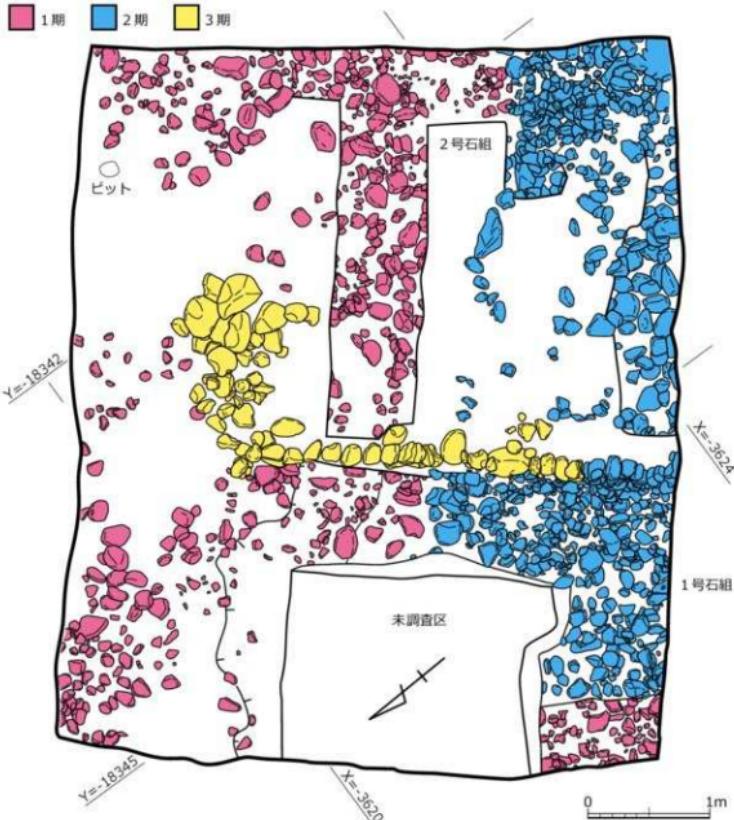
c 1期の石組（第6図・第7図）

1期の石組は1号石組と2号石組で確認した。

【1号石組】

1期の石組は調査区の北西隅から東側にかけての部分と調査区の南西隅の部分で確認できた。石組は拳大から人頭大の大きさの石を組み合わせているものが殆どで、約5cm以下の小石が少數混じる。1期の石組は、2期の石組の下部と未調査区にも存在すると想定できる。確認した箇所と石組想定箇所を併せて考えると、1号石組の全体像はU字形の平面形を呈すると考えられる。

第7図A-Bは1号石組の1期の断面図である。VI層の上部に平坦な一段の石列を確認した。確認調査は、この石列の下部にも石が存在することをボーリング棒の刺突で確かめるまで止め、下部の掘り下げは行っていない。この平らな石組は1号石組の底部上面と考えられる。1号石組の長軸方向の断面図は、第7図C-Dと第7図E-Fを図面上で複合したものである。調査区の北側端部から南方向に約14m伸びた範囲にはほぼ平坦な面がある。この平坦面南側端部に緩い段があり、南側に向けて徐々に低くなる。この高低差は約60cmである。北側の平坦面に続く東側の石積は、U字形の平面形の1号石組の東側端部と壁面である。こ



第5図 R1調査区 1号・2号石組実測図（1期～3期）

の端部から壁面の断面形状は擂鉢状になる。第7図G-Hはこの擂鉢状の壁面の裾部を通るように設定した断面図ポイントである。断面図を見ると、北側から南側に向かって低く傾斜するVI層の上部に石を積んでいる。VI層の北側端部（第7図H）とVI層の南側端部（第7図G）の高低差は約50cmである。VI層の傾斜の最深部付近にV a層・V b層があり、石組の石の覆土になっている。この箇所以外の石組の石の覆土はIV b層である。

【2号石組】

2号石組は調査区の東側から南側にかけての範囲で確認できた。調査の初期段階では、2期の石組を検出した。1号石組で1期の石組の存在が明確になっていたので、調査区の東壁周辺と東壁のはば中央から壁に直角方向に西側に向けて各々小トレンチを設定した。これらの小トレンチでは2期の石組を掘り下げて1期の石組を検出した。1期と2期との石組から検出した全体の平面形を考えると、東側から西側に向けて伸びるU字形の平面形をしており、その細くなつた先端部付近を確認した。1号石組に対して、ほぼ直角方向に位置するのが2号石組である。

第6図A-B、第6図C-Dは東壁と直角方向に設定した小トレンチの土層断面図である。第6図A-Bは小トレンチの北壁、第6図C-Dは小トレンチの南壁の土層堆積と石組の断面形を示している。A-Bの断面図では、東壁付近に最大深部約20cmの擂鉢状に窪んだVI層を基盤とした石組があり、窪みの肩部に大型の石（長軸の長さ約20cm）を並べている。この大型の石より西側には小型の石（長軸の長さ約2~10cm）をVI層を基盤としてはば平らに配置している。これらの石の上面を砂①層が覆う。C-Dの断面図では、東壁から約1.5m西側に離れた範囲に最大深部約60cmの擂鉢状に窪んだVI層を基盤とした石組がある。この窪みの肩部にはA-Bの断面図と同様に大型の石（長軸の長さ約15cm）を配置しており、そこより西側にはほぼ平坦な石組面が続く。石組の覆土は擂鉢状の窪みが砂①層・砂②層で、そこ以外の箇所は砂①層である。深掘りした小トレンチの擂鉢状の窪みの肩部に配置した大型石は、小トレンチ外の北東部1期石組の窪みの肩部にも存在している。2号石組のU字形平面形の北側付近の先端部の肩部には意識的に大型の石を配置していることが確認できた。第6図の網掛けした石が肩部の大型石である。

d 2期の石組（第8図～第10図）

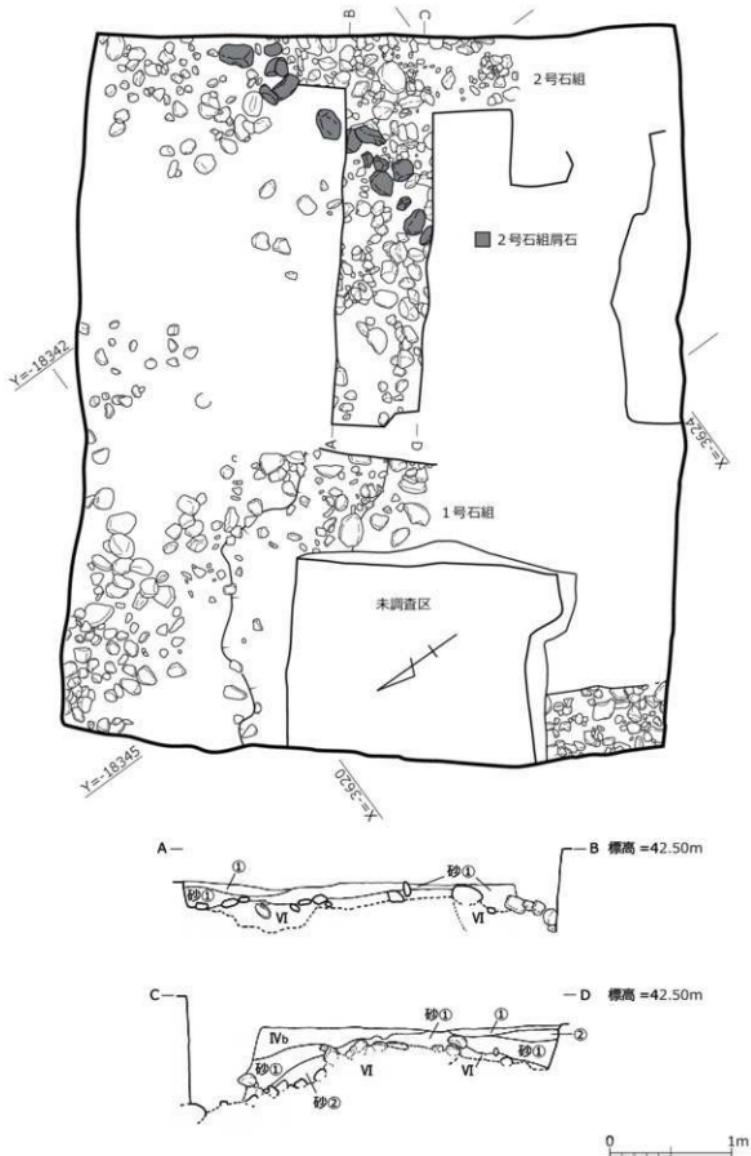
第8図は2期の石組が残存している箇所の実測図である。2期の石組は1期の石組の上部にも存在しているが、1期の石組を確認するために2期の石組を掘り上げ、深掘りした箇所には残っていない。2期の石組で残っているのは、1号石組の南西部から南東部の一部分である。2号石組で残っているのは南西部から南東部にかけての範囲である。2期で使用されている石の大きさは1期のものと同様である。

【1号石組】

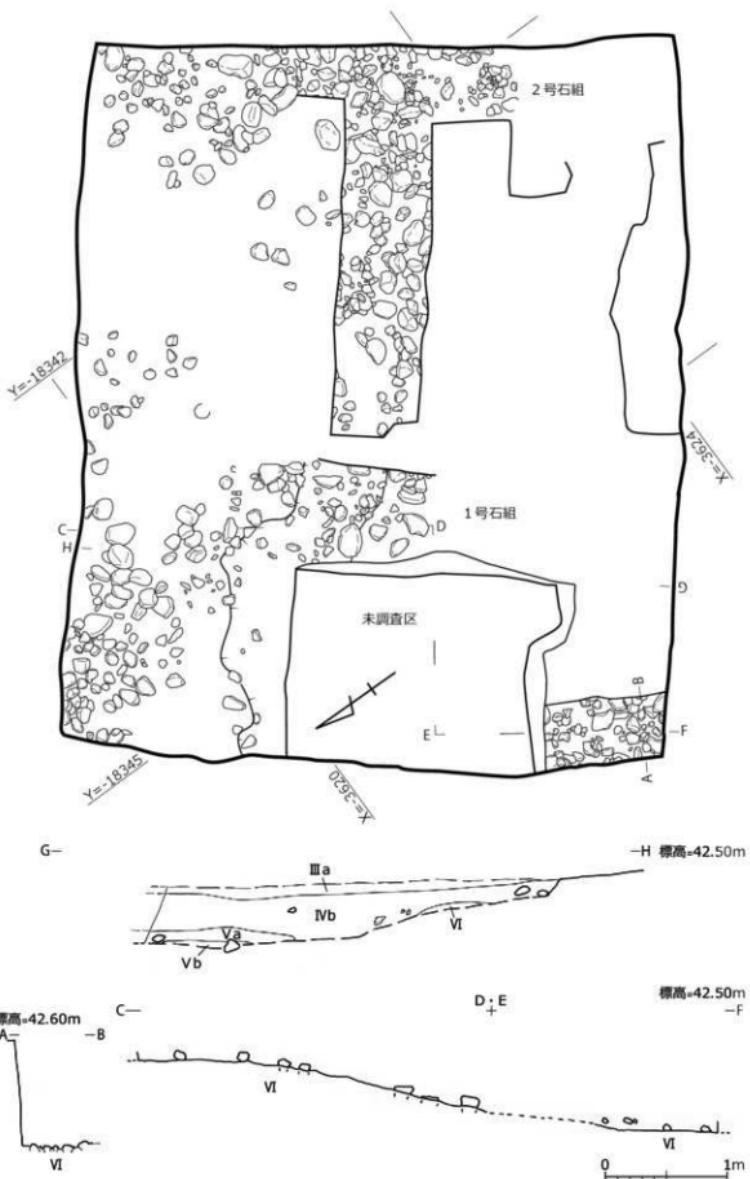
第8図A-BはU字形の平面形の東西方向の断面図である。全体形を想定すると、U字形平面形の短軸方向の横断面図の約半分になると考えられる。断面図を見ると、凹部の底面は二段の階段状構造になっている。凹部のはば中央部と考えられる箇所が最も深く、壁寄りの箇所に外側に開く状態の段差を設けている。段差の高低差約20cmを測る。この段差高所から壁に向かって約30~35cmの平坦面が伸び、壁端部に向かってさらに段差を作っている。床付近の段差と比べると、段差の勾配が急であり、高低差約45cmである。1号石組の東壁端部の最上部には調査区の南端部からは一直線に大型の石（長軸の長さ約10~20cm）を配置している。この大型石が配置された箇所が石組の頂部と考えられ、本来は壁端部に沿って全面に施工されていたと推定できる。これらの2期の石積はV a層・V b層を基盤として作られている。

【2号石組】

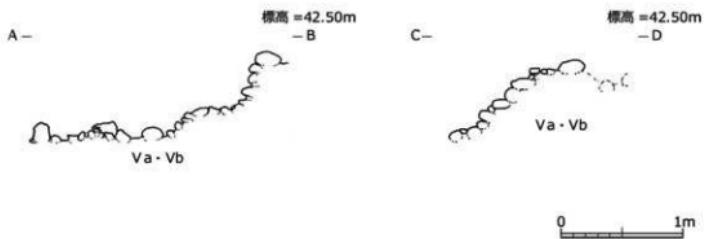
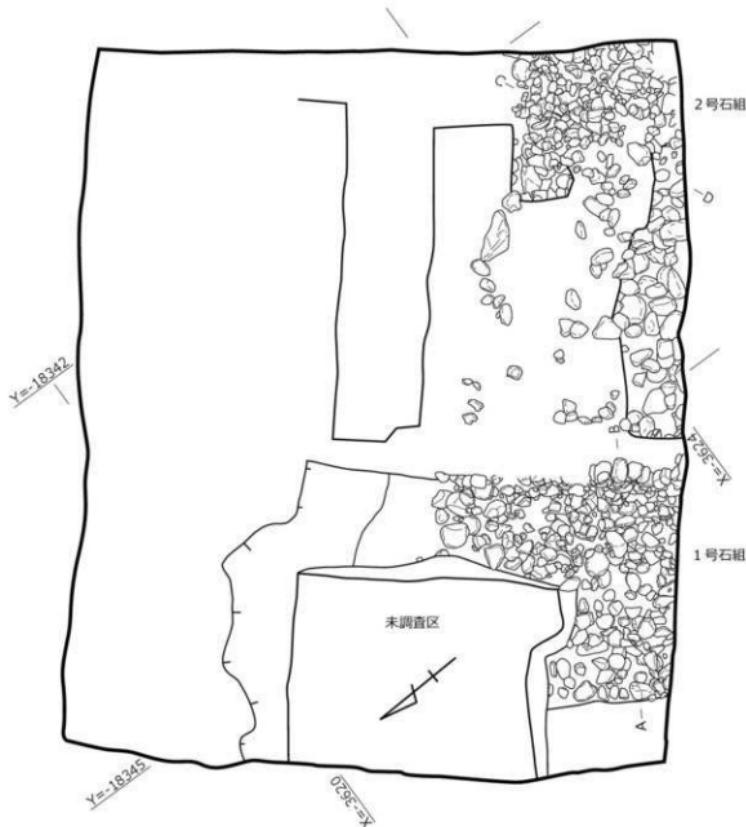
2号石組の残存部は、東側から西側に向けて伸びるU字形平面形の先端部から南側に向かって広がり始め



第6図 R1調査区1号・2号1期石組実測図・土層断面図(1)



第7図 R1調査区1号・2号1期石組実測図・土層断面図(2)



第8図 R1調査区1号・2号2期石組実測図

た箇所と考えられる。第8図C-Dは先端部付近の横断面図であり、擂鉢状凹部の西壁付近のものである。石は上部に積み上げるごとに中心部から外側にずらして組んでおり、上端部には幅20~30cmの平坦面を作っている。この平坦面と確認できた最深部との高低差は約50cmである。石組の基盤となるのはV a層・V b層である。

第9図は2号石組の2期石組を部分的に深掘りした小トレンチの実測図である。小トレンチはR1調査区の南壁沿いのほぼ中央部に設定した(第9図白抜き部分)。検出した石積の上面から約20cmの深さにある石と石の隙間から口縁部を上に、底部を下にした状態で、口縁部付近を約1/4欠いた完形に近い土師器が出土した。出土状況から、自然堆積で土師器が包含されたのではなく、意識的に石組の中に置いたと考えられ、何らかの行為に伴うものと判断できる(図版2-2-3)。第10図はその土師器の実測図である。底部はやや厚く、見込みにヨコナデの後に指オサエを行った痕跡が一か所あり、外底部の回転糸切痕の上に板目状の圧痕が僅かに確認できる。この土師器は美濃口編年10期~11期(13世紀後半~14世紀前半の時期)である(美濃口1994)。この土師器から2号石組の2期は13世紀後半~14世紀前半の頃に築造されたと考えられる。

e 3期の石組(第11図)

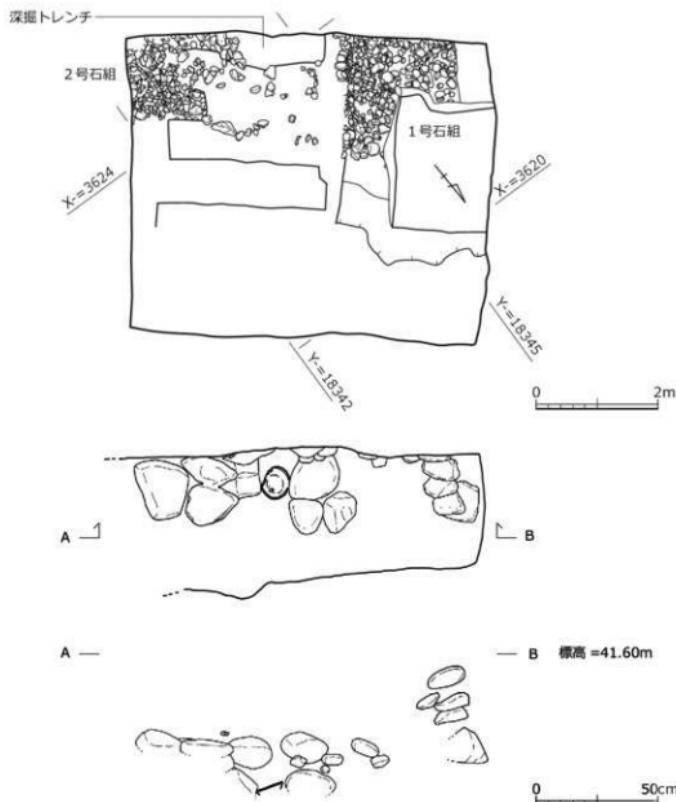
R1調査区で3期の石組を確認できたのは1号石組の一部分である(第11図上図)。1号石組の東壁に沿った状態で大型の石(長軸の長さ約15~70cm)をほぼ一直線に組んだ箇所とその箇所の北側端部から東側に石を組んだ部分に3期の石組がある。第11図下図は2期と3期の石組の関係を示した平面図と見通し図である。この箇所の石組、土層状態を観察すると、2期石組が壊れた部分に石を積み直したものが3期の石組である。第11図の平面図では2期の石組を白抜き、3期の石組を網かけで示している。第11図の見通し図では2期石組と3期石組の境を太線で表現している。この線の下部の石は2期石組のもので、線より上部が3期石組に伴うものである。

見通し図の土層堆積状況を見てみる。境目線が下に窪んだ最深部の下部に基本土層の砂①層・砂②層が堆積している。これらの層は河川による堆積と考えられるので、2期の石組が河川の流れが原因で崩落したと推定できる。この崩落箇所を修復したのが境目線より上部の箇所と判断できる。修復状況を土層図から考えると、石を全面に補うのではなく、ほぼ水平に積んだ版築状の土の上面に石を組んでいる。版築状の土は①層~⑥層に分かれる。各土層は以下の通りである。

- ①層: 暗褐色土で、砂質である。層の厚さ約5cm~15cm。
 - ②層: 暗褐色土で、①層よりは明るい粘質土である。層の厚さ約5cm~15cm。
 - ③層: 暗褐色砂質土である。層の厚さ約5cm~30cm。
 - ④層: 暗褐色粘質土である。層の厚さ約5cm~7cm。
 - ⑤層: 暗褐色粘質土で、④層よりは粘性が弱い。層の厚さ約5cm~10cm。
 - ⑥層: 暗褐色砂質土である。層の厚さ約2cm~15cm。
- ①層~⑥層は意識的に砂質土と粘質土を区別して積み重ねている。最上面に積んだ石の基盤となる層は、北側端部が①層で、その南側の一部が②層、南側端部が③層になっている。

f R1調査区の出土遺物について(第12図~第15図)

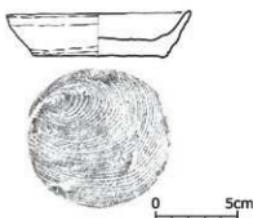
第12図1~11はR1調査区から出土した遺物実測図である。10は3期の石組に伴う版築状の①層から出土した土師器の大片である。外底部は摩耗しているが、回転糸切痕を確認できる。1・2は砂②層出土の土師器小皿片である。1・2の外底部には回転糸切痕がある。3・4はⅢ層から掘り込まれた溝状造構の覆土から出土した。3は外底部の狭い範囲に糸切痕がある土師質土器で、内外器面の色調は白味が強く、器壁全



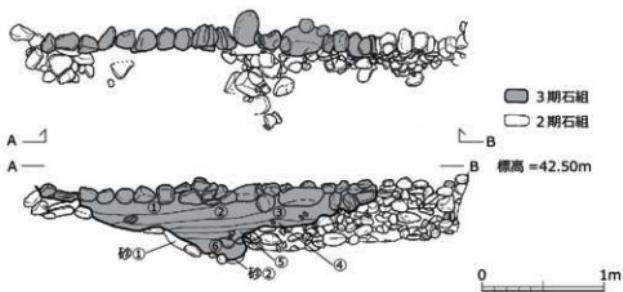
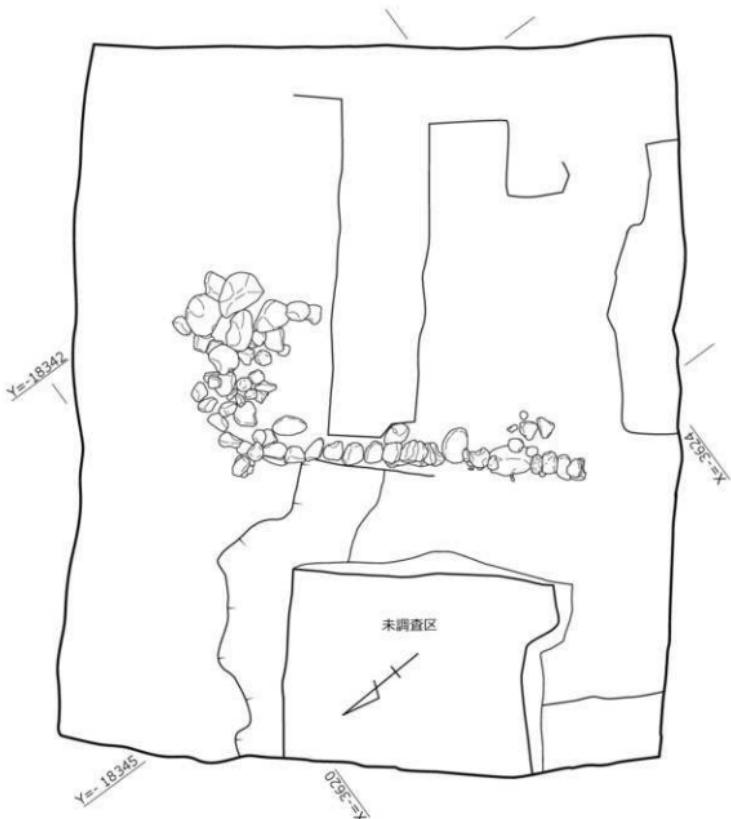
第9図 R1調査区2号石組2期深掘トレンチ実測図

体が薄い。熊本城下で多く出土しており、18世紀代と考えられる（美濃口氏ご教示）。4は土鉢片である。

5・6は砂②層出土の土師器坏片である。外底部には回転糸切痕はあるが、板状圧痕は確認できない。見込みの指押さえも施していない。7は1号石組の2期石組中から出土した土師器小皿片である。外底部に回転糸切痕が残る。8は1号石組の2期石組中から出土した土師器大坏片である。外底部には回転糸切痕があり、部分的に板状圧痕が確認できる。9は2号石組のVI層から出土した土師器小皿片である。外底部に回転糸切痕が残る。11は1号石組のV層から出土した瓦質の擂鉢片で、斜方向の条線がある。土師器坏・小皿の年代は美濃口編年10期～11期（13世紀後半～14世紀前半の時期）である。



第10図 R1調査区2号石組
2期石組出土土師器実測図

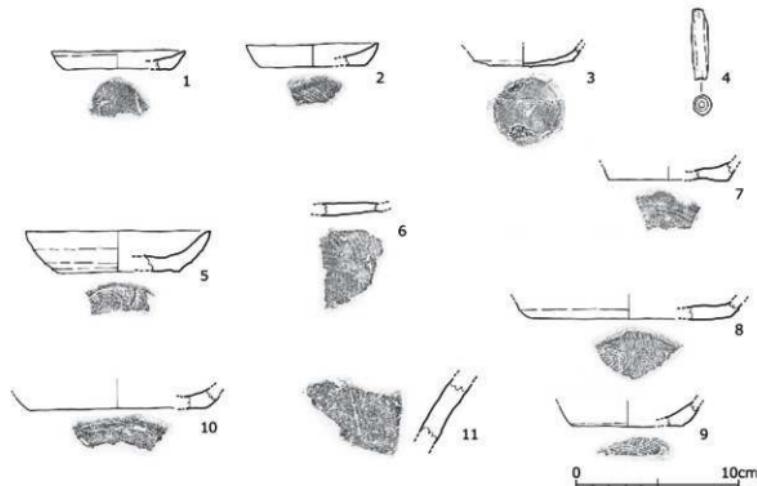


第11図 R 1 調査区 1号石組 3期実測図

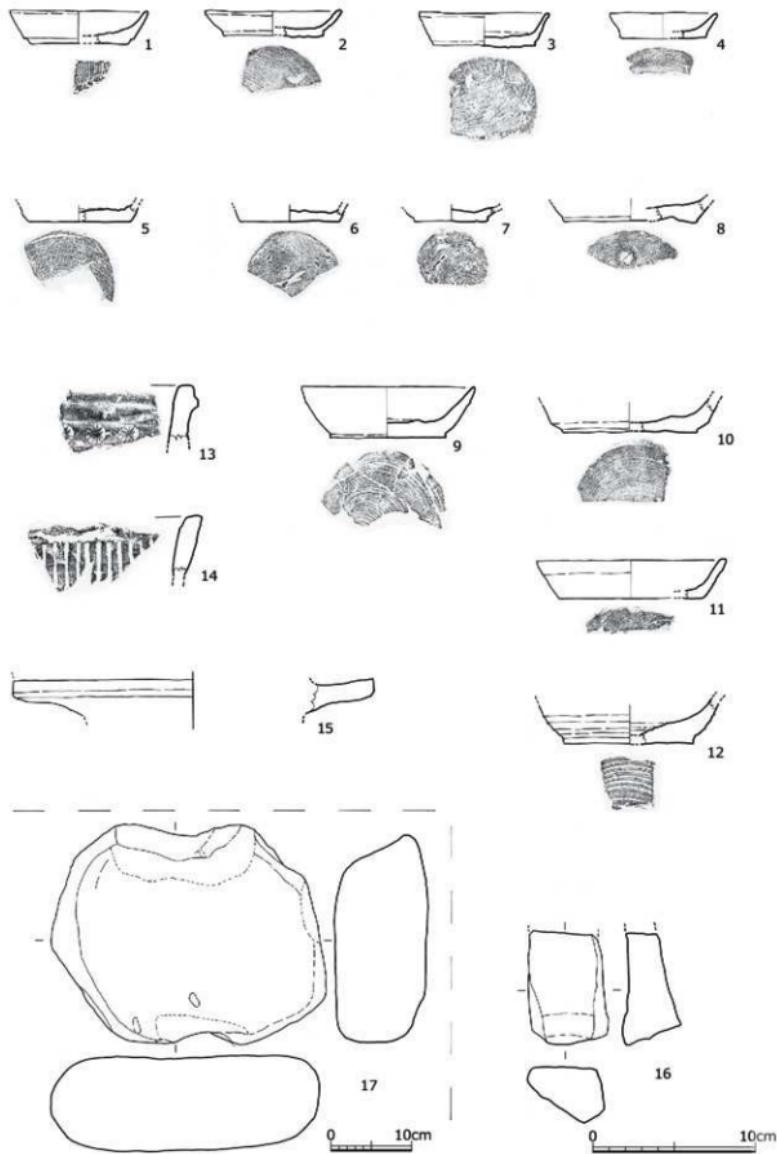
る（美濃口1994）。11の鉢片の時期は14世紀～17世紀の幅があるが、他の遺物比較やV層から出土していることから、14世紀代の可能性がある。

第13図1～17はⅢ層から出土した遺物である。1～7は土師器小皿片である。外底部に回転糸切痕がある。2・3の外底部には板状圧痕が部分的に確認できる。8～12は土師器坏片で、外底部に回転糸切痕を確認できる。8の外底部には部分的に指頭押圧痕が残る。12の外器面には稜線状のヨコナデの痕跡が確認できる。15世紀代の製品と考えられる。13・14は瓦質の火舎口縁部片であろう。13の外器面の口縁部直下に凸帯が巡り、その下部に花文のスタンプが施されている。14は外器面の口縁部下に横方向の凹線、その下部に縱方向の凹線を並べている。15は茶釜型の瓦質土器の羽付近の体部片である。破断面に斜め方向の沈線があり、接合面と考えられる。16は砂岩製の砥石片である。表裏面に著しい摩耗痕が残る。17は石製品である。平面形が大型の楕円形（長軸約33.9cm、短軸約26.4cm）を呈した輝石安山岩を利用している。上下両端側面の中央部付近が内側に窪んでおり、強い摩耗が全面に及んでいる。これらの窪み周辺の上下平坦面にも摩耗痕が確認できる。摩耗度は側面の窪み箇所が強く、平坦面は側面と比べるとやや弱い。左側面は中央部のやや尖った箇所から上下端部に向かって伸びる面に強い摩耗痕が確認できる。右側面はほぼ直線的にのびる面全体に強い摩耗痕が残る。その側面に隣接した上下平坦面にも摩耗痕があるが、摩耗度はやや弱い。石製品の重さが約17.8kgあり、摩耗している部分に網状のものを巻けば碇としての機能を果たすと考えられる。

第14図はR1調査区から出土した磁器である。1・2・4～6・9はⅢ層出土。3はサブトレンチである北西トレンチ出土。7・12はⅢ層から掘り込んだ小溝跡出土。10は1号石組のⅢ層出土。11は砂②層出土。13は3期石組中から出土。14は3期石組の覆土出土。1は龍泉窯系青磁瓶の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部に後線があるので、耳付タイプの可能性がある。15世紀代の製品と考えられる（中山氏ご教示）。2の口縁部片は龍泉窯系青磁碗I類で、大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられる（山本2000）。3の体部片は同安窯系青磁碗IまたはⅢ類で、大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられる（山本2000）。4は青磁の口縁部片で、釉・胎土が5と類似しており、同一個体の可能性がある。5の底部から体部にかけ



第12図 R1 調査区出土遺物実測図



第13図 R1 調査区Ⅲ層出土遺物実測図

ての破片は同安窯系青磁皿I類-2bで、大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられる（山本2000）。6の口縁部片は外器面に雨降柳文がある肥前磁器IV期（1690～1780）と考えられる（九州近世陶磁学会2000）。7は備前焼の甕か壺の口縁部片で、中世3期（14世紀中葉～15世紀前葉）から4期（15世紀前葉）の時期が考えられる（乗岡2005）。8は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。9は龍泉窯系青磁筒型香炉底部片と考えられる。外器面に貼付文が僅かに残り、内器面に帯状に施釉されている。大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭）～大宰府G期（14世紀初頭～後半）と考えられる（山本2000）。10の胴部片は同安窯系青磁碗III類と思われ、大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられる（山本2000）。11は白磁皿V類と思われる口縁部から体部にかけての破片で、大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）と考えられる（山本2000）。12は同安窯系青磁高台片で、外器面から外底部は露胎である。大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられる（山本2000）。13の胴部片は龍泉窯系青磁碗II類と思われ、外器面に鍋のない蓮弁文が施される。大宰府E期（13世紀前後～前半）と考えられる（山本2000）。14は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。小片であるが塊IV類の可能性がある。大宰府G期（14世紀初頭～後半）と考えられる（山本2000）。

第15図はR1調査区から出土した陶器である。1は1号石組Ⅲ層出土。2・3は1号石組VI層出土。4は1号石組IV層出土。5～8はⅢ層出土。1は白磁碗IV類の口縁部片で、玉縁より肉厚な口縁部である。外器面の一部に気泡がある。2・3は白磁高台付近の破片で、底部の器壁が厚く、外器面の高台付近が露胎である。白磁碗IV類と思われる。4は玉縁よりやや肉厚な口縁部をもち、白磁碗IV類であろう。1～4は大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）と考えられる（山本2000）。5は肥前陶器擂鉢胴部片で、17世紀中頃～後半の時期が考えられる（九州近世陶磁学会2000）。6は肥前磁器碗片で、1710年～1750年の時期が考えられる（九州近世陶磁学会2000）。7は肥前陶器甕の口縁部から頸部にかけての破片である。17世紀後半の時期が考えられる（九州近世陶磁学会2000）。8は陶器の胴部片で、外器面に刷毛目の波状文、内器面に刷毛目の横線文がある。肥前陶器IV期（1690～1750）と考えられる（九州近世陶磁学会2000）。

g 確認した遺構の用途

1号石組、2号石組は断面形が擂鉢状であり、底面にも石を配置した構造になっている。確認した土層の中に砂層があり、河川の堆積物と考えられる。1号石組は南側に向けて低く傾斜しており、その傾斜の南側隣接地であるR2A区は河川の中と考えられる（詳細は後述）。これらのことと併せて考えると、1号石組は南側の河川から侵入する構造で、川船の船着場と推定できる。2号石組は1号石組と直交する状態であるので、1号石組とは異なる方向で船が着く場と考えられる。

③ R2A区の確認調査成果について（第3図・第16図）

R2A区はR1調査区より南側に直線距離で約30mの箇所に設定した調査区である。調査区の平面形は略長方形である（約3.3m～3.5m×1.45m～1.9m）。R2A区では人工的な構造物は確認できず、調査区の下部には砂層があり、下面から水が湧く。このことから、調査区は河川の中と考えられる。R1調査区の1号石組は最下面が南側に低く傾斜しており、その先には河川が存在すると考えられる。両調査区の確認調査を総合的に判断すると、1・2号石組は河川から侵入した船が着岸する箇所と想定できる。

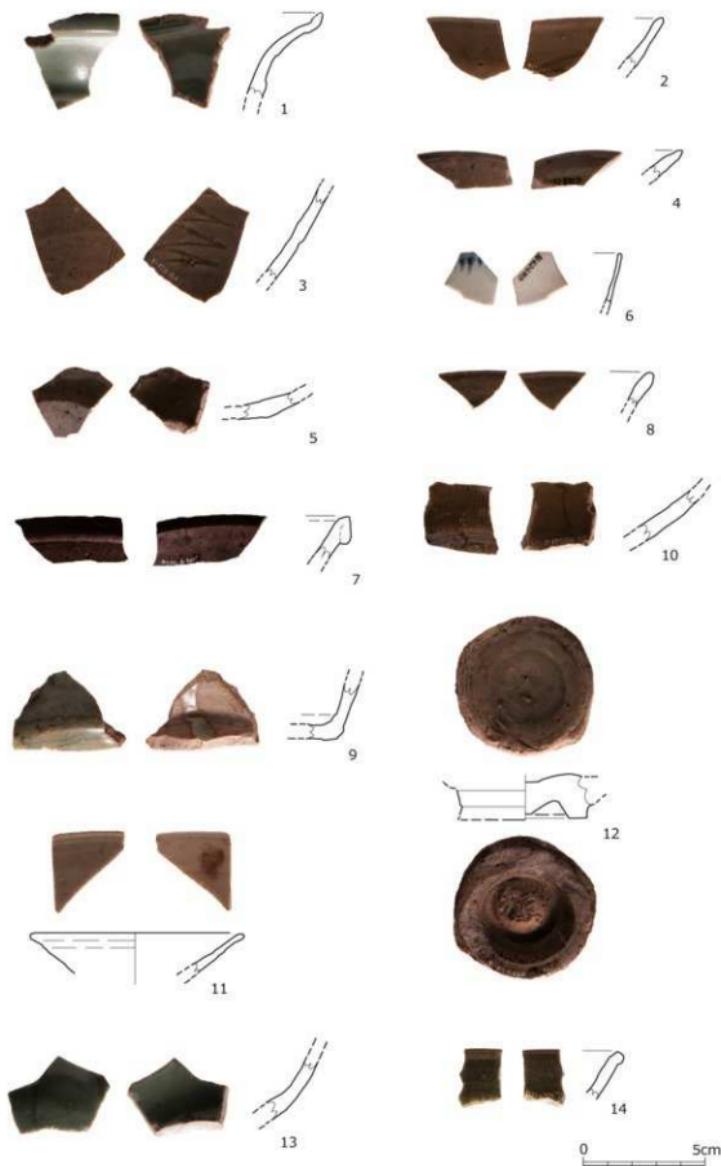
a 土層について（第16図）

第16図下は調査区の北西壁のA-Bで実測した土層図である。各層の状況は下記のとおりである。

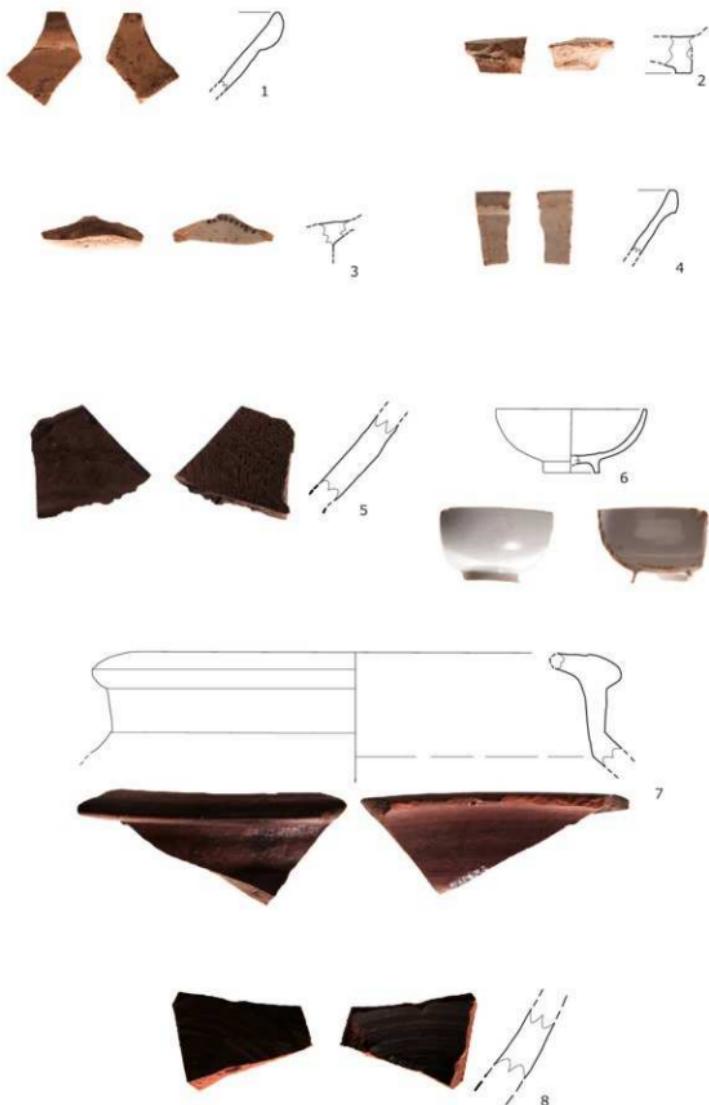
表土層：黒色土で砂を多量に含んでいる。層の厚さ約35cm。

客土層：暗褐色土で、黄褐色土が混じる。層の厚さ約35cm。

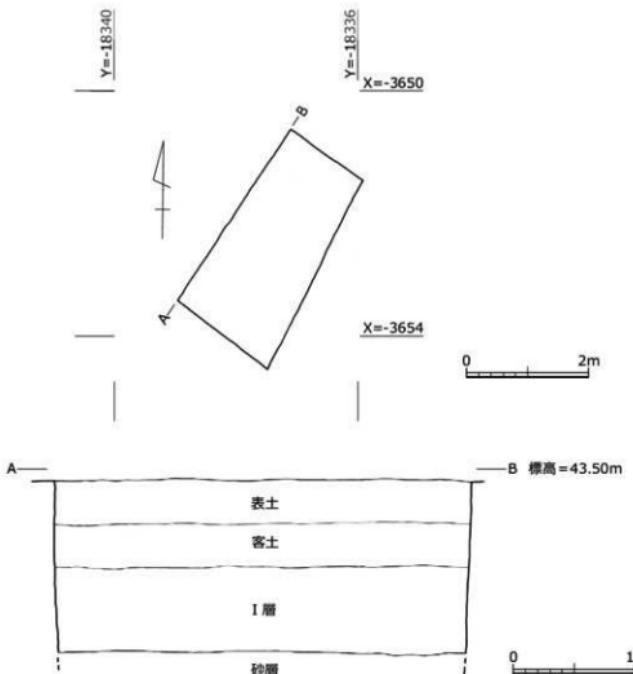
I層：やや暗い褐色土で、しまりがなく柔らかい。層の厚さ約110cm。この層の下部まで掘削すると、水



第14図 R 1 調査区出土磁器実測図 1



第15図 R 1 調査区出土陶磁器実測図 2



第16図 R2A区実測図・土層断面図

が湧き、調査区に水が溜まる。

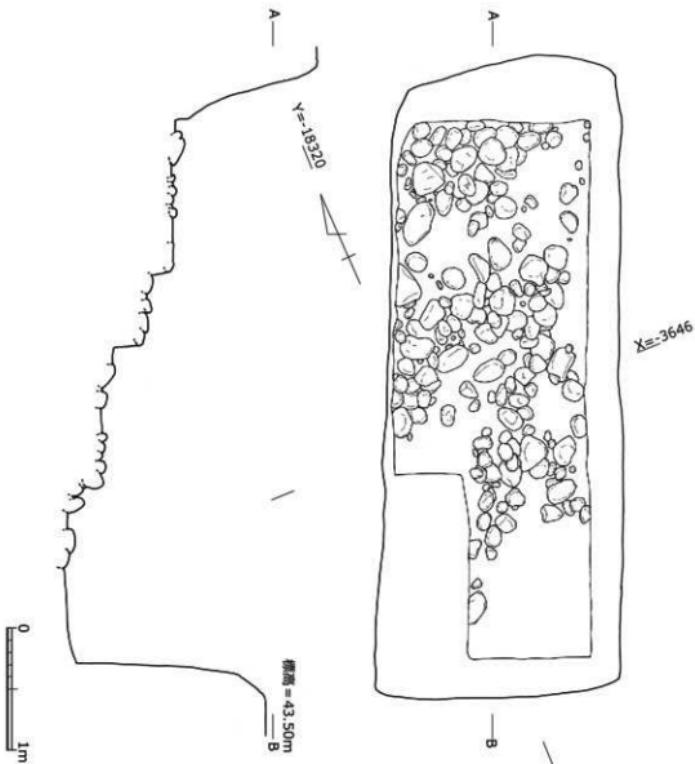
砂層：I層の下部で砂層を部分的に確認した。R2F区の④層と同じである。水が湧くため、この層の存在を確認して、掘り下げを終えた。層の厚さは未確認である。

④ R2B区の確認調査成果について（第3図・第17図）

R2B区はR2A区より北東側に直線距離で約20m、R1調査区の南東側に直線距離で約30mの箇所にある。調査区は略長方形（約4.9m～5m × 約1.7m～2m）の平面形で、調査区への昇降のための階段状足場以外の範囲を掘り下げた。この調査区では3号石組を確認し、史跡調査検討委員会の先生方の現地指導を受けた。指導内容はこの石組検出面下部の石積状況を確認する必要があるとのことであった。それで、調査区の東側半分の石組下部の状況を確認するために、長方形の長辺に沿った深掘り区を設定し、3回に分けて実施した。

a 3号石組検出時の状況について（第17図）

第17図は当初の石組検出時の実測図である。使用された石は角が丸い円礫が殆どである。石の大きさは概



第17図 R2B区3号石組実測図(検出時)

ね大(約 $40 \times 20\text{cm}$ ~約 $25 \times 15\text{cm}$)・中(約 $15 \times 15\text{cm}$ ~約 $15 \times 10\text{cm}$)・小(約 $7 \times 7\text{cm}$ ~約 $2 \times 2\text{cm}$)に分けることができる。この三種類の石を組み合わせて石組を築造している。

第17図A-Bはこの石組のはば中央部の断面図である。断面形を見ると、北端部が高く、南側に向けて低くなる四段の階段状の石組である。最上部を一段目、一段目から南側の最下部に向けて北側から二段目、三段目、最下部を四段目とする。一段目は調査区端部から南側へ約1.2m幅の平坦面を作っている。この平坦面端部にはほぼ垂直方向に約15cmの段がある。二段目は幅約60cmの平坦面を作り、その端部に高低差約20cmの段を設けている。三段目は多少の凸凹があるがほぼ平坦な幅約1.2mの面を築造している。その端部から斜めになった高低差約20cmの段がある。四段目は南側に向けて低くやや傾斜した面を作っている。調査区北側端部の一段目端部から南側の石積端部までの直線距離は約3mである。一段目の平坦面と四段目の最下部の高低差は約90cmである。この四段目では水が湧き、調査区に水が溜まるので、確認調査中は水中ポンプを常時作動させていた。確認調査終了時に水中ポンプを止め、翌日の朝には二段目まで水没する状態で

あった。この状況と石組の傾斜から考えると、石組の南側端部付近は河川の中、もしくは河岸近くと推定でき、3号石組は河川護岸の可能性が高い。

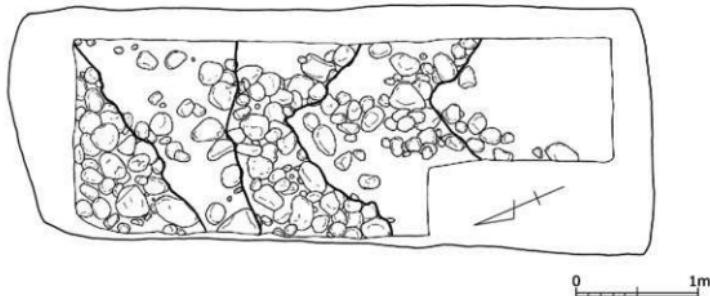
3号石組の構造的な特徴は平面図ではうまく表現できないので、石積の変化を現地で確認し、その変化状況を平面図で示したものが第18図である。一段目の石組では二箇所に特徴的な石積がある。調査区の北端部では大型や中型の石を南端部が直線的になるように配置している。その配置された石より北側の範囲に平坦になるように石を敷き詰めている。この平坦面は調査区北東隅から西側長辺に対して斜めに交わる。その平坦面の南端部の段差がある箇所には大型の石を長辺に対してほぼ直角に交わるように配列している。二段目の石組の特徴は南端部の段差にある。大型・中型の石を組み合わせて平面形がV字状になるように作り、ほぼ中央部が北側に窪んでいる。三段目は二段目と同様に段差部分に大型・中型の石を平面形がV字状になるように配置している。石組の検出面は当時の表面に近い状態と考えられ、大型・中型の石を意識的に用いたと思われる。大型・中型石で築造された区画の間には小型石が多く使用されている。

b 3号石組深掘り1回目の状況について（第19図）

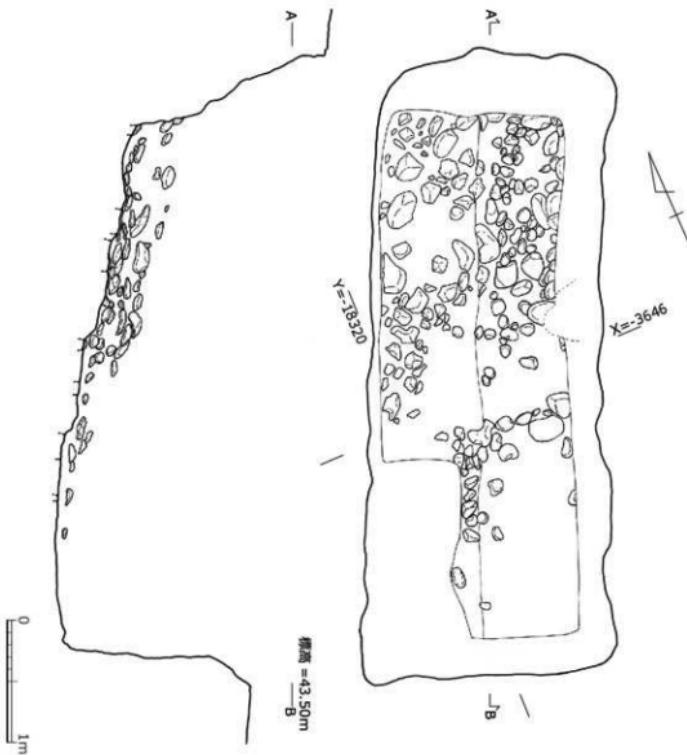
深掘り1回目は検出面から深さ約20~40cm掘り下げ、石積の石の1~3段を外した。石組の厚さは南端部が薄く、北側が厚いので、掘り下げ深度は北側が深く、南側が浅い。検出時の二・三段目南側端部に使われていた石の下部にも上面と同様な大きめの石を用いている。これら以外の場所に使われた石は小型化している。小型の石は石垣の裏込め石のような役割を担うと考えられる。検出面の石組には階段状の構造があつたが、その下部の石組には階段状の石組は存在しない。第19図A-Bは断面図と断面基準線より東側石積の見通し図を併せたものである。この図の最上面の石のまわりは検出面での石積で、これらの下部に1回目の深掘りで検出した石積を図示している。検出時石積と1回目の深掘りの石積状況を併せて見ると、北側端部から南側に向けて低く傾斜した石積を行っている。この箇所は北側端部から南側へ直線距離で約2mの所で、検出時の二段目の段差付近にある。この石積より南側には検出時の石積は存在しなく、深掘りで検出した石積が北側から南側へ低く傾斜しながら伸びている。

c 3号石組深掘り2回目の状況について（第20図）

2回目の深掘りは1回目の深掘り面より約20~30cm掘り下げた。調査区東壁・西壁の中に入り込んでいた大型石は取り除くと、壁崩落やその周りの石の原位置が移動するので、深掘りで石を取り上げなかった。



第18図 R 2 B 区 3号石組（検出時）石積変化ライン平面図

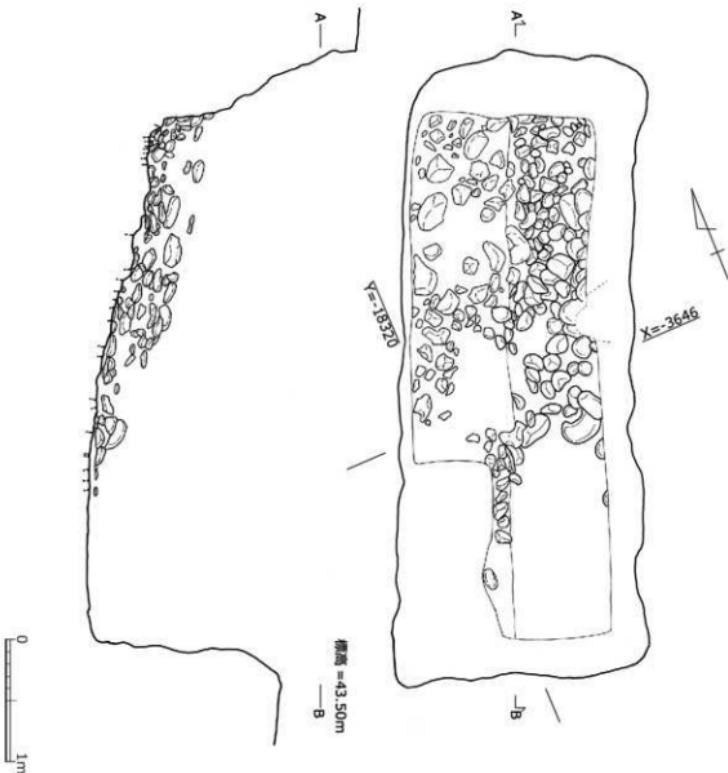


第19図 R 2 B 区 3号石組実測図（深堀1回目）

これらの大型石以外は小型石が多く使われている（約 10×5 cm～ 15×10 cm）。1回目の深掘り状況と比較すると、2回目で検出した小型石は石と石との空白が少なく、密の状態で石積を行っている。南側端部付近では石積は存在しなく、石組の基盤となる層が露出している。石積最南端の石から北側方向に直線距離で約80cmの範囲に積まれた石はほぼ水平の状態で築造されている。南側に低く傾斜した石積は南側端部で石積の工法が変化している。

d 3号石組深掘り3回目の状況について（第21図）

2回の深掘り面より約10cm掘り下げたのが3回目の深掘り面である。2回目の掘り下げで残した調査区の東壁・西壁に入り込んだ状態の大型石は取り除いていない。また、南側端部の石積基盤層が露出している範囲も掘り下げていない。今回の掘り下げで新たに検出した石は小型と中型の石が殆どである（約 7×5 cm～ 20×15 cm）。2回目の深掘りと比べると、石と石との間に空白があり、石の分布状況は疎である。積



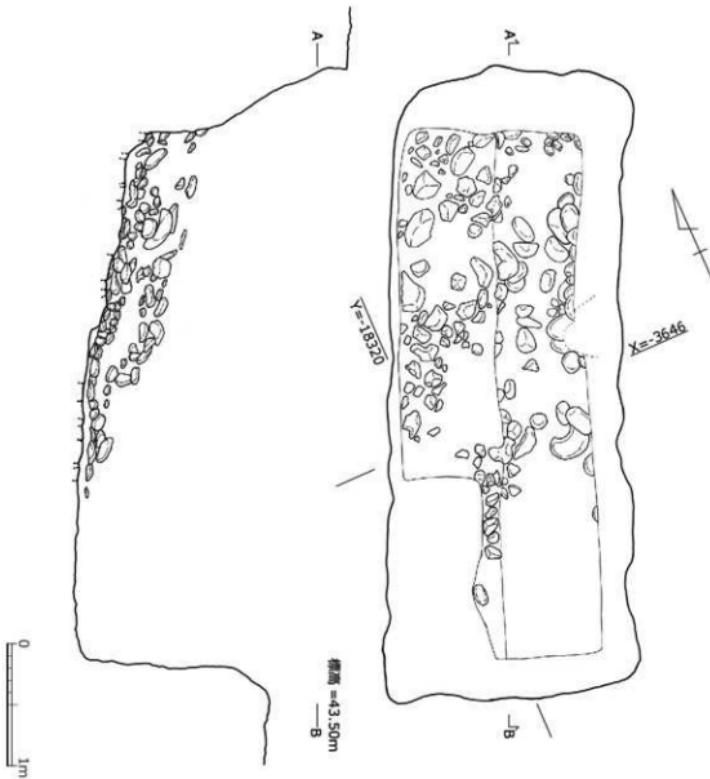
第20図 R 2 B区 3号石組実測図（深掘 2回目）

まれた石が少なくなる状況は石積の最下面に近い箇所に達していると考えられる。石組の南側端部付近では石積の基盤となる層まで掘り下げており、これ以上掘り下げるはと壁崩落の危険性があるので、この段階で掘り下げを終了した。

3回の深掘り終了段階で、石組の下部構造を見てみる。検出時の四段の階段状石組の二段目端部の境付近までは約50cm～60cmの厚さで、小型・中型の石を使って、北側から南側に向かって低くなるように傾斜のある石積を行っている。この箇所から石組南側端部である検出時の階段状石組三段・四段目は厚さ約20cm～30cmの厚さで、小型・中型の石を用いてほぼ水平になるような石積にしている。

e 3号石組深掘り終了後の土層について（第22図）

第22図は3回の深掘り終了後に、調査区の東壁A-Bで実測した土層断面図である。各層の詳細は下記のとおりである。



第21図 R 2 B 区 3号石組実測図（深掘 3回目）

客土層：灰褐色土で、山砂やコンクリート片が多量に混じる。層の厚さ約60cm～110cm。

I 層：灰褐色の旧水田耕作土である。R 1 調査区の I 層と同じである。調査区南側に部分的に残っている。
層の厚さ約 3 cm～10cm。

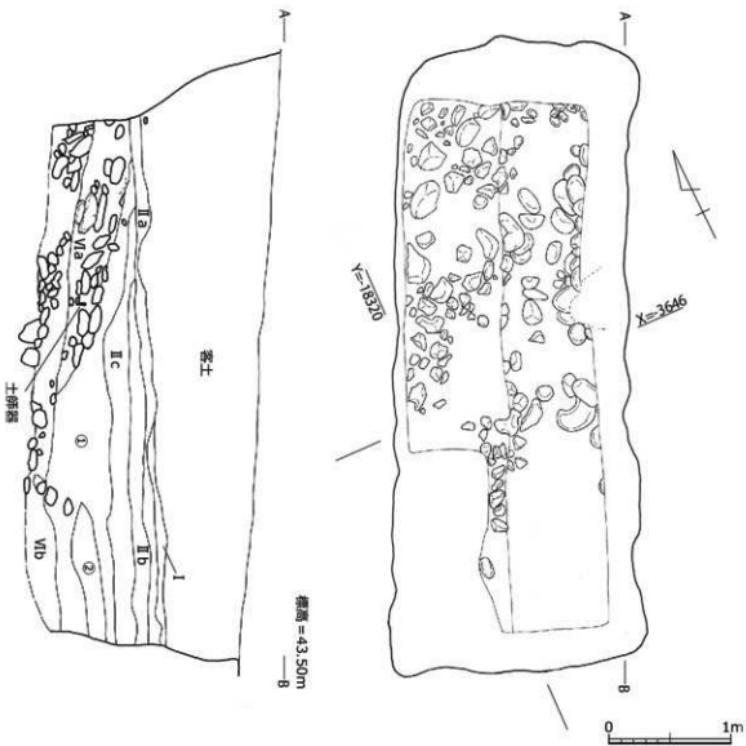
II a 層：赤褐色をした旧水田床土である。鉄分を多く含んでいるため、R 1 調査区の II a 層より赤味が強
いが、土質は同一である。層の厚さ約 2 cm～12cm。

II b 層：褐色の旧水田床土である。鉄分を多く含む。R 1 調査区の II b 層と色が異なるが、同一層である。
層の厚さ約 2 cm～16cm。

II c 層：暗褐色土である。R 1 調査区の II c 層と土色が異なるが、同一層と考えられる。層の厚さ約 5
cm～20cm。

①層：茶褐色土である。R 1 調査区の IV 層と土色が少し異なるが、土質は同一である。この層は石組の覆
土である。層の厚さ約 10cm～50cm。

②層：黒褐色土で、砂礫を多量に含む。①層中に存在する部分的な層である。層の厚さ約 15cm～20cm。



第22図 R 2 B区 3号石組深掘り終了後の土層断面図

VI a層：暗褐色土で、砂が混じる。R 1調査区のVI層と同じであるが、この調査区ではVI層が細分できるので、VI a層とVI b層とした。この層は積み上げた石組の上面に存在する層である。この層の石組の空隙から土器小片が出土した（第27図5、図版12・R 2 B区5）。層の厚さ約2cm～40cm。

VI b層：VI a層より砂や小石を多く含む暗褐色の土層である。この層の下端の境目までは掘り下げていなかった。確認できた層の厚さ約15cm～25cmである。

VI a層とVI b層は3号石組を築造する時の基盤となる層である。この層が石組の基盤となるのはR 1調査区の1期の1号石組・2号石組と同じであり、ほぼ同時期の築造と考えることができる。

f 3号石組深掘り調査区のサンプリングした石について（第1表・第23図～第25図）

3号石組の深掘りした場所から取り上げた石の中から、現場で石材が異なると判断した石をサンプルとして30個体持ち帰った。これらの石を菊池市立戸崎小学校教頭の馬場正弘氏に石材鑑定をお願いした。その結果を含めて石材の詳細をまとめたものが第1表で、その石材の写真を掲載したのが第23図～第25図である。第23図1～6は阿蘇溶結凝灰岩、7～9は花崗岩、10・11は花崗閃綠岩である。第24図1は角閃石岩、2



第23図 3号石組石材 1



第24図 3号石組石材2



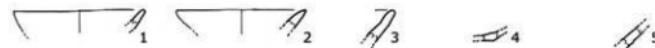
第25図 3号石組石材3

第1表 R2B区 3号石組サンプル一覧表

リスト番号	図版番号	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	重量(kg)	備考
1 第23図3号石組石材1	阿蘇溶結凝灰岩(Aso1)		17.5	10.8	1.5	両側面に割れあり
2 *	阿蘇溶結凝灰岩		14.5	12.1	11.4	割れなし
3 *	阿蘇溶結凝灰岩		9.8	5.8	0.1	割れなし
4 *	阿蘇溶結凝灰岩		12.3	10.2	1.1	割れなし
5 *	阿蘇溶結凝灰岩		10.2	12.6	2.7	割れなし
6 *	阿蘇溶結凝灰岩(Aso2か3)		24.3	20.5	5.9	割れなし
7 *	花崗岩		18.3	12.5	3.9	割って約1/5の大きさになっている
8 *	花崗岩		12.4	6.5	0.7	約半分に割っている
9 *	花崗岩		16.5	12.3	3.2	割れなし
10 *	花崗閃緑岩		14.0	9.3	1.4	約半分に割っている
11 *	花崗閃緑岩		14.4	11.3	1.7	約半分に割っている
1 第24図3号石組石材2	角閃石岩		16.2	12.4	2.1	割れなし
2 *	輝石安山岩		12.3	11.0	1.2	縦辺面に割れあり
3 *	輝石安山岩		19.3	13.5	3.4	側面の割れあり
4 *	輝石安山岩		24.4	13.8	6.7	約半分に割っている
5 *	輝石安山岩		15.3	7.6	1.4	約半分に割っている
6 *	輝石安山岩		10.5	9.7	0.5	割れなし
7 *	輝石安山岩		14.5	12.0	1.7	約半分に割っている
8 *	輝石安山岩		20.3	11.0	2.1	約半分に割っている
9 *	輝石安山岩		15.3	12.9	1.7	割れなし
10 *	輝石安山岩(角閃石を含む)		10.5	5.4	0.2	割って約1/4の大きさになっている
11 *	輝石安山岩		7.2	6.5	0.6	割って約1/4の大きさになっている 腐化して非常に
12 *	輝石安山岩		22.5	14.5	5.9	割れなし
13 *	輝石安山岩		24.5	14.3	4.2	約半分に割っている 他の石を取り込んでいる
14 *	輝石安山岩		18.0	11.0	3.6	割れなし
1 第25図3号石組石材3	輝石安山岩		12.0	10.5	2.2	約半分に割っている
2 *	輝石安山岩		18.2	15.6	2.8	割れなし
3 *	輝石安山岩		11.0	9.8	0.9	割れなし 腐化して特定できない
4 *	輝石安山岩		23.8	17.3	4.4	割って約1/5の大きさになっている
5 *	輝石安山岩		20.4	10.8	1.8	約半分に割っている



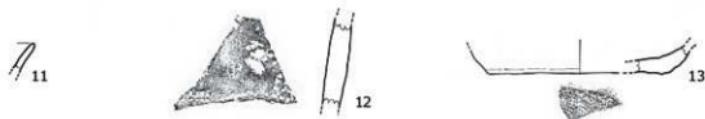
第26図 遺跡周辺地質図(熊本県地質図編纂委員会2008を一部加工)



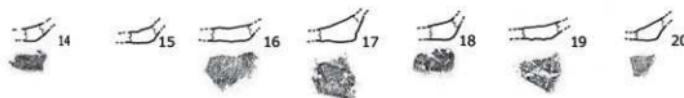
R2B区



R2C区



R2E区



R2F区



0 10cm

第27図 R2B・C・E・F区出土遺物実測図

～14は輝石安山岩である。第25図1～5は輝石安山岩である。これらの石材で最も多いのが輝石安山岩（18点）で、阿蘇溶結凝灰岩（6点）、花崗岩（3点）花崗閃綠岩（2点）、角閃石（1点）の内訳となる。表面を観察すると、17点の石材に大小の加工痕がある。石を組む際に、石材の大きさを調整したと考えられる。

第26図は遺跡周辺の地質図である。遺跡の北側周辺にはt1（低位段丘堆積物）、A4（阿蘇－4火碎流堆積物）などがある。遺跡の東側周辺にはA4、A13（阿蘇－1～3火碎流堆積物）などがある。これらのさらに東側の鞍岳にはK1（鞍岳安山岩I（角閃石安山岩溶岩・凝灰角礫岩））、K2（鞍岳安山岩II（輝石安山岩溶岩・凝灰角礫岩））がある（熊本県地質図編纂委員会 2008）。

遺跡の北側には直線距離で約1.5km離れた場所に迫間川が流れしており、源流近くには八方ヶ岳があり、そこにはYh（八方ヶ岳安山岩（角閃石・輝石安山岩溶岩・火碎岩））が分布している（熊本県地質図編纂委員会 2008）。また、遺跡の南側近接地点には菊池川が流れおり、その源流付近に鞍岳がある。八方ヶ岳、鞍岳に分布する石はそれぞれ迫間川と菊池川を流れ下る。石組の石材である輝石安山岩や阿蘇溶結凝灰岩は両者の河川で採集できる。花崗岩、花崗閃綠岩は迫間川でないと採集できない（馬場正弘氏のご教示）。3号石組の石材は遺跡近くの菊池川、迫間川から調達していたと考えられる。

g R2-B区の出土遺物について（第27図・第28図）

第27図1～10はR2-B区から出土した遺物実測図である。R2-B区の出土遺物は少数であったので、小片でも掲載した。5はVI層にある石と石の間から出土した。7・8は3号石組のVI層から出土した。1～4・6・9・10はVI層から出土した。1・2は土師器小皿の口縁部片である。3は黒色土器Aの口縁部片である。4は土師器小皿の底部片である。5は土師器小皿の体部片である。6は土師器壺の底部片、7は土師器壺の底部片である。8は土師器小皿の底部片である。6～8の外底部には回転糸切痕がある。6の外底面には板状圧痕が部分的に残っている。9・10は土師器壺の底部片であり、摩耗が著しく、底部の観察ができない。1・2の土師器は熊本県北部～中央部の編年の10期（13世紀後半）から11期（13世紀末～14世紀前半）の時期と考えられるまた、3の黒色土器は熊本県北部～中央部の編年の1期（10世紀末前後）から2期（11世紀前半）の時期と考えられる（美濃口1994）。3は3号石組の時期を示すものではない。

第28図1は3号石組のVI層から出土した青磁体部片である。龍泉窯系青磁碗Ⅲ類もしくはIV類に分類でき、大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）、大宰府G期（14世紀初頭～後半）の時期が考えられる（山本2000）。

⑤ R2C区の確認調査成果について（第3図・第29図）

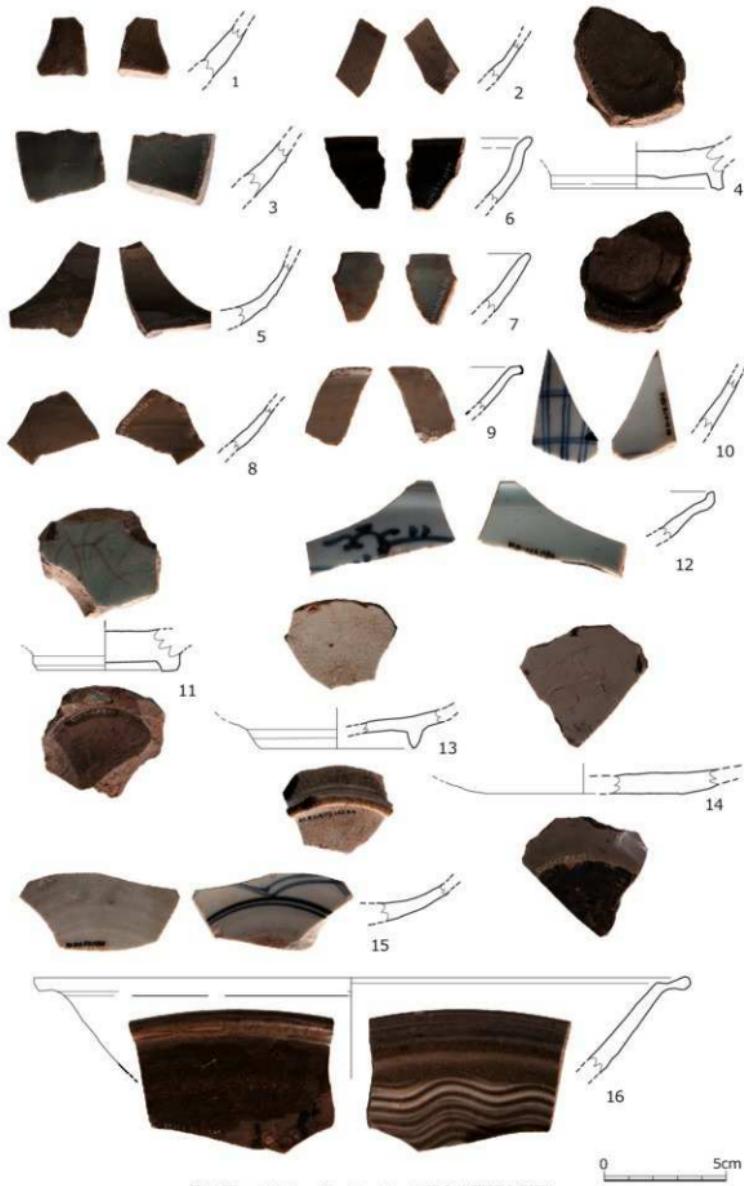
R2C区はR2B区より北東側に直線距離で約60m離れた箇所にある。調査区は略長方形（約3.0m×約2.2～2.3m）の平面形で設定した。掘削開始直後、地面が柔らかなので、通常の掘削では調査区が崩落する判断し、段掘りすることにした。調査区の北壁・南壁の長辺に沿った箇所を最初に掘削し、その後、調査区の中央部を掘り下げた。中央部の掘削を続けると壁が崩れだしたので、比較的安定した土質であった北側長辺に沿った箇所を掘り下げることにした。

a 土層について（第29図）

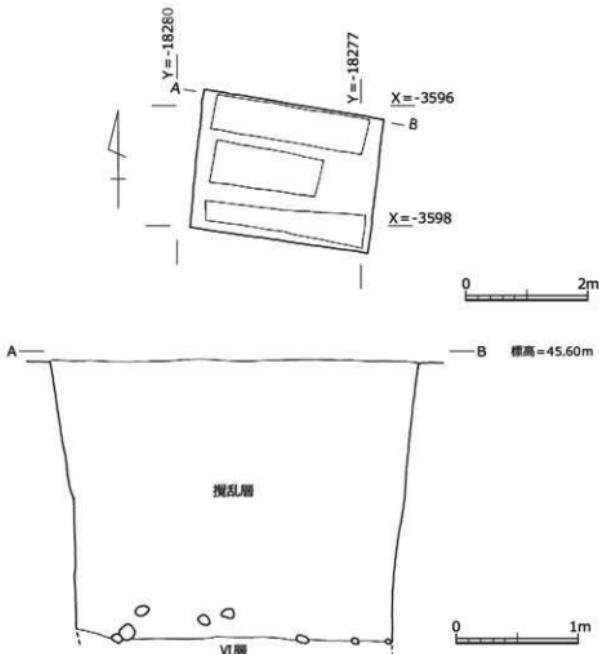
第29図A-Bは調査区の北壁の土層実測図である。各層の詳細は下記のとおりである。

搅乱層：土質が柔らかで、疊、ビニール、廃材が混在している。層の厚さ約2.2m～2.3m。

VI層：暗褐色土で、R1調査区のVI層と同じである。この層から円礫が出土し、小型のもの（直径約1cm～5cm）が多く、中型のもの（直径約10cm～15cm）が少量混じる。これらの石は人工的に積



第28図 R2B・C・D・E・F区出土磁器実測図



第29図 R2C区実測図・土層断面図

んだものではなく、自然堆積と考えられる。VI層の上面から水が湧き、水中ポンプを止めると、深さ約30~40cmの水が溜まる。層の境目まで掘削していないので、層の厚さは不明である。確認調査の結果を総合的に判断すると、R2C区はR2A区と同様に河川の中と考えられる。

b 出土遺物について（第27図）

第27図11~13はR2C区の擾乱層から出土した遺物実測図である。VI層から出土した遺物がなかったので、擾乱層出土遺物を掲載する。11は土師器小皿の口縁部である。12は中世陶器の体部片であろう。外器面には格子目タタキがあり、ナデ消している。13は土師器大壺の底部片である。外底部には回転糸切痕が確認できる。13は熊本県北部~中央部の編年の10期（13世紀後半）から11期（13世紀末~14世紀前半）の時期と考えられる（美濃口1994）。

第28図2はR2C区の擾乱層から出土した。2は外器面に櫛目文、内器面にジグザグ状の点描文と花文が施されている。同安窯系青磁碗I類の体部片で、D期（12世紀中頃~後半）と考えられる（山本2000）。

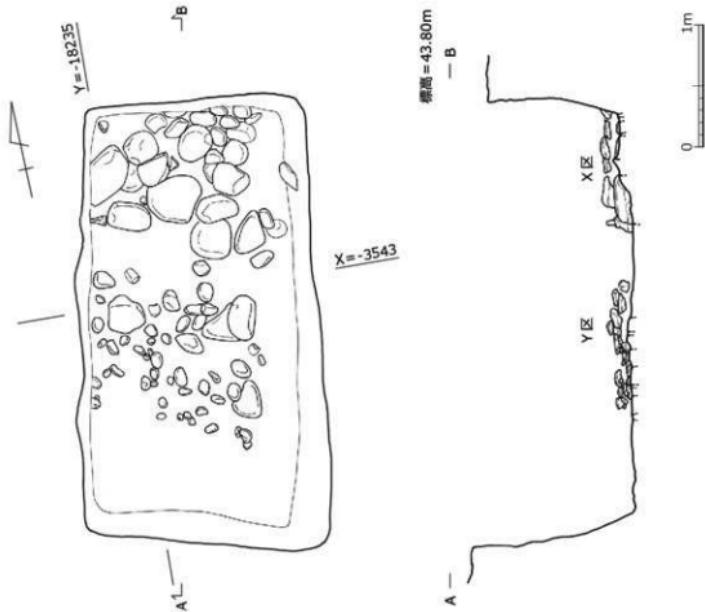
⑥ R2D区の確認調査成果について（第3図・第30図）

R2D区はR2C区より北東側に直線距離で約70m離れた箇所にある。調査区は略長方形（約3.5m~36m×約1.7~2m）の平面形で設定し、調査区西壁沿いに昇降用の階段部を付設した。掘り下げはこの階段部

以外の部分を行い、4号石組を検出した。

a 4号石組について（第30図）

4号石組に使用された石を平面図で概観すると、大型石（約40cm×20cm～約45cm×40cm）と中型石（約15cm×10cm～約25cm×15cm）、小型石（約5cm×4cm～約10cm×8cm）に分けることができる。大型石に着目すると、施工箇所に特徴がある。調査区の北壁周辺に大型石が密集しており、そのまとなりの南端部に東西方向のラインを意識した石積が確認できる。この大型石密集範囲から南側に直線距離で約1m離れた部分にも大型石の端部を描えた東西方向のラインが存在する。この点に注目して、調査区中央部の断面図と中央部から西側の見通し図を見ると、石組全体が緩やかな階段状になっていることが分かる。この階段状の石積の二箇所に平坦部があり、そこには大型石と中型石が使われている。これらの平坦部の北側端部をX区、その南側をY区と呼ぶ。X区では北端部から南側へ約50cmの範囲で平坦部を作っている。Y区では約25cmの幅で平坦面がある。X区がY区よりも高い位置にあり、両者の高低差は約15cmである。X区とY区の間には配置された石が少数しか残っていないが、小型石が利用されている。Y区より南側は南側に僅かに傾斜しながら約50cmの幅で小型石が積まれている。このような大型石・中型石と小型石の使い分けはR2B区の3号石組の階段状石積と共通する。確認調査中、水中ポンプを止めると、上記のX区の端部まで浸水した。のことから、4号石組の南端部の最深部からさらに南側は河川と考えられ、4号石組は河川護岸の可能性が高い。



第30図 R2D区 4号石組実測図

b 土層について（第31図）

東壁付近に大きな擾乱層があるので、土層断面は北壁・西壁・南壁で実測した。各層の詳細は次のとおりである。

【北壁】（第31図A～B）

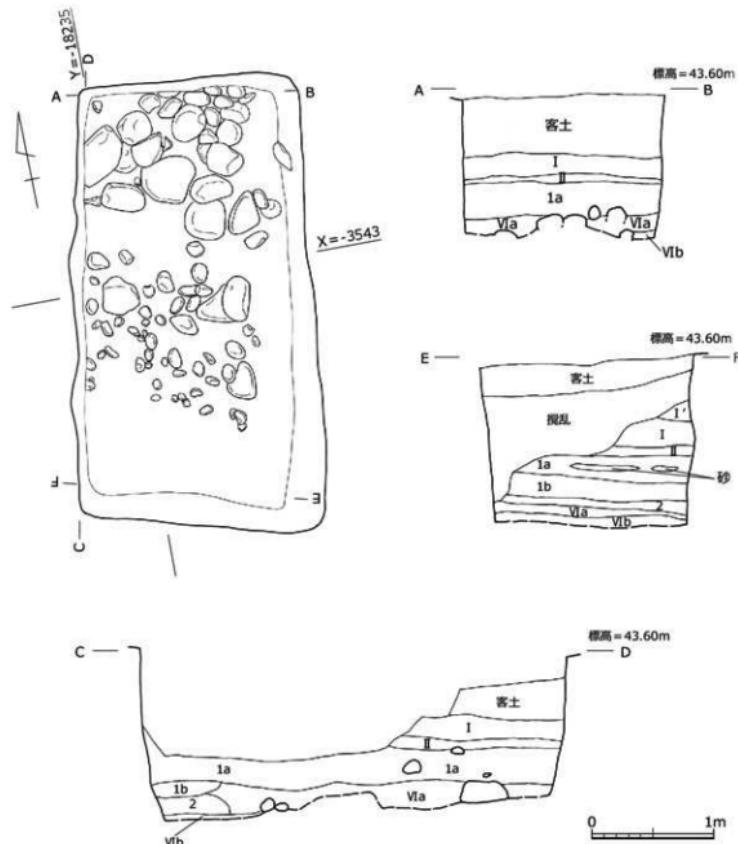
客土層：灰褐色土・黒褐色土が混じった盛土である。層の厚さ約50cm。

I 層：灰褐色の水田耕作土である。層の厚さ約15cm～20cm。

II 層：橙褐色の水田床土である。層の厚さ約4cm～18cm。

1a 層：暗褐色土で、石組の覆土である。R1調査区のIII a 層に類似する。層の厚さ約25cm～30cm。

VI a 層：暗褐色土で、砂が含まれる。石組の基盤となる層で、R2B区の3号石組のVI a 層と同じである。層の厚さ約5cm～20cm。



第31図 R2D区実測図・土層断面図

VI b 層：暗褐色土で、VI a 層より多く砂を含み、小石が混じる。R 2 B 区の 3 号石組の VI b 層と同じで石組の基盤となる。東端部の最下部で約 5 cm の厚さで部分的に確認した。

【南壁】(第31図 E - F)

客土層：北壁の層と同じ。層の厚さ約 15 cm ~ 25 cm。

擾乱層：ビニール等が混じるしまりのない擾乱層である。I 層から VI a 層まで斜め方向に擾乱されている。層の厚さ約 25 cm ~ 95 cm。

I' 層：I 層に類似しているが、I 層よりやや暗い灰褐色の水田耕作土である。層の厚さ約 1 cm ~ 15 cm。

I 層：灰褐色の水田耕作土である。層の厚さ約 20 cm ~ 25 cm。

II 層：橙褐色の水田耕土である。層の厚さ約 8 cm ~ 10 cm。

1 a 層：暗褐色土で、R 1 調査区の III a 層に類似する。層の厚さ約 2 cm ~ 20 cm。

砂 層：1 a 層中にブロック状に入る砂層である。層の厚さ約 1 cm ~ 5 cm。

1 b 層：1 a 層よりやや明るい暗褐色土である。R 1 調査区の III a 層に類似する。層の厚さ約 15 cm ~ 20 cm。

2 層：黄褐色砂質土である。VI a 層より黄色味が強い。このトレーナーで確認した部分的に存在する層である。層の厚さ約 5 cm ~ 14 cm。

VI a 層：暗褐色土で、砂が含まれる。R 2 B 区の 3 号石組の VI a 層と同じである。層の厚さ約 4 cm ~ 10 cm。

VI b 層：暗褐色土で、VI a 層より多く砂を含み、小石が混じる。R 2 B 区の 3 号石組の VI b 層と同じである。層の厚さは約 10 cm までは確認した。

【西壁】(第31図 C - D)

実測図の空白箇所は界隈用の階段部であるため、実測していない。

客土層：北壁の層と同じ。層の厚さ約 20 cm ~ 35 cm。

I 層：灰褐色の水田耕作土である。層の厚さ約 15 cm ~ 20 cm。

II 層：橙褐色の水田耕土である。層の厚さ約 5 cm ~ 10 cm。

1 a 層：暗褐色土で、R 1 調査区の III a 層に類似する。4 号石組の覆土で、層の厚さ約 25 cm ~ 45 cm。

1 b 層：1 a 層よりやや明るい暗褐色土である。R 1 調査区の III a 層に類似する。4 号石組の覆土で、層の厚さ約 2 cm ~ 15 cm。

2 層：黄褐色砂質土で、VI a 層より黄色味が強い。このトレーナーで確認した部分的に存在する層である。層の厚さ約 2 cm ~ 15 cm。

VI a 層：砂が混じる暗褐色土である。R 2 B 区の 3 号石組の VI a 層と同じで、石組の基盤となる。層の厚さ約 4 cm ~ 10 cm。

VI b 層：暗褐色土で、VI a 層より多く砂を含み、小石が混じった石組の基盤となる層である。R 2 B 区の 3 号石組の VI b 層と同じである。層の厚さは約 5 cm までは確認した。

c 出土遺物について (第28図)

R 2 D 区は出土遺物が少なく、小破片が殆どであるので、國化可能な 1 点を取り上げる。第28図 3 は 4 号石組の覆土である 1 a 層から出土した龍泉窯系青磁碗Ⅲ類の体部片である。外器面に箇運弁文があり、釉はくすんだ青緑色である。大宰府 F 期 (13世紀中頃~14世紀初頭前後) のものと考えられる (山本2000)。

⑦ R 2 E 区の確認調査成果について（第3図・第32図）

R 2 E 区は R 2 D 区より東側に直線距離で約60m離れた箇所にある。調査区は不整な長方形（約4.2m×5m×約0.8~1.4m）の平面形で設定した。不整な形になったのは、調査区の南西隅に昇降用のステップを設定し、その箇所の掘り下げを実施しなかったからである。

これまで確認した1号石組～4号石組とは異なる遺構検出状況であった。大型の石がほぼ直線的に配置され、その西側全面に黒色土が広がっていた。黒色土を掘り下げた結果、石組を確認し、5号石組とした。その石組に伴う掘り込みを西側で検出した。

a 5号石組について（第32図）

5号石組は深さ約30cmの掘り込みの東側端部に築造しており、調査区内をほぼ南北方向に直線的に伸びている。石の積み方は上下四段になっており、最下部を一段、最上部を四段とする。断面図A-Bを見ると、石組の西側端部は一段目から三段目にかけて外側に開くように積まれている。一段目の石は掘り込み底面に沿った状態で配置している。二段目の石西端部は一段目の石西端部から約10cm東側にずらした箇所にある。三段目の石西端部は二段目と同様に約25cm東側にずらした箇所に設置している。一段から三段までの外側に開く斜め方向に積んだ石組を東側の背後から押さえ込むように積んでいるのが四段目の石積である。断面図実測箇所での四段目石積は二つの石を使用している。一段目から四段目の石積の幅は約1.1m～1.2mで、高さは約55cm～60cmである。石組西側の掘り込み内部はほぼ水平な底面になっているが、石組付近の底面には約8cmの高低差がある緩やかな段が存在する。この段の平面形は「L」字形を呈している。

5号石組と1号石組～4号石組を比較すると、使用している石の大きさ、石積の高さや石積範囲に違いがある。5号石組に使われている石は大型石（約30cm×10cm～約50cm×25cm）が殆どで、小型石は少ない。また、5号石組が石組の高さが低く、石積範囲が狭い。5号石組は1号石組～4号石組とは異なる用途で使用されたと考えられる。

b 土層について

土層堆積状況は調査区の東壁（E-F）、北壁（G-H）で確認した。

【東壁】（第32図E-F）

①層：砂利層の客土である。層の厚さ約20cm～25cm。

②層：灰褐色の水田耕作土である。他の調査区の1層と同じである。層の厚さ約25cm～40cm。

③層：茶褐色土で、石組の外側に堆積した層である。層の厚さ約15cm～25cm。

④層：黄褐色土である。この層の途中で掘り下げを終了し、層の厚さ約10cmまでは確認した。

【北壁】（第32図G-H）

①層：砂利層の客土で、層の厚さ約15cm～30cm。

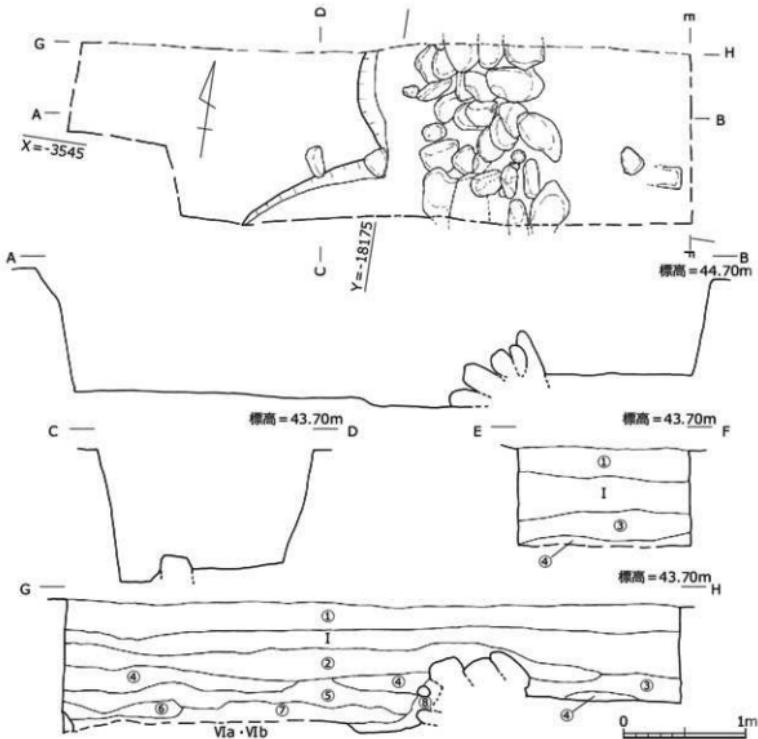
②層：灰褐色の水田耕作土である。層の厚さ約15cm～40cm。

③層：黒色土で、土の粒子が細かい。この層は側溝に溜まったヘドロのような臭いがする。掘り込みの上面から石組上層の東側端部付近まで堆積している。層の厚さ約4cm～25cm。

④層：茶褐色土で、石組の外側に堆積した層である。層の厚さ約10cm～20cm。

⑤層：黄褐色土で、主に石組の内に堆積しているが、石組の外側にも部分的に堆積している。層の厚さ約4cm～20cm。④層下部に層の凹凸が確認できる。

⑥層：黒褐色粘質土で、石組の内に堆積している。層の凹凸が著しく、層の厚さ約6cm～20cm。⑤層の上端の④層や⑤層下端の⑥・⑦層との境目は波状になっており、自然堆積ではないと考えられる。



第32図 R2E 区 5号石組実測図・土層断面図

層の著しい凹凸は人工的に⑥層を外部に運び出した浚渫の跡と想定できる。浚渫は掘り込みの深さを維持する目的で行われたと考えられる。

⑥層：明黄褐色砂質土で、掘り込み内部に部分的に堆積した層である。層の厚さ約4cm～15cm。⑥層上面に層の凹凸が認められる。

⑦層：灰褐色砂質土で、掘り込み内部の堆積層である。層の厚さ約2cm～15cm。⑦層上面には層の凹凸がある。

⑧層：黄褐色砂質土で、掘り込み内部の底から壁傾斜に沿った状態で堆積した層である。層の厚さ約8cm～10cm。

VIa・VIb層：⑦層・⑧層の下部で、他の調査区と同じVIa層・VIb層を確認した。掘り込みはVIa層・VIb層を基盤としている。

掘り込み内の下部に堆積している⑥～⑧層は砂質であり、水成堆積層と考えられる。

c 出土遺物について（第27図・第28図）

第27図14～20はR 2 E区で出土した遺物実測図である。17・18は5号石組の覆土である②層から出土した。14・16は5号石組の覆土である④層から出土した。15は5号石組中から出土した。19・20はVI a層から出土した。15は土師器底部片で、小片であるため器種不明である。14・16・18は土師器壺底部片である。19・20は土師器小皿底部片である。15以外の外底部には回転糸切痕が確認できる。これらの土師器は熊本県北～中央部の編年の10期（13世紀後半）から11期（13世紀末～14世紀前半）の時期と考えられる（美濃口1994）。

第28図4～7はR 2 E区で出土した磁器片の実測図である。4は表採資料である。5は5号石組中から出土した。6・7は5号石組東側にある石組覆土である③層から出土した。4は龍泉窯系青磁碗IV類の高台片である。見込みに花文と思われる文様があり、疊付の内側は釉を削り取っている。高台外側の削りは荒く、中央寄りに段がつく。大宰府G期（14世紀初頭～後半）の時期が考えられる（山本2000）。5は外器面は無文で、内器面に草花文と思われる文様がある体部片である。龍泉窯系青磁碗III類と思われ、大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）と考えられる（山本2000）。6は黒釉陶器（天目）の口縁部片で、口縁端部を捻り返して作っている。14世紀前半～後半以降の時期が考えられる（森本1994）。7は龍泉窯系青磁の口縁部片と考えられるが、小片のため、器種・時期は不明である。

⑧ R 2 F区の確認調査成果について（第3図・第33図）

R 2 F区はR 2 E区の北東方向に直線距離で約85m離れた箇所にある。調査区は略長方形（約4.7m×4.9m×約1.75m～18m）の平面形で設定した。③層まで掘り下げた時点で多量の石が検出され、③層が厚く堆積していると予測できたので、安全確保のため二段掘りに変更した。調査区長辺のほぼ中間より南東部分を深掘りし、中間より北西部は勾配をつけて掘削した。

検出した石は大小様々な角の丸い石で、石列や石積ではなく、人工的な工作物は存在していない。調査区の周辺の明治期の字図には「中川原」の字名があることから、検出した石の状態を判断すると、旧河川の河原と考えることができる。

a 土層について（第33図）

土層堆積状況は調査区の北東壁（A-B）、南西壁（C-D）、南東壁（E-F）で確認した。

【北東壁】（第33図A-B）

- ①層：灰褐色の水田耕作土である。他の調査区のI層と同じである。層の厚さ約15cm～20cm。
- ②層：黄褐色粘質の水田床土である。土色が異なるが、R 1 調査区II a層・II b層に相当する。層の厚さ約4cm～10cm。
- ③層：黒褐色弱粘質の水田床土である。土色が異なるが、R 1 調査区II a層・II b層に相当する。層の厚さ約5cm～14cm。
- ④層：河原石層で、大小様々な石が堆積している。古代～近世の遺物を包含する。層の途中で掘り下げを終了し、層の厚さ約1.2mまでは確認した。
- ⑤層：土層実測図の北西隅の最下部で確認した淡黄褐色砂質土である。水成堆積層と考えられる。

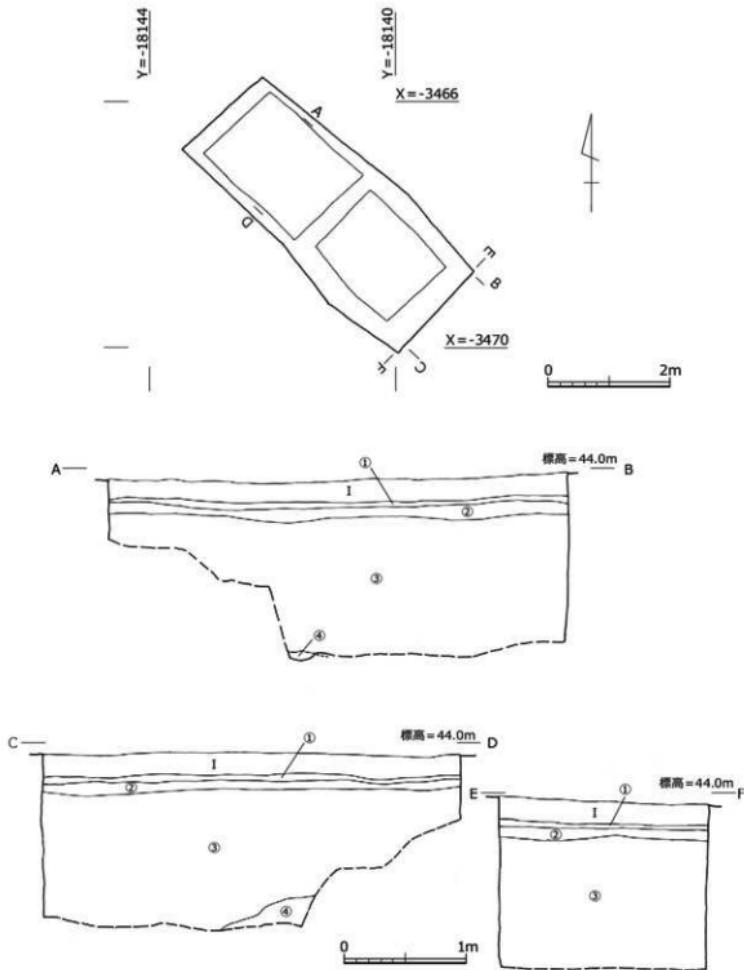
【南西壁】（第33図C-D）

- 南西壁で確認した層は北東壁で確認したものと同じ土質であるが、層の厚さに違いがある。
- I層の厚さ約20cm～28cm。①層の厚さ約4cm～8cm。②層の厚さ約5cm～12cm。③層の厚さ約1.05mまで確認した。④層は厚さ約4cm～24cmで、南東から北西方向に低く傾斜している。
- 【南東壁】（第33図E-F）
- 南東壁で確認した層は北東壁で確認したものと同じ土質で、層の厚さはI層、①層、②層は殆ど変わら

ない。③層を掘り下げた厚さは1.05mである。

b ③層で確認した石の形状について

取り上げた③層出土の石を現地で観察した。石は角が丸く、石の平面形は椭円形、不整椭円形、円形に分類できる。石の大きさを大まかに7種類に分けて計測した結果は下記のとおりである。



第33図 R2F 区実測図・土層断面図

楕円形・不整楕円形の石の大きさを長軸×短軸で示すと、約50cm×約40cm、約40cm×約20cm、約25cm×約20cm、約15cm×約10cm、約1cm未満×約1cm未満の5種類ある。円形の石の大きさは直径約7cm、直径約4cm、直径約1cm未満の3種類ある。最も大きい約50cm×約40cmの楕円形・不整楕円形の石は少なく、それ以外の大きさの石が多くを占める。

c 出土遺物について（第27図・第28図）

第27図21～25はR 2 F区から出土した土師器片である。出土遺物の殆どは小片で、図化できる遺物を掲載した。21・22はI層から出土した。21は土師器小皿の口縁部片である。22は土師器坏底部片で、外底部に回転糸切痕がある。23～25は河原石が含まれる③層出土の土師器坏底部片で、外底部に回転糸切痕が残る。

第28図8～16はR 2 F区から出土した陶磁器片である。9はI層出土で、それ以外は河原石中から出土した。8の体部片は同安窯系青磁碗Ⅲ類と考えられる。外器面には粗い櫛目文があり、内器面には櫛・篦状施文具での花文が施される。大宰府D期（12世紀中頃～後半）の時期が考えられる（山本2000）。9は白磁碗V類の口縁部片で、大宰府D期（12世紀中頃～後半）の時期が考えられる（山本2000）。10は外器面に二重格子文、内器面に圓線がある胴部片で、波佐見染付椀V－4期（1820年代～1860年代）と考えられる（九州近世陶磁学会2000）。11は龍泉窯系青磁碗IV類の高台部片である。見込みに篦描き花文がある。大宰府G期（14世紀初頭～後半）と考えられる（山本2000）。12の口縁部片は外器面に唐草を描いた肥前磁器皿III・IV期（1690～1720年代）と考えられる（九州近世陶磁学会2000）。13は高台付近の破片で、外器面に染付の横線を施す肥前磁器碗III期（1650～1670年代頃）のものと考えられる（九州近世陶磁学会2000）。14の底部片は見込みに篦描き草花文を描いた白磁皿皿類で、大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられる。15は内器面に二重斜格子文を描いた波佐見染付皿胴部片で、V－1期（1680～1790年代）と考えられる（九州近世陶磁学会2000）。16は口縁端部が強く屈曲し、内器面に白土を波状に装飾する刷毛目を施した肥前陶器鉢片で、IV期（1690～1780年代）と考えられる（九州近世陶磁学会2000）。

（2）北宮跡（菊之城跡）の確認調査

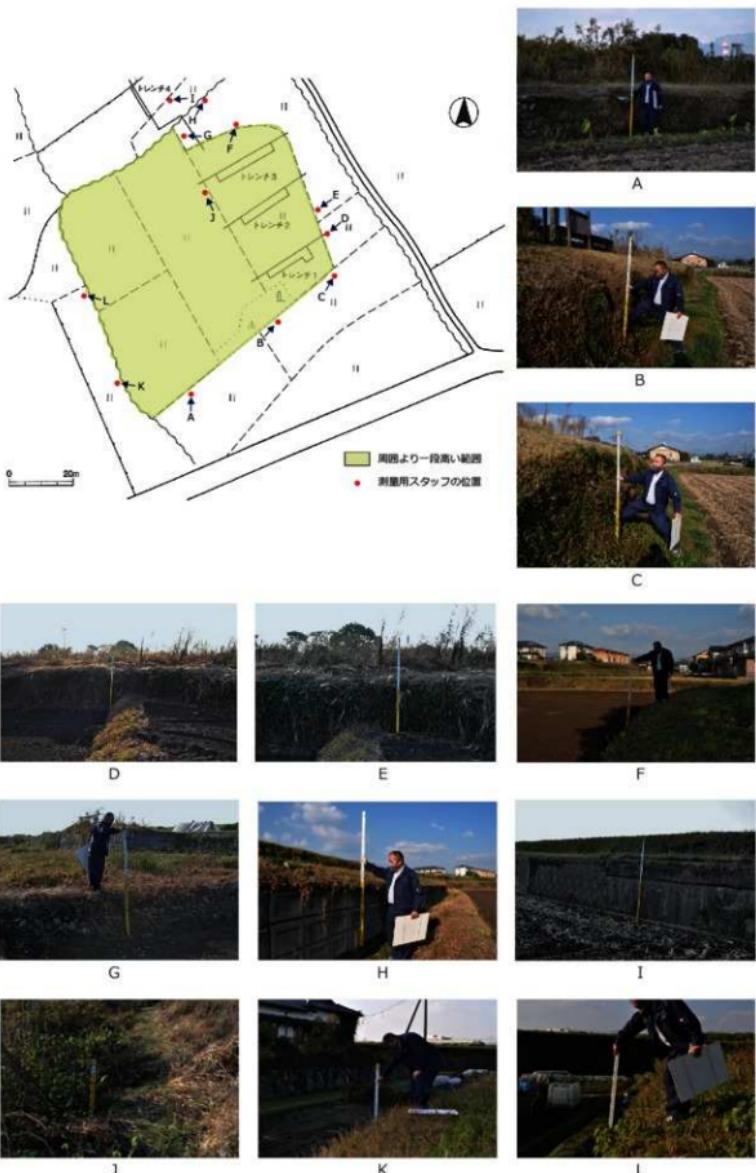
① 遺跡名の変更について

第8回史跡調査検討委員会で「菊之城跡」の遺跡名について検討するようにと指導を受けた。それを受けて、今回の確認調査の成果を踏まえて遺跡名を「菊之城跡」（旧）から「北宮跡」（新）に変更した。混乱を避けるために遺跡の表記は北宮跡（菊之城跡）のように新旧遺跡名を併記する。

② 北宮跡（菊之城跡）の現況について（第34図）

北宮跡（菊之城跡）は方形に区画した周囲より一段高くなった箇所があり、第34図に薄緑色で示した。その高まりの南端部の長さは直線距離で約70m、西側端部の長さは直線距離で約70m、北側端部は凹凸があるが、長さは直線距離で約70m、東側端部の長さは直線距離で約45mである。東側端部の長さが他と比べて短いのは、後世の地形変化によるものと推定できる。その高まりを取り囲むように一段低くなったり堀状の地形が確認できる。南側端部の堀状地形の残存状況が良好で、幅約15m～20mを測る。東側端部の堀状地形はその東端部を現農道とすれば、幅約15m～20mの大きさで、南側端部の堀状地形と同様な規模と推定できる。西側端部の堀状地形の現況は幅約10m～15mの窪みが確認できる。北側端部の堀状地形は現況の窪みが幅約7m～10mである。現況での堀状地形を含めた館跡の規模は、南北方向の大きさ約90m、東西方向約100mと考えられる。

第34図のA～Lの地点ごとに館跡の現状を述べる。



第34図 北宮館跡現況写真

- A：方形の高まりの南西端部に沿って、現水田に伴う浅い溝が伸びている。水田耕作面と高まり面の比高差は約1.4mである。
- B：Aと同様に段差の境部分に溝がある。水田耕作面と高まり面の比高差は約1.6mで、A地点の高まりよりやや高くなっている。
- C：A・Bの溝がCまで続いている。水田耕作面と高まり面の比高差は約1.8mあり、東側に行くほど高くなっている。
- D：方形の高まりの東側には一段低い畠があり、耕作面と高まりとの比高差は約1.4mである。
- E：Dと同様に高まりの東側は畠であり、耕作面と高まりとの比高差は約1.2mである。高まりが低くなっているのでなく、Eの畠がDの畠より一段高くなっている。
- F：方形の高まりの北側には一段低い畠があり、耕作面と高まりとの比高差は約1.2mである。
- G：この箇所で壠状の窪みが現状で終わっている。旧地形は壠状地形が西側に伸びていたと考えられる。畠耕作面と高まりとの比高差は約0.8mである。
- H：この箇所はF・Gにある壠状地形の北側端部にあたる。畠耕作面と高まりとの比高差は約1.2mである。
- I：4トレンチはIの面よりさらに一段高くなった箇所にある。畠耕作面との比高差は約1.4mである。4トレンチを設定した箇所は壠状の地形から、約2.6m高い二段の段差がある場所である。4トレンチより北側の地形は全体的に北側に向かって緩やかに高く傾斜している。
- J：5トレンチを設定したJの平坦面と1トレンチ～3トレンチを設定した平坦面には段差があり、Jの面が低くなっている。両者の比高差は約0.6mである。
- K：この箇所は方形の高まりの西側にある一段低くなった畠の部分である。耕作面との比高差は約1.4mである。
- L：この部分は方形の高まりの西側端部のほぼ中央部である。畠耕作面と高まりとの比高差は約1.3mである。

③ 調査区の設定と名称について（第35図）

調査区は上記②で述べた高まり内部の5箇所に設定した。平成23年度の確認調査の調査区は1トレンチ・2トレンチ・3トレンチとした。その後の平成27年度の確認調査で4トレンチを設定した。令和2年度の調査区は5トレンチとした。各トレンチの所在地は下記のとおりである。

- 1トレンチ：菊池市北宮城ノ堀205-1
- 2トレンチ：菊池市北宮城ノ堀205-1
- 3トレンチ：菊池市北宮城ノ堀204
- 4トレンチ：菊池市北宮229
- 5トレンチ：菊池市北宮城ノ堀208

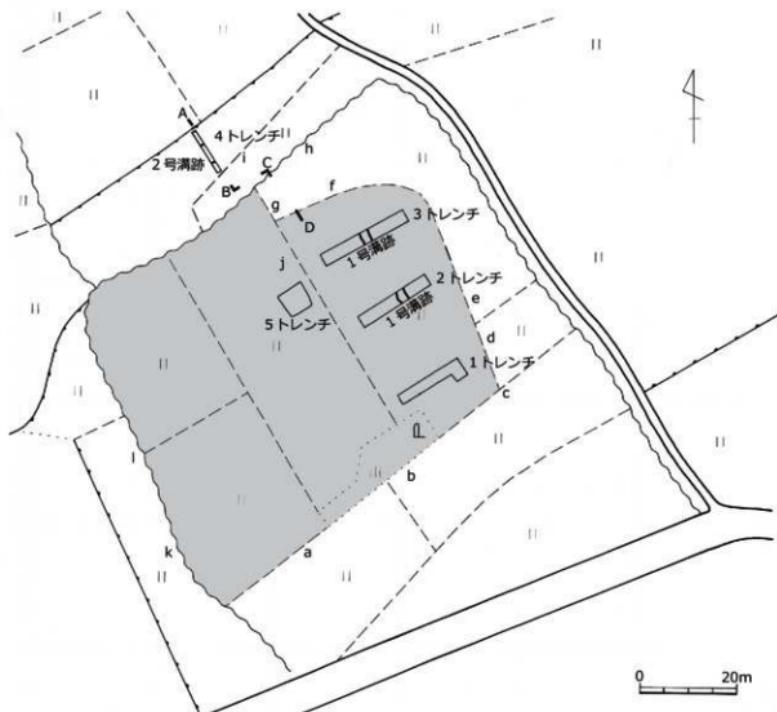
④ 1トレンチの確認調査成果について

【検出遺構】（第36図）

トレンチの西側端部でピット1を確認した。ピット1は南端部が確認できていないが、円形の平面形になると思われる（直径約30cm）。断面形は台形を呈している（深さ約25cm）。トレンチの東側端部付近に遺物が集中して出土する箇所があったが、遺構として認識できなかった。

【土層】（第36図）

土層図はトレンチの北壁A-Bで実測した。



第35図 北宮館跡トレンチ位置図

I層：灰褐色の表土である。層の厚さ約50cm～80cm。

礫層：部分的にレンズ状に堆積した層で、厚さ約2cm～10cm。

IV層：暗褐色、黒褐色を呈した遺物包含層である。直径10cm～20cmの礫を多量に含み、土師器小片が多く混じる。層の厚さ約2cm～50cm。

V層：暗褐色土の遺物包含層である。土色はV層はIV層に類似しているが、焼土・炭化物を多量に含む点がV層と異なる。層の厚さ約2cm～20cm。

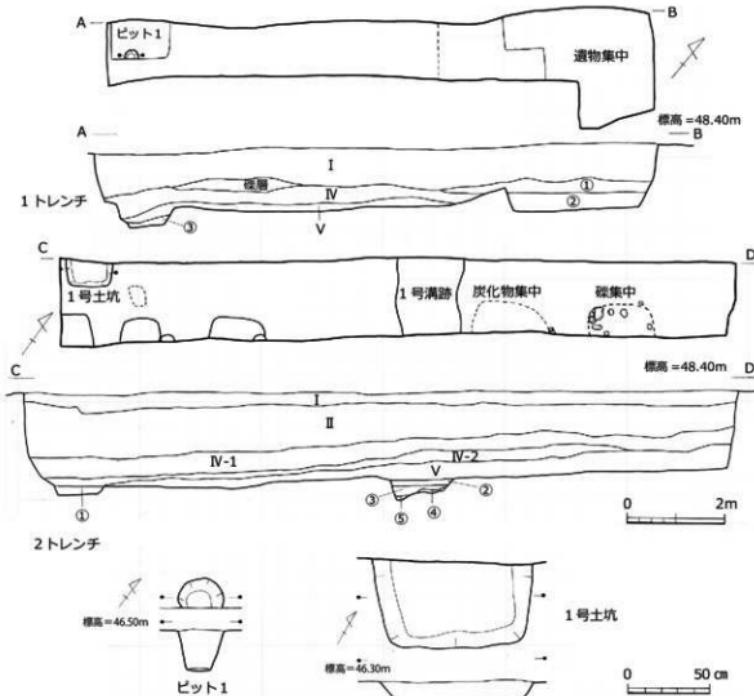
①層：トレンチ東端部の遺物集中箇所に堆積した黒褐色の覆土である。土師器の完形品を多く含んでいる。層の厚さ約2cm～30cm。

②層：遺物集中箇所の最下部に堆積した黒褐色土で、土師器の完形品を多く含んでいる。層の厚さ約30cm～40cm。

③層：ピット1を検出した箇所で確認した暗褐色土で、V層に類似している。層の厚さ約10cm～15cm。

【出土遺物】（第37図～第44図）

第37図1～15は1トレンチ遺物包含層から出土した土師器壺である。6の外底部には回転糸切痕と線状の圧痕が確認できる。1～5・7～15の外底部に回転糸切痕、板状圧痕が残る。第38図1～23は1トレンチ遺物包含層から出土した土師器である。1～11・13～15は土師器壺で、12・16～33は土師器小皿である。1



第36図 北宮館跡1・2トレンチ実測図

~4・6・7・11・12・14~17・21・22の外底部には回転糸切痕、板状圧痕がある。9・13・18・20・23の外底部には回転糸切痕、線状圧痕が確認できる。5・8・10・19の外底部には回転糸切痕がある。第39図1~30は1トレンチ遺物包含層から出土した遺物である。1~22は外底部に回転糸切痕をもつ土師器小皿である。1~4・6~8・13・16~19・21・22の外底部には板状圧痕が確認できる。12・14・20の外底部には線状の圧痕がある。6の底部の二箇所には穿孔が施されている。23・27は肉厚な玉縁をもつ白磁碗で、白磁碗IV類、大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）と考えられる（山本2000）。24・25は外器面に鑄蓮弁文がある龍泉窯系碗II-b類で、大宰府E期（13世紀前後～前半）に位置づけられる（山本2000）。26は内器面に分割線があり、龍泉窯系青磁碗I-4類、大宰府D期（12世紀中頃～後半）に分類できるであろう（山本2000）。29は青磁片である。30は瓦質土器の擂鉢であり、13世紀頃のものと考えられる。第40図1~15は1トレンチの遺物集中箇所から出土した土師器環で、外底部に回転糸切痕がある。1・2・4・7~11・13には外底部に板状圧痕を確認できる。5・14の外底部には線状圧痕が残る。第41図1~18は1トレンチの遺物集中箇所から出土した土師器環で、外底部に回転糸切痕が確認できる。1・3・5・11~13・16~18の外底部に板状圧痕がある。2・7・8の外底部に線状圧痕が確認できる。第42図1~26は1トレンチ遺物集中箇所から出土した土師器環で、外底部に回転糸切痕が確認できる。

所から出土した土師器で、外底部に回転糸切痕が残る。1～17は土師器壺である。2～10・12～14・16・17の外底部には板状圧痕が確認できる。18～26は土師器小皿である。20・24～26の外底部には板状圧痕がある。第43図1～17は1トレンチの遺物集中箇所から出土した遺物である。1～16土師器小皿で、外器面に回転糸切痕をもつ。3～6・9～11・13・16の外底部には板状圧痕がある。17は白磁皿で、口縁端部が口禿げになっている。皿口類で、大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）と考えられる（山本2000）。

1トレンチから出土した土師器の年代は、熊本県北部～中央部の編年の9期（13世紀前半～中葉）から10期（13世紀後半）と考えられるものが多いが、口径が約14cm～16cmのやや大型のものが少数含まれる。やや大型の土師器の年代は熊本県北部～中央部の編年の7期（12世紀末）から8期（13世紀初頭）と考えられる（美濃口1994）。

第44図1は遺物の再整理をおこなった時に確認した陶器である。1は1トレンチの遺物包含層から出土した体部片である。外器面の下半分は露胎であり、内器面の下端には鉄釉が線状に確認できる。福建省磁灶窯系の盤と考えられる（山本2000）。

⑤ 2トレンチの確認調査成果について

【検出遺構】（第36図）

トレンチのはば中央部付近に北西から南東方向に伸びる1号溝跡を確認した。1号溝跡は幅約1.2m～1.5mで、断面形は略台形を呈し、深さ約20cm～40cmを測る。トレンチの北西隅には1号土坑を部分的に確認した。1号土坑は平面形が方形と思われる。検出面での長さは約80cm～98cm、幅は約52cmまで確認した。断面形は台形を呈し、深さ約15cmである。1号溝跡に隣接した北東方向の箇所に炭化物集中箇所がある。この箇所はほぼ半分を確認しており、円形の平面形になると思われる（直径約19m）。炭化物集中箇所の北東方向に約90cm離れた部分で穀集中箇所を確認した。確認したのは約半分で、平面形は方形になると思われる（約1m×0.7m～）。

【土層】（第36図）

土層図はトレンチ北壁C-Dで実測した。

I層：灰褐色の表土である。層の厚さ約20cm～40cm。

II層：暗褐色の耕作土である。層の厚さ約50cm～100cm。

IV-1層：にぶい褐色土の遺物包含層である。約3cm～5cmの小礫、赤色粒が含まれる。層の厚さ約20cm～50cm。

IV-2層：IV-1層より粘性が強いにぶい褐色土で、遺物包含層である。IV-1層より大きめの遺物が出土する。層の厚さ約4cm～30cm。

V層：暗褐色土の遺物包含層である。約3cm～5cmの小礫や炭化物を含む。層の厚さ約4cm～50cm。

①層：1号土坑の覆土で、V層と類似するが、V層より黒味が強い暗褐色土である。土師器小片、炭化物を多く含む。

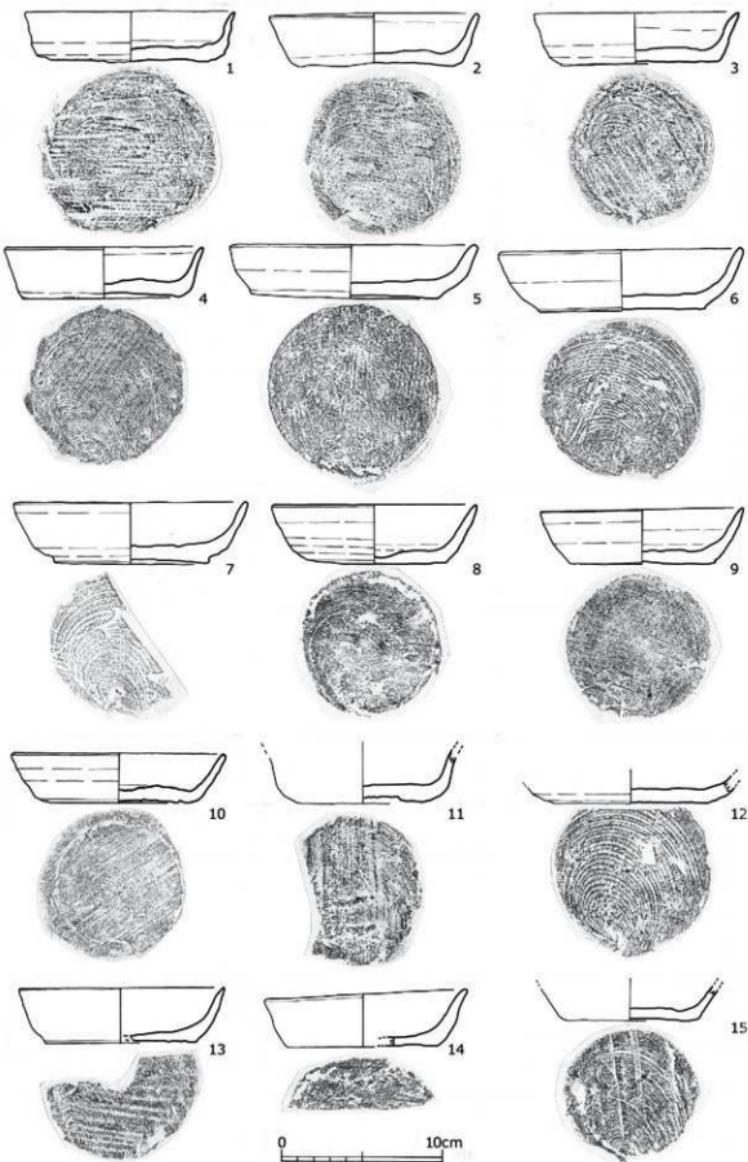
②層：1号溝跡の覆土で、やや粘質の暗褐色土である。約5cmの小礫、土師器小片、炭化物を多く含む。層の厚さ約10cm。

③層：1号溝跡の覆土で、①層より土質がサラサラしている暗褐色土である。約5cmの小礫、土師器小片、炭化物を多く含む。層の厚さ約2cm～20cm。

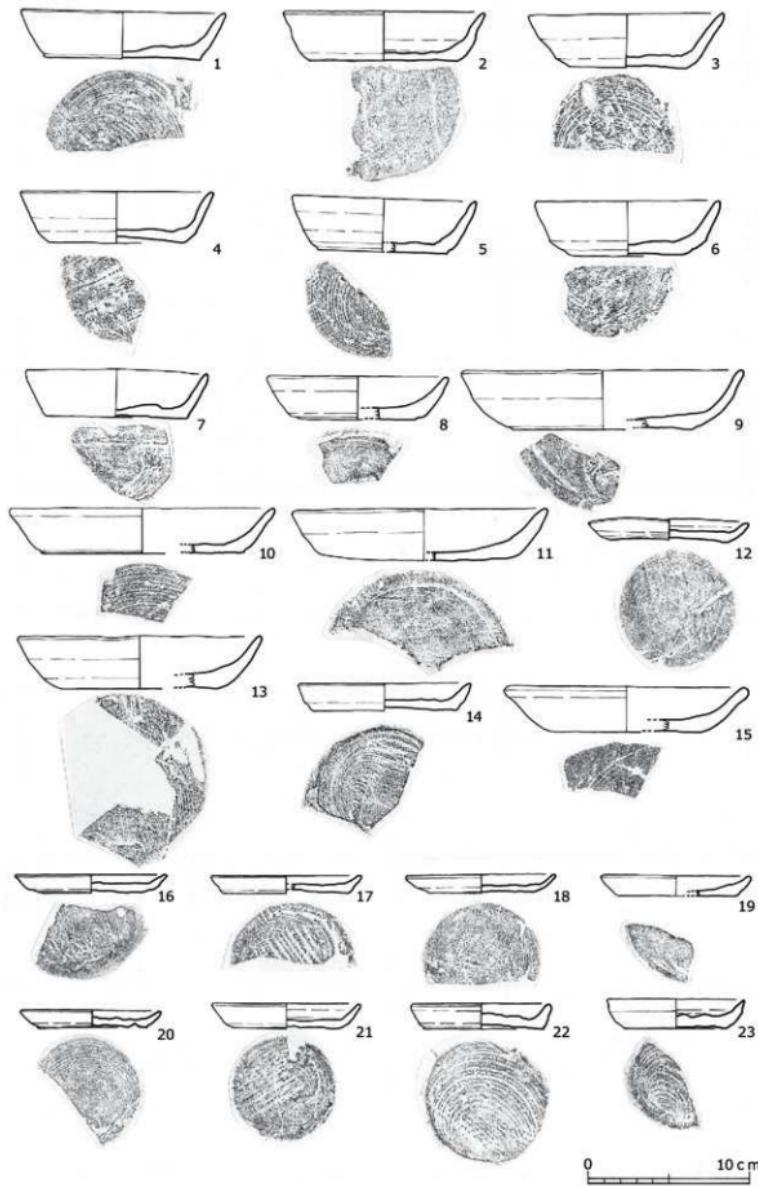
④層：暗褐色の1号溝跡の覆土である。土師器小片、炭化物を少量含む。層の厚さ約2cm～5cm。

⑤層：炭化物がブロック状に堆積した1号溝跡の覆土である。層の厚さ約2cm～8cm。

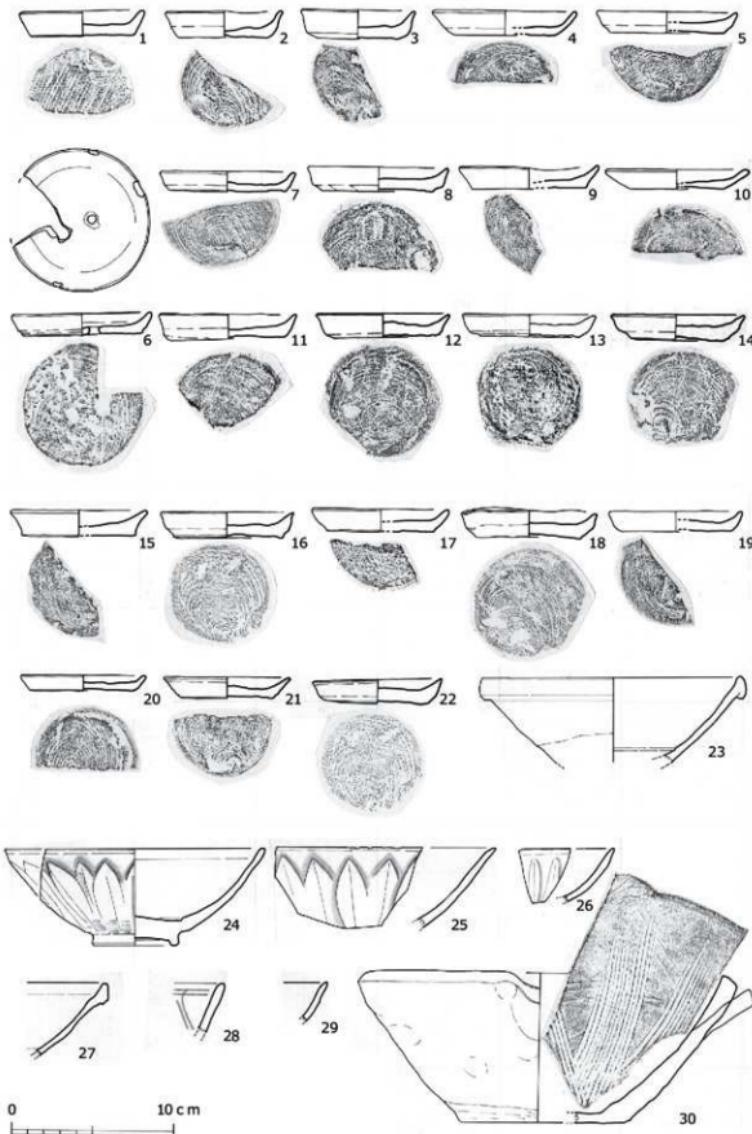
【出土遺物】（第43図・第44図）



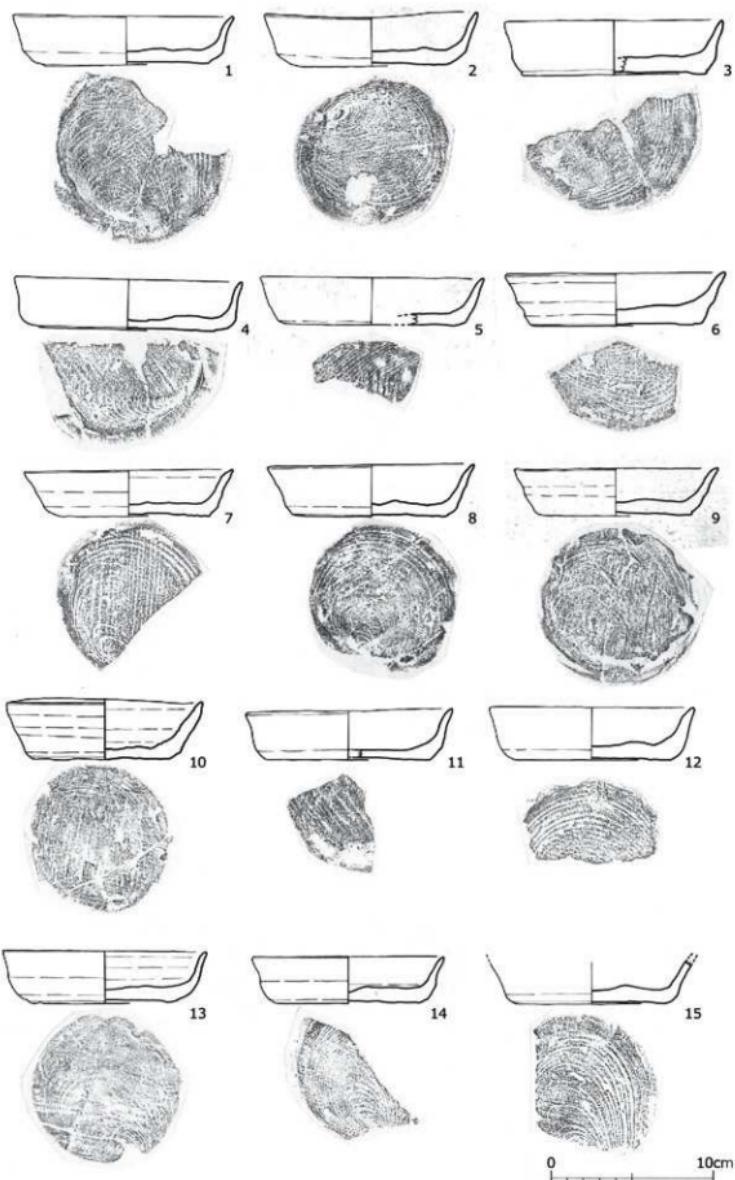
第37図 北宮館跡 1 トレンチ包含層出土遺物実測図(1)



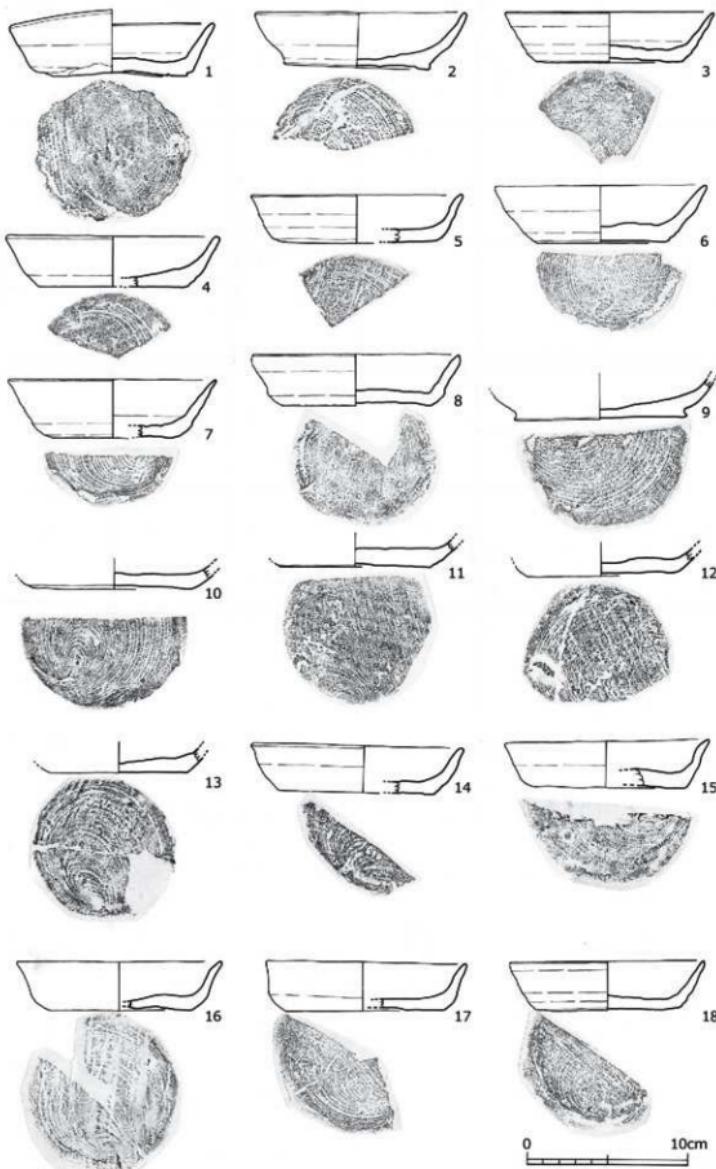
第38図 北宮館跡 1 トレンチ包含層出土遺物実測図(2)



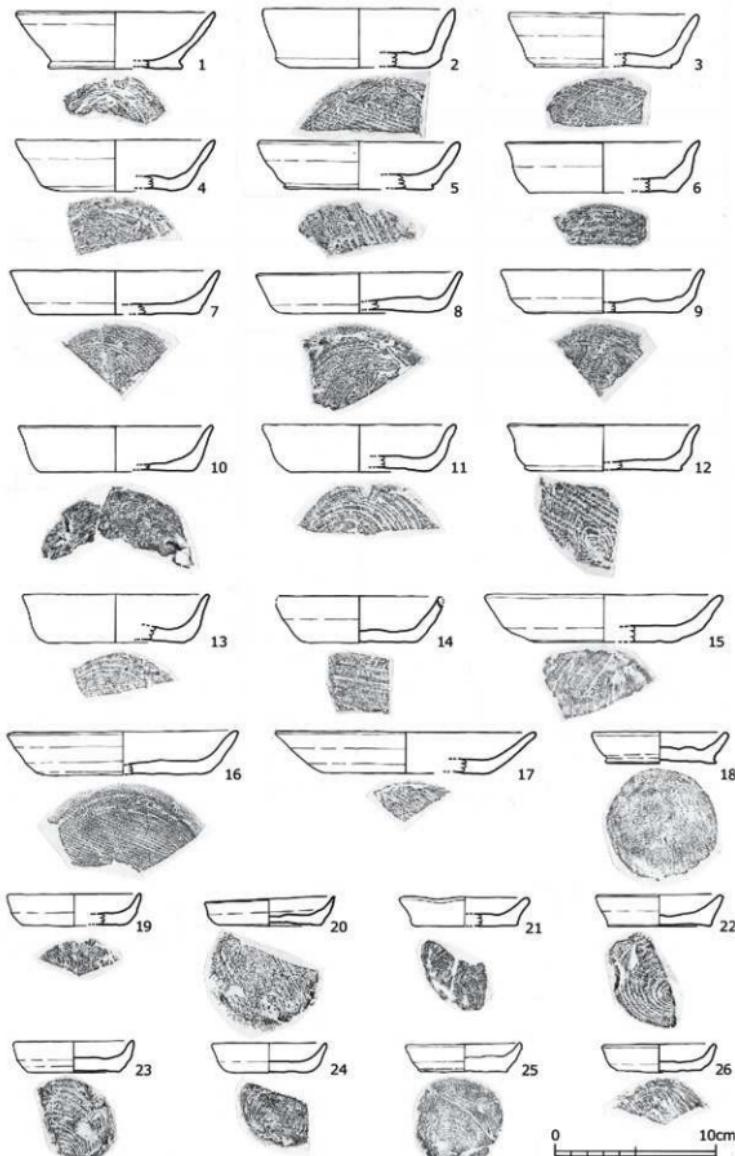
第39図 北宮館跡 1トレンチ包含層出土物実測図(3)



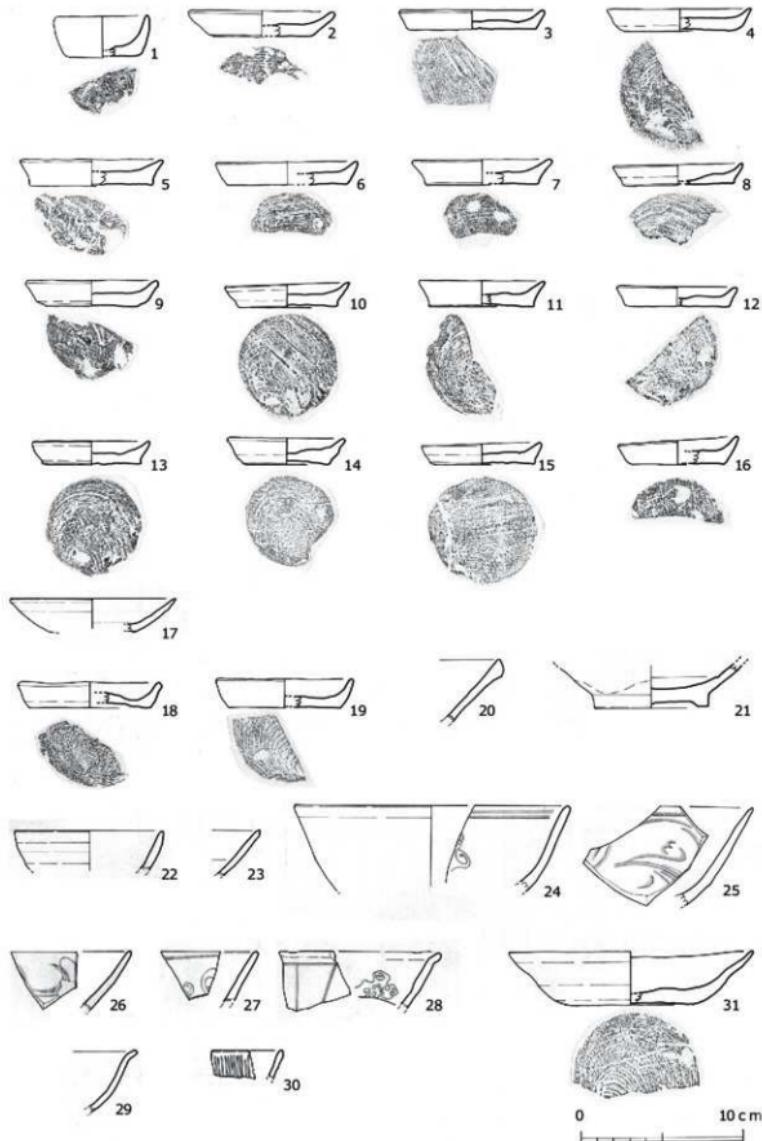
第40図 北宮館跡 1 トレンチ遺物集中箇所出土遺物実測図(1)



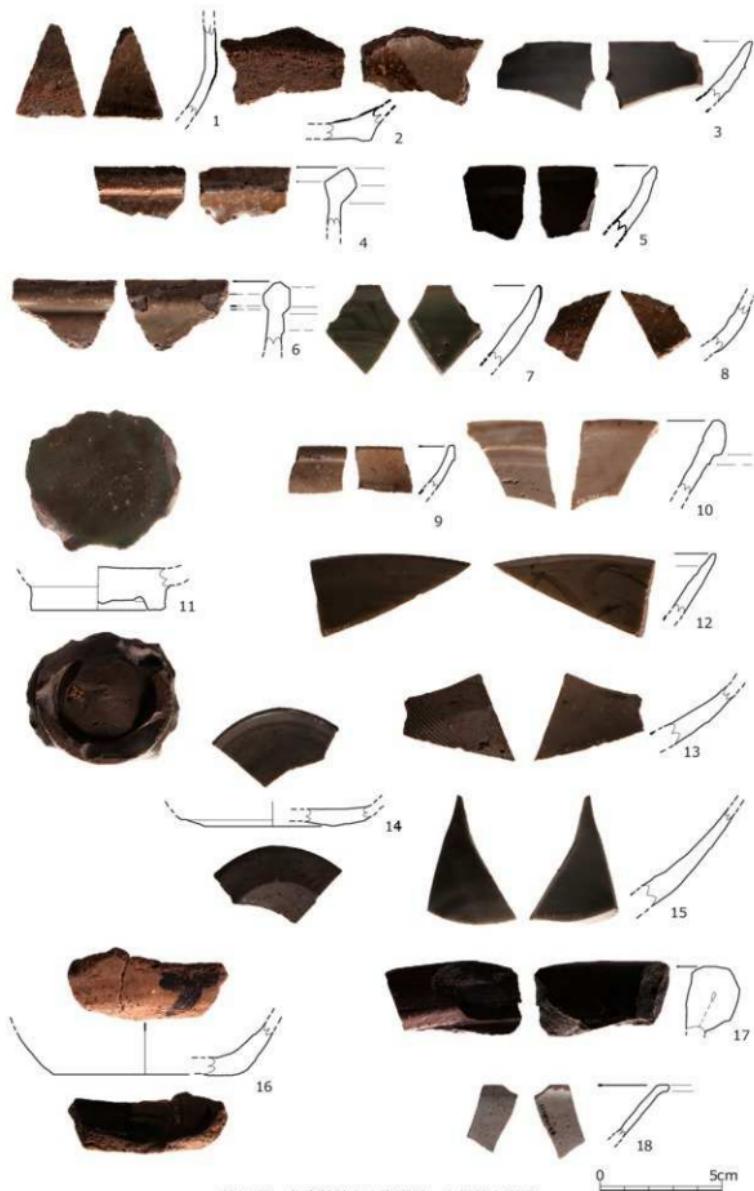
第41図 北宮館跡 1 トレンチ遺物集中箇所出土遺物実測図(2)



第42図 北宮館跡 1 トレンチ遺物集中箇所出土遺物実測図(3)



第43図 北宮館跡 1～3 トレンチ出土遺物実物図
(1～17: 1 トレンチ遺物集中箇所 (4) 18～30: 2 トレンチ 31: 3 トレンチ 4号ピット)



第44図 北宮館跡出土陶磁器・土師器実測図

第43図18~30は2トレンチ遺物包含層出土遺物である。18・19は土師器小皿で、外底部には回転糸切痕が残る。これらの土師器は熊本県北部～中央部の編年の9期（13世紀前半～中葉）から10期（13世紀後半）の年代が考えられる（美濃口1994）。20~23は白磁碗片である。20は肉厚な玉縁をもつ口縁部片である。21は高台内部の繊りが浅い底部から体部下半にかけての破片である。20・21は白磁碗IV類に分類でき、大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）と考えられる（山本2000）。第43図22・第44図3はピロースクタイプの白磁碗の口縁部付近の破片である。22は概要報告書の図面を掲載しており、モノクロであったので、第44図3にカラーで再掲載した。体部から口縁部は内湾し、口唇部は丸みをもつ。外器面にロクロ痕が後線状に残っている。ピロースクタイプII類に分類でき、13世紀末～14世紀前半の時期が考えられる（木下2009）。23は白磁碗の口縁部片である。24~30は青磁碗片である。24~27は内器面に割花文が施されている。28・29は口縁端部が外方に折れている。28は口縁端部に輪花があり、外器面には蓮華文、内器面には花文がある。24~27は龍泉窯系青磁碗I～II類で大宰府D期（12世紀中頃～後半）、28~29は龍泉窯系碗IV類で大宰府G期（14世紀初頭～後半）と考えられる（山本2000）。30は外器面に櫛目文を施した同安窯系碗I類で、大宰府D期（12世紀中頃～後半）に位置づけられる（山本2000）。

第44図2・4は遺物の再整理をおこなった時に確認した陶器で、2トレンチから出土しているが、層位は明確でない。2は底部付近の破片である。外器面、外底部は露胎であり、外底部の端部から外器面にかけて赤褐色に発色している。内器面は施釉され、見込みから体部にかけての箇所に帯状の鉄絵がある。4は口縁部付近の破片で、肥厚した口縁部は断面形が方形に近い。口唇部から内外器面にかけての断面方形の二側面には部分的に赤褐色に発色しており、釉を拭き取った可能性がある。この二側面以外の内外器面は施釉されている。2と4は胎土が類似しており、同じ個体の可能性がある。4は口縁部の特徴から、福建省磁灶窯系盤I～2bに分類でき、11世紀後半～12世紀前半の時期が考えられる（山本2000）。

⑥ 3トレンチの確認調査成果について

【検出遺構】（第45図）

トレンチのはば中央部付近に北西から南東方向に伸びる1号溝跡を確認した。この1号溝跡は2トレンチで確認した溝跡と同じと考えられ、2トレンチと3トレンチの間にある未調査区にも溝跡が続くと想定できる（第35図）。溝跡の幅約70cm～90cmで、断面形は略台形を呈し、深さ約40cmを測る。1号溝跡の東側の隣接箇所に2号土坑の一部を確認した。2号土坑は1号溝跡から切られており、不整形な平面形を呈している。確認最大長は約1.7mである。2号土坑の東側で、3号土坑の一部を確認した。確認できたのは半円形の平面形で、確認最大径約2.1mを測る。ピット群は2号ピット～29号ピットを検出した。これらのピットのうち18基の覆土から土師器小破片が出土した。現状では建物跡は確認できないが、1号溝跡に直交する状態で直線的に分布している7号ピット～13号ピットの列がある。1号溝跡に伴う柵跡の可能性がある。ピットは部分的に確認したものを含めて円形の平面形を呈していると判断できる。ピットの大きさは直径約25cm～30cmのものと直径約12cm～20cmのものに分類できる。断面形は台形で、ピットの深さは前者が約20cm～30cm、後者が約10cm～20cmである。

【土層】（第45図）

土層図はトレンチの北壁で実測した。

I層：灰褐色の表土である。層の厚さ約10cm～30cm。

II-1層：黒褐色の耕作土で、小穢と赤色粒を多量に含む。層の厚さ約4cm～90cm。

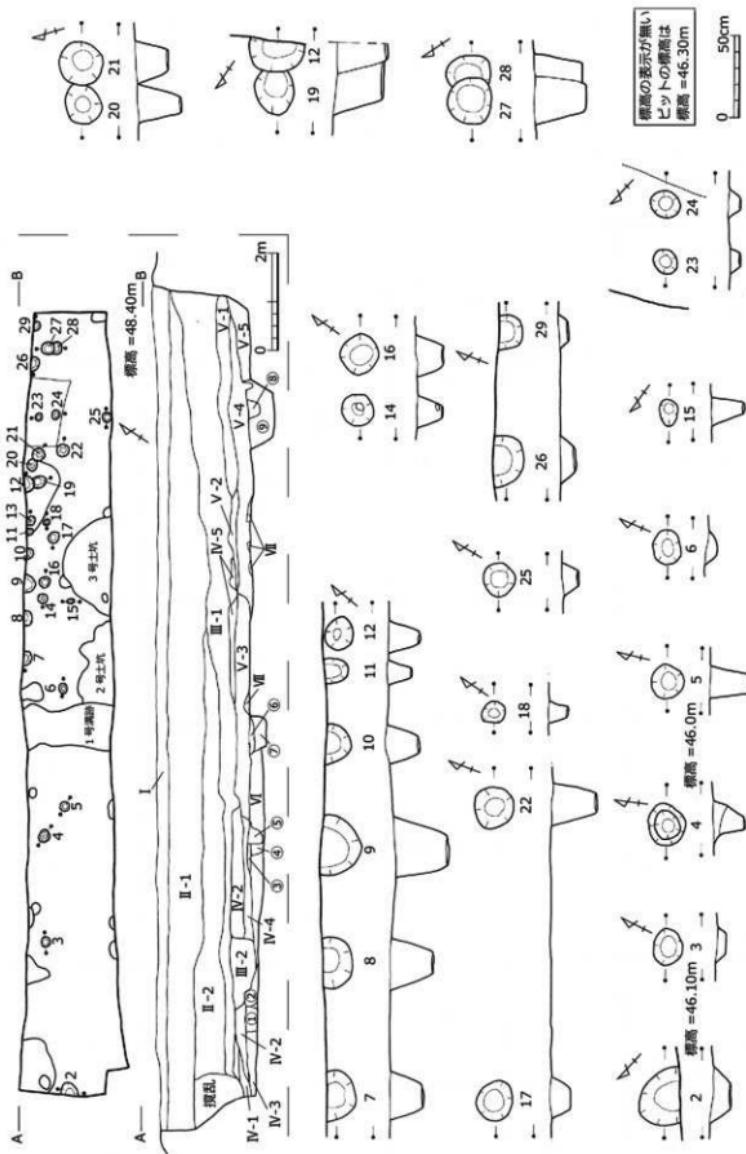
II-2層：黒褐色の耕作土で、II-1層より粘性が強い。層の厚さ約4cm～70cm。

III-1層：暗褐色土で、赤色粒、炭化物、約20cm前後の穢を多く含む。層の厚さ約10cm～90cm。

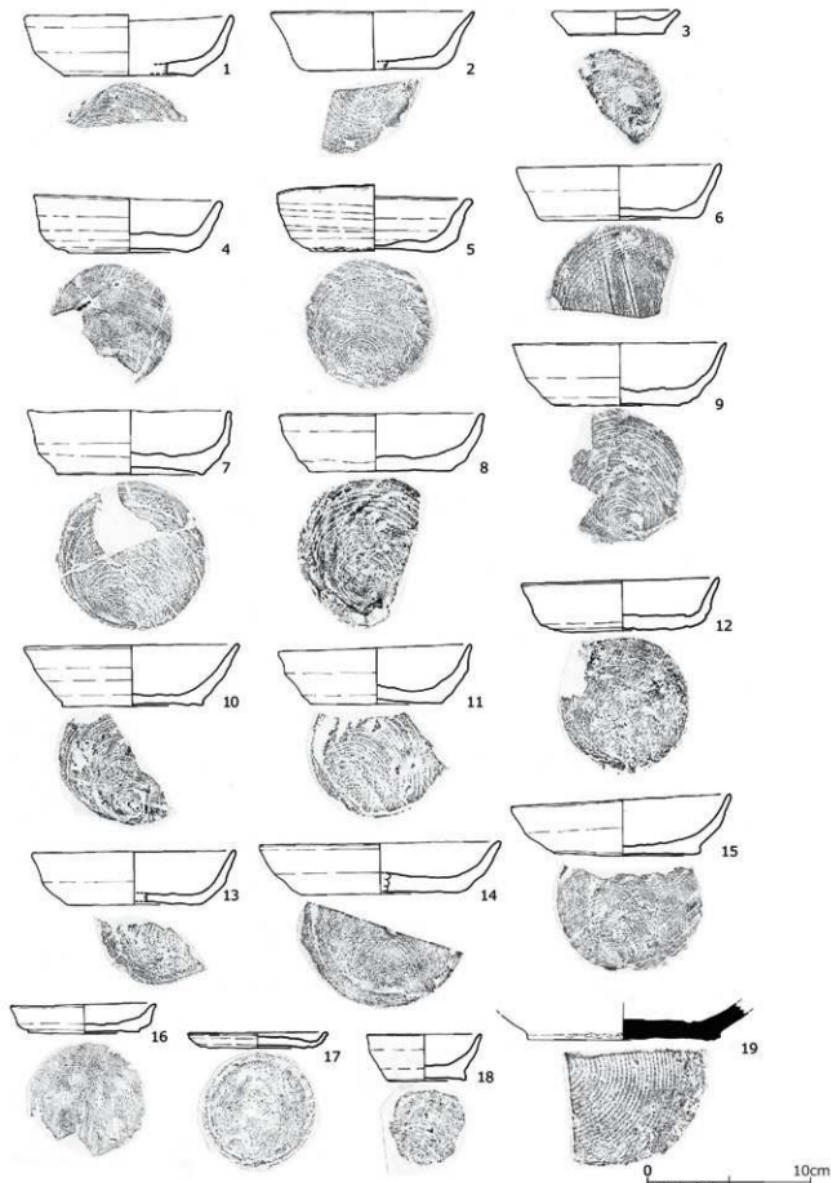
- III - 2 層：暗褐色土で、約10cm前後の礫を多量に含む。層の厚さ約10cm~50cm。
- IV - 1 層：遺物包含層である。にぶい褐色土で、小礫、炭化物を少量含む。トレンチ西隅で部分的に確認した。層の厚さ約10cm~50cm。
- IV - 2 層：にぶい褐色の遺物包含層である。粘性が強く、小礫、炭化物、赤色粒を含む。層の厚さ約2cm~20cm。
- IV - 3 層：黒味が強いにぶい褐色土で、粘性が強い遺物包含層である。トレンチの西壁付近で確認した。層の厚さ約5cm~15cm。
- IV - 4 層：にぶい褐色土で、暗褐色気味の遺物包含層である。トレンチのほぼ中央寄りの箇所で確認した。炭化物、赤色粒、小礫を多く含む粘性の強い層である。層の厚さ約4cm~15cm。
- IV - 5 層：灰褐色気味のにぶい褐色土の遺物包含層である。小礫、炭化物を多量に含む粘性の土である。トレンチのほぼ中央から東側に部分的に確認した。層の厚さ約4cm~20cm。
- V - 1 層：灰褐色の遺物包含層である。炭化物、土師器片を多量に含む粘性の強い層である。トレンチの東端部付近で確認した。層の厚さ約5cm~35cm。
- V - 2 層：灰褐色の遺物包含層である。約5cmの小礫、炭化物、土師器片を多量に含む粘性の土である。V - 1 層の西側で部分的に確認した。層の厚さ約5cm~15cm。
- V - 3 層：灰褐色の粘性がやや弱い土で、遺物包含層である。炭化物、土師器片を多量に含む。トレンチのほぼ中央部に分布する。層の厚さ約10cm~30cm。
- V - 4 層：灰褐色土の遺物包含層で、粘性がある。約10cmの小礫を少量、炭化物、土師器片を含む。トレンチの東壁寄りの箇所で確認した。層の厚さ約2cm~45cm。
- V - 5 層：黄褐色味が強い灰褐色土である。粘性の強い遺物包含層である。トレンチの東端部付近に分布する。小礫を少量、炭化物、土師器片を含む。層の厚さ約5cm~15cm。
- IV 層・V 層は遺物包含層で、IV 層出土遺物は小片が多く、V 層出土遺物はIV 層出土遺物と比べると破片が大きい。
- VI 層：黒褐色土で、粘性がある。層の厚さ約2cm~30cm。
- VII 層：暗黃褐色土で、粘性が強い。部分的にブロック状に分布する層である。層の厚さ約2cm~5cm。
- ①層：にぶい褐色土の覆土である。炭化物、赤色粒を上層に多く含む。層の厚さ約20cm。
 - ②層：①層より暗いにぶい褐色土の覆土で、炭化物、赤色粒を含む。層の厚さ約20cm。
 - ③層：レンズ状に堆積した黄褐色粘質土の覆土である。層の厚さ約5cm。
 - ④層：暗褐色土で、炭化物を含む覆土である。層の厚さ約25cm。
 - ⑤層：暗褐色土の粘性が強い覆土で、炭化物を含む覆土である。層の厚さ約30cm。
 - ⑥層：1号溝跡の覆土で、やや褐色が濃い暗褐色土である。土師器小片、炭化物を多く含む。層の厚さ約2cm~10cm。
 - ⑦層：黒褐色の粘性のある1号溝跡覆土で、黑色粒を含む。層の厚さ約25cm。
 - ⑧層：灰黃褐色の粘性のある覆土である。土師器小片を含む。層の厚さ約20cm。
 - ⑨層：黒褐色の粘性のある覆土である。層の厚さ約50cm。

【出土遺物】（第43図・第46図・第47図）

第43図31は3トレンチ4号ピット覆土出土の土師器壺である。外底部に回転糸切痕と板状圧痕があり、内器面には赤色顔料が残っている。第46図は3トレンチの遺物包含層から出土した遺物である。第46図1~3は上層出土土師器壺・小皿である。外底部残存部に回転糸切痕はあるが、板状圧痕は確認できない。第46図4~15は土師器壺である。4・7・12の外底部には回転糸切痕と圧痕が残る。5・6・8・10・11・12・



第45図 北宮館跡3トレンチ遺構実測図・土層断面図



第46図 北宮館跡 3トレンチ包含層出土遺物実測図（1～3：上層出土遺物）

14・15の外底部には回転糸切痕と板状圧痕がある。16・17は土師器小皿である。16の外底部には板状圧痕が確認できる。18は土師器小環で、外底部に回転糸切痕があり、粘土塊が付着している。出土した土師器の時期については、熊本県北部～中央部の編年の9期（13世紀前半～中葉）から10期（13世紀後半）が考えられる（美濃口1994）。19は東播系の須恵器で、13世紀頃の製品と考えられる。第47図は3トレンチ包含層出土磁器である。1・2は白磁碗片で、白磁V類に分類でき、大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）と考えられる（山本2000）。3～5は青磁片である。3は龍泉窯系青磁碗I類である。外器面に縦の櫛目がある。破片では蓮華文が確認できないが、欠損部分に蓮華文があれば、I～6類と考えられる。細分できないが、大宰府D期（12世紀中頃～後半）に比定できる（山本2000）。4は屈曲した体部から外上方にはば直線的に立ち上がり、口縁部は短く屈折する。龍泉窯系青磁杯III類、大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）と考えられる（山本2000）。5は口縁端部に輪花を有し、内器面に飛ぶ飛雲文を施す。龍泉窯系青磁碗I～4b、大宰府D期（12世紀中頃～後半）に比定できる（山本2000）。

⑦ 4トレンチの確認調査成果について

4トレンチは3トレンチの北側に堀跡と考えられる窪みがあり、その外側になる高い箇所に設定した。そのトレンチの位置関係を示すために、第35図A・B・C・Dではば南北方向の断面図を作成したのが第48図である。図中Aは北側、Dは南側になる。D付近にある段差は方形区画の高まりの北端部にあたる。この高まりの平坦面に1～3トレンチを設定した。D付近の段差の低い箇所はB・C付近まで続き、堀状の窪みとなっており、高低差約1mを測る。この窪みの北端部で約1.5m高くなり、Aに向かって約5mの長さの平坦面になっている。その平坦面端部で約1.5mの高低差のある段があり、その高まりがAに向かって伸びている。この二段の高まりがある箇所にはば南北方向に4トレンチを設定した。

【検出遺構・土層】（第49図）

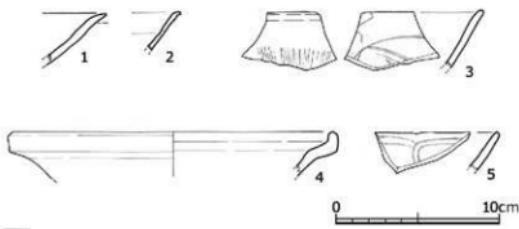
4トレンチで確認したのは2号溝跡である。2号溝跡の状況は土層断面図の中で把握するのが分かりやすいので、土層と遺構を併せて記述する。4トレンチの土層は1～3・4トレンチの基本土層とは異なる状況

である。そのため、4トレンチの土層は他のトレンチ土層から独立した扱いとする。

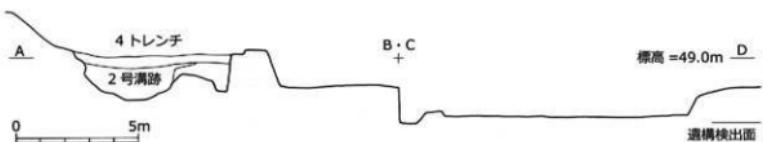
第49図は4トレンチ東壁で実測したものである。

I層：表土である。層の厚さ約10cm～50cm。

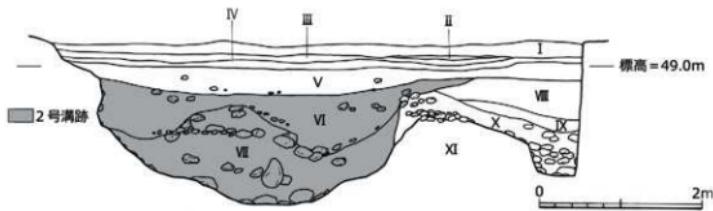
II層：水田の床土であり、部分的に分布する。



第47図 北宮館跡3トレンチ包含層出土遺物実測図



第48図 北宮館跡4トレンチと1～3トレンチの断面比較図



第49図 北宮館跡4トレンチ東壁土層・2号溝跡断面図

層の厚さ約2cm～5cm。

III層：水田の床土である。層の厚さ約2cm～12cm。

IV層：水田の床土である。層の厚さ約2cm～15cm。

V層：灰褐色土である。きめが粗く、しまりがない。砂礫から約5cmの円礫を含む。層の厚さ約10cm～30cm。

VI層：2号溝跡の覆土である。灰褐色の遺物包含層で、きめが粗く、しまりがない。粗い砂質土が層状に堆積している。層の厚さ約5cm～70cm。

VII層：暗褐色の2号溝跡の覆土である。ややきめが粗く、しまりがなく、水分を含む。約5cm～人頭大の円礫を多量に含むことから、人為的な石の搬入が考えられる。土師器小片を多量に含み、少量の炭化物、骨も混じる。

VIII層：暗褐色土で、きめが細かく、しまりがない。砂礫から約5cmの円礫を含む。整地層の可能性がある。層の厚さ約5cm～50cm。

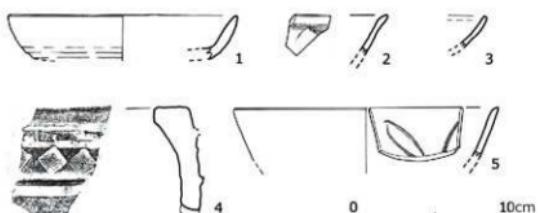
IX層：暗褐色土で、きめが細かく、しまりがない。粗い砂質土を部分的に含む。土師器小片が出土する。整地層の可能性がある。層の厚さ約2cm～20cm。

X層：褐色土で、きめが粗く、しまりがない。人頭大の円礫を多量に含む。整地層の可能性がある。層の厚さ約20cm～60cm。

XI層：灰黃褐色砂質土である。きめが粗く、硬くしまる。約5cmから人頭大の円礫を多量に含む。地山と考えられる。

2号溝跡はⅦ層から掘り込まれている。Ⅷ層・Ⅸ層・X層が整地層であれば、地山であるXI層の南に傾斜する地形を平らにするために人工的に埋めたと考えられる。そうであれば、Ⅶ層・Ⅸ層・X層の盛土後に2号溝跡を掘ったことになり、計画的な造成工事を行ったと推定できる。

2号溝跡は検出面での幅約4.5mで、略台形の断面形を呈し、底部幅約2m、深さ約1.3mを測る。溝の規模としては大きなものである。溝跡を確認した方向から、2号溝跡はほぼ東西方向に続くと想定でき、1号溝跡が伸びる方向と直角に交わることになる。さらに、2号溝跡の伸びる方向は方形区画の高まりの北端部と平行関係になる。2号溝跡



第50図 北宮館跡4トレンチ出土遺物実測図

が方形区画に伴つたものであるか、方形区画の外側のものに伴つたものであるか、現状では判断できない（第35図）。

【出土遺物】（第44図・第50図）

第44図5、第50図1～5は2号溝跡の覆土であるVI層・VII層から出土した遺物である。第44図5は森本分類III類の天目茶碗片である。小片のため器形全体が不明であるので、①類・②類の細分はできない。12世紀前半～後半の時期に考えられる（森本1994）。外器面の口縁部下には押さえて目立たない程度の浅い窪みがある。その窪みに沿つて黒色帯がある。内器面は内側に丸くなりながら口縁端部は緩く外反しながら平らな面をもつてゐる。その平らな面に横方向の黒い細線が表れてゐる。内外器面には褐色の地に黒い糸目がでてゐる。第50図1は土師器壺の体部片である。2は龍泉窯系青磁碗II類の口縁部片で、外器面に片形の蓮弁文が施されている。大宰府E期（13世紀前後～前半）と考えられる（山本2000）。3は白磁の口縁部片で、皿であろうか。釉には細かい質入がある。森田編年D群で、14世紀後半～15世紀頃のものと考えられる（森田1982）。4は瓦質土器の風炉である。口縁部下の二条の凸帯間に同心角のスタンプ文を施す。その凸帯の下には半円状の窓上端部が確認できる。15世紀以降の製品と考えられる。5は龍泉窯系青磁碗I～2類の口縁部片で、大宰府D期（12世紀中頃～後半）に比定できる（山本2000）。

⑧ 5トレンチの確認調査成果について

5トレンチは2・3トレンチの西側で、直線距離約5m離れた地点の一段低くなった畝に設定した（第35図）。5トレンチの平面形はやや歪んだ約5m×約5mの略方形である（第51図）。

【検出遺構】

V層上面で、1号掘立柱建物跡、1号石列跡、4号土坑、5号土坑を検出した。

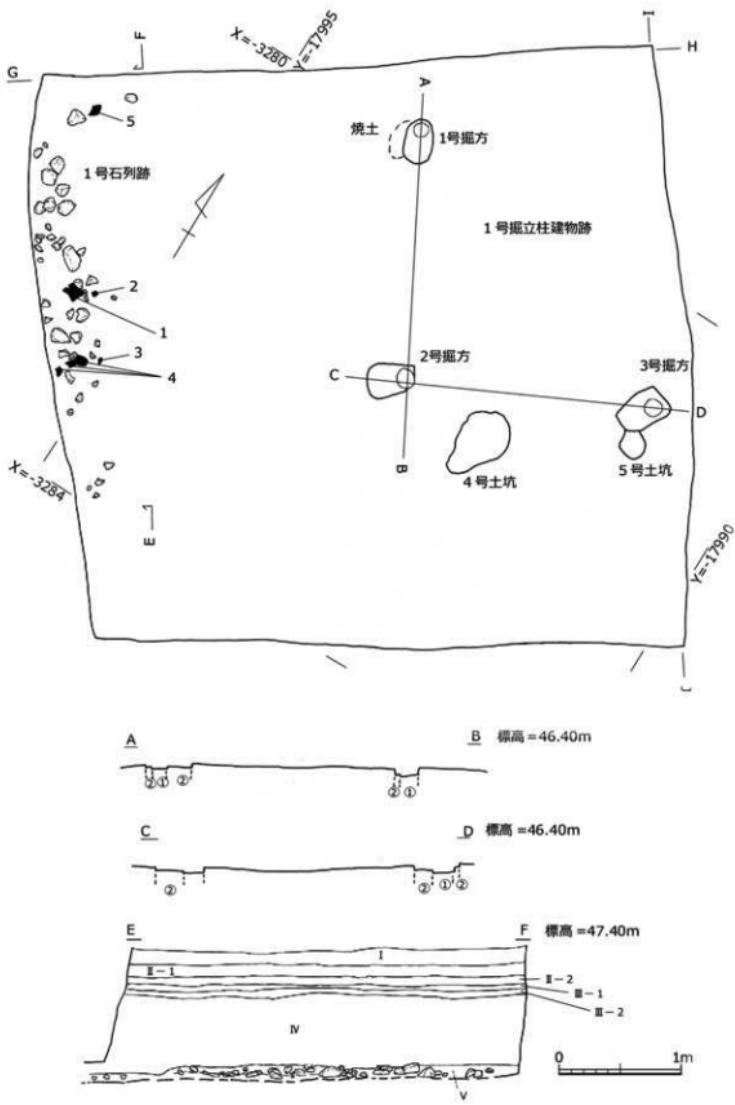
1号掘立柱建物跡（第51図）

掘立柱建物跡の一部を調査区の北東寄りの箇所で確認した。確認したのは1号掘方～3号掘方で、検出面から約5cm掘り下げて柱痕跡を確認した。柱痕跡の確認面より下部は掘り下げないで保存した。1号掘方は北壁付近で検出した。掘方の平面形は梢円形を呈し、長軸約45cm、短軸約20cmを測る。柱痕跡は掘方の北側寄りの部分にあり、円形の平面形を呈し、直径約12cmを測る。1号掘方の西側隣接に橙色の焼土のブロックがある。1号掘方がこの焼土ブロックを切っている。2号掘方は調査区のほぼ中央区で確認した。掘方の平面形は略長方形で角が丸くなつており、長辺約35cm～40cm、短辺約20cm～25cmを測る。柱痕跡は掘方東側端部で検出した。柱痕跡は平面形が円形で、直径約15cmである。3号掘方は東壁寄りの箇所で確認した。掘方の平面形は略長方形を呈し、長辺約40cm、短辺約20cm～25cmを測る。柱痕跡は円形の平面形で直径約15cmである。3号掘方は南側に隣接する5号土坑を切っている。柱痕跡間の直線距離は1号柱痕跡と2号柱痕跡間、2号柱痕跡と3号柱痕跡間ともに約210cmである。第51図A～Bは1号掘方・柱痕跡から2号掘方・柱痕跡までの断面図である。第51図C～Dは2号掘方・柱痕跡から3号掘方・柱痕跡までの断面図である。両者とも柱間の検出面は平坦である。調査区外に1号掘方、3号掘方に続く掘方が存在すると考えられる。

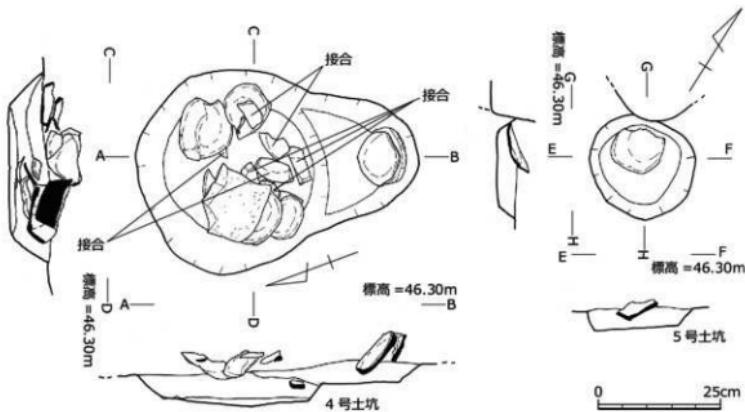
第51図①層・②層は掘方・柱痕跡の土層である。①層は柱痕跡で、黒褐色のしまりがなく、フカフカした土である。②層は掘方の覆土である。暗褐色土で橙色の焼土を多量に含む。

1号石列跡（第51図）

石列跡は調査区の西壁に沿つて石が帶状に並んだ状態で確認した。石の間からは土師器等の遺物や炭化物が出土した（第51図黒色で表示）。確認した範囲は幅約20cm～60cm、長さ約3.5mである。石の殆どが円錐で、角錐が少量混じる。石の大きさは約2cm×2cm～約20cm×10cmで、約5cm×5cmの小型の石が多い。



第51図 北宮館跡 5トレンチ遺構実測図



第52図 北宮館跡 5トレンチ 4号・5号土坑実測図

石列は1号掘立柱建物跡の1号・2号柱痕跡を結んだA-Bの方向と平行関係にあり、A-Bラインから西側に約25m離れている。石列は限られた範囲にあり、規格性をもつことから、石列の石は人為的に石を帯状に配置したと考えられる。石列は1号掘立柱建物跡の西側屋根先からの雨水を受けとめる施設の役目をもっていると想定できる。

第51図E-Fは石列の東側に任意に設定したポイントE-Fから石列と西壁土層を見通した図である。石列はV層上面中にほぼ水平に並んでおり、約5cm~10cmの上下幅に収まっていることが分かる。

4号土坑（第51図・第52図）

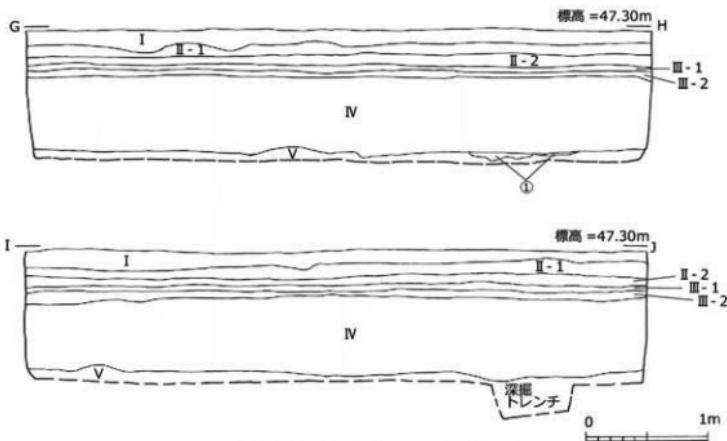
4号土坑は2号掘方と3号掘方を結んだラインの南側に約20cm離れた箇所にあり、1号掘立柱建物跡に隣接している。4号土坑の平面形は不整な楕円形で、南側端部付近が狭まる。長軸約60cm、短軸約20cm~40cmを測る。第52図A-Bは4号土坑長軸方向の断面図である。断面形は二段掘りになっており、南側の狭まる部分の深さは約5cmと浅く、北側部分の深さは約8cm~10cmで深い。第52図C-Dは4号土坑短軸方向の断面図である。断面形は深い皿状を呈し、深さ約10cmを測る。

4号土坑内から土師器小皿4個体、土師器壺9個体が一括した状態で出土した。二段掘りの深い箇所から土師器2個体が口縁部を上にして斜めの状態で重なって出土した。深い箇所から11個体の土師器が口縁部を上にした状態で、まとまった状態で出土した。深い箇所から出土した土師器片の中で、3片が接合したのが1個体、2片が接合したのが2個体ある。11個体の土師器がまとまって出土した箇所の最上部には人為的に破碎した約14cm×12cmの円錐を置いている。

4号土坑の覆土は分層できず、ややしまっている暗褐色土である。この土には約1cm~3cmの炭化物や極小の炭化物が多量に含まれる。

5号土坑（第51図・第52図）

5号土坑は1号掘立柱建物跡3号掘方の南側にあり、3号掘方に切られている。5号土坑の平面形は円形で、直径約20cmを測る。土坑の断面形は深い皿状を呈し、深さ約5cmを測る。土坑の北側端部から土師器壺1個体が口縁部を上にしてやや斜めの状態で出土した。土師器内部には多量の炭化物と灰が入っていた。この土師器には「×」の刻書が施されている。土坑の覆土は黒褐色土で分層できない。



第53図 北宮館跡 5トレンチ土層断面図

【土層】

第53図はトレンチの北壁 G - H、東壁 I - J で実測した土層図である。第51図 E - F は西壁土層の見通し実測図である。

I 層：灰褐色の表土である。層の厚さ約 5cm～20cm である。

II - 1 層：灰褐色の水田耕作土である。層の厚さ約 5cm～15cm である。

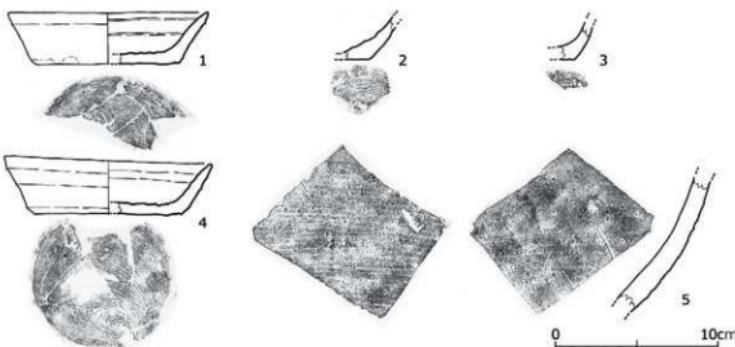
II - 2 層：赤灰褐色の水田床土である。層の厚さ約 5cm～12cm である。

III - 1 層：灰褐色の旧水田耕作土である。層の厚さ約 2cm～8cm である。

III - 2 層：赤灰褐色の旧水田床土である。層の厚さ約 4cm～12cm である。

IV 層：暗褐色の遺物包含層である。小石を多量、焼土・炭化物を少量含む。層の厚さ約 55cm～65cm である。

V 層：暗褐色の遺物包含層である。IV 層と類似しているが、IV 層よりも焼土・炭化物を多量に含む。層の厚さ約 5cm～15cm まで確認した。この層の上面は石列の石が並んでいる面であり、掘立柱建物跡



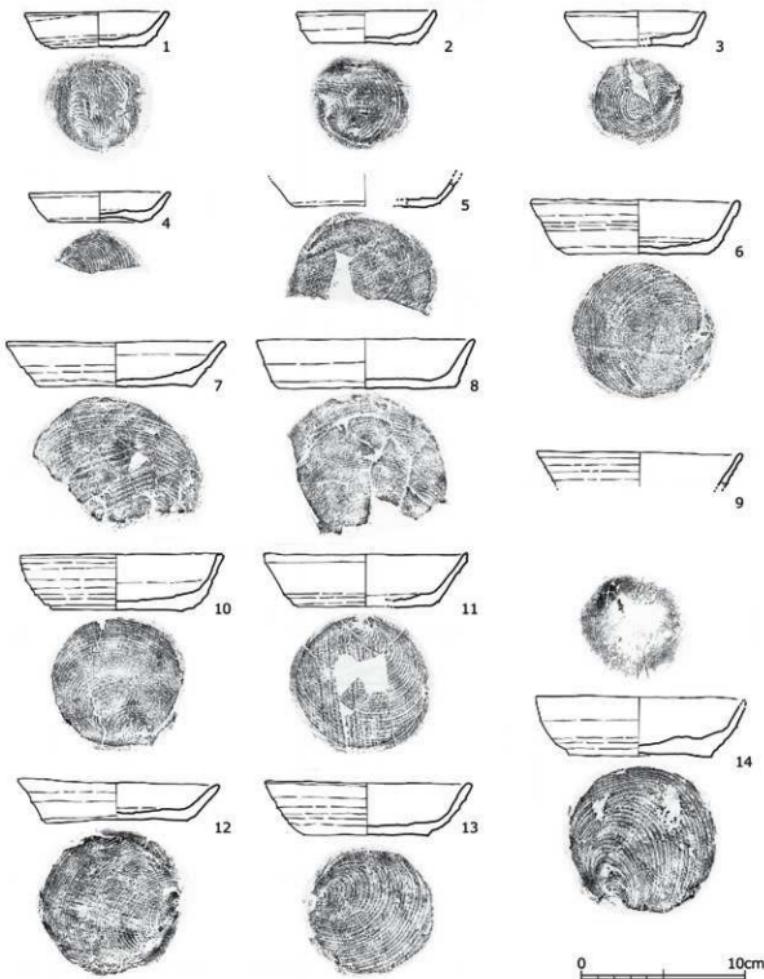
第54図 北宮館跡 5トレンチ石列跡出土遺物実測図

などの遺構検出面でもある。V層上面は当時の生活面に近いと考えられる。

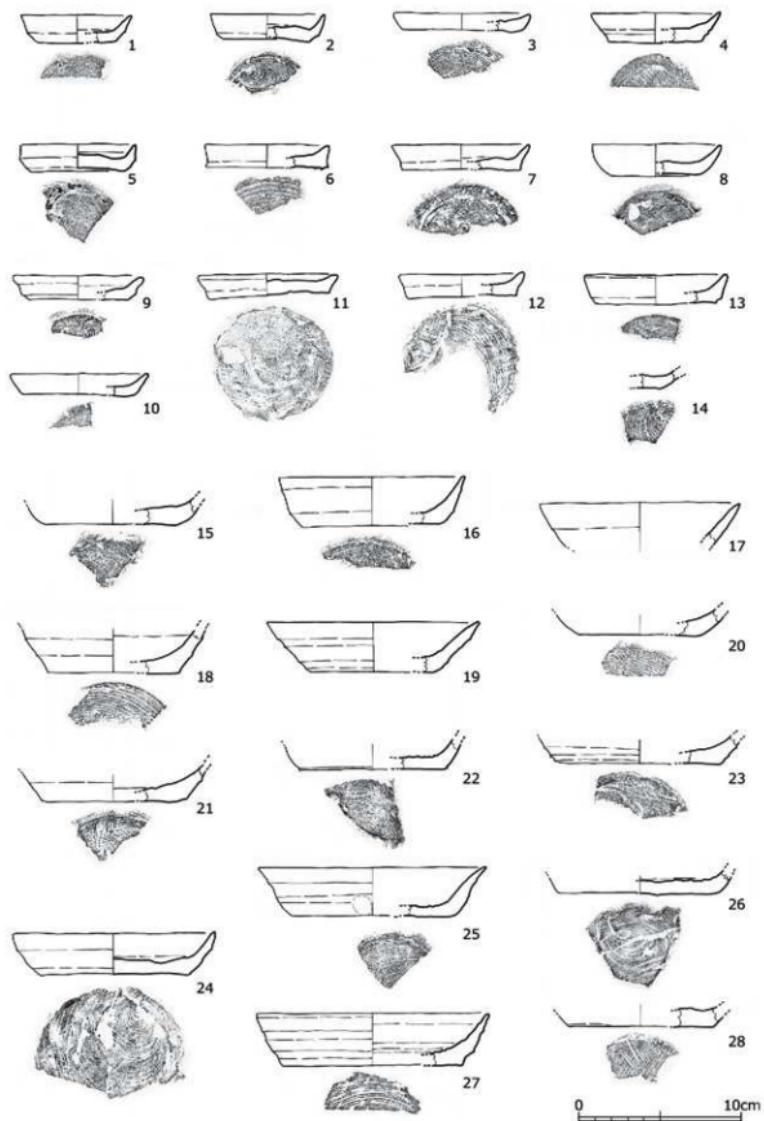
①層：淡橙色の焼土層で、ブロック状に入っている。1号掘立柱建物跡の1号掘方が切っている焼土はこの層と同じである。層の厚さ約2cm～14cmである。

【1号石列跡出土遺物】(第51図・第54図)

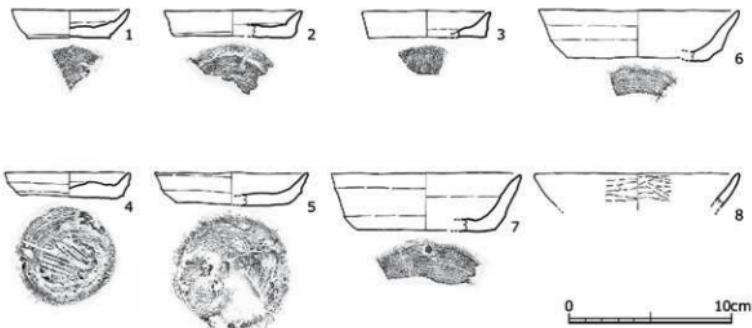
第54図は1号石列の石と石の間から出土した遺物である。1は石列跡のほぼ中央部で、9片に割れた状態でまとまって出土した土師器坏片である(第51図1)。1は外底部に回転糸切痕があり、見込みに渦巻状の



第55図 北宮館跡 5トレンチ 4号・5号土坑出土遺物実測図 (1～13: 4号土坑 14: 5号土坑)



第56図 北宮館跡 5トレンチIV層出土遺物実測図



第57図 北宮館跡5トレンチV層出土遺物実測図

凹凸が顕著であり、中心に近い部分に軽いナデが確認できる。外器面の体部と底部の境に部分的な指頭痕が残る。2・3は土師器環の底部から体部にかけての破片である。2は石列跡のはば中央部（第51図2）、3は石列跡の南端部（第51図3）で出土した。2・3の外底部に回転糸切痕がある。4は口縁部付近を一部欠いた土師器環片である。石列跡から出土した3点（第51図4）とV層出土の1点が接合した。外底部には回転糸切痕があり、底部と体部の境付近に部分的に板状圧痕と思われるものが確認できる。見込み中央部に溝巻状の凹凸が明瞭に残り、中心部付近に軽いナデを施す。5は石列跡の北端部（第51図5）で出土した備前焼の甕か壺の胴部片であろう。外器面は平行タタキ痕が残り、にぶい赤褐色を呈している。1・4の土師器は熊本県北部～中央部の編年の9期（13世紀前半～中葉）から10期（13世紀後半）と考えられる（美濃口1994）。

【4号土坑出土遺物】（第55図）

第55図1～13は4号土坑から一括出土した土師器で、外底部に回転糸切痕がある。包含層出土の土師器と比較すると、完形品や完形品に近い状態のものが多い。1～4は土師器小皿である。1・2の見込みにはヨコナデの後にナデを施している。3・4の見込み中央部付近にはヨコナデの後にナデを加えている。1～4の外底部には回転糸切痕があり、1～3の外底部には板状圧痕が確認できる。1の口唇部に1箇所、2の口唇部の5箇所に煤が付着している。5～13は土師器環である。見込みにヨコナデ後のナデを施しているのは5・6・7・11・13である。見込みにヨコナデ後の弱いナデが確認できるのが10である。12の見込みにはヨコナデ後に指オサエを行っている。外底部に板状圧痕が残るのが5・6・7・11～13である。8は見込みにヨコナデ後のナデが無く、外底部に板状圧痕は確認できない。9は口縁部から体部にかけての破片である。8・11の口縁部から内器面の体部にかけての箇所に部分的に煤が付着している。

【5号土坑出土遺物】（第55図）

第55図14は5号土坑から出土した土師器環である。外底部には回転糸切痕がある。見込みにはヨコナデの後に弱いナデを施している。見込みには溝巻状に盛り上がった箇所に、焼成前刻書「メ」が確認できる。

【IV層出土土師器】（第56図・第44図）

第56図は5トレンチIV層出土土師器である。第56図1～14は土師器小皿で、外底部に回転糸切痕が残る。見込みの中央部でヨコナデの後にナデを加えているのが4・5・7・8・11であり、これらの外底部には板状圧痕が確認できる。11の外底部には指オサエ痕と煤付着箇所が各々1箇所ある。12・14の外底部には部分的に線状痕が残り、12には窓みが1箇所確認できる。第56図15～28は外底部に回転糸切痕がある土師器環で

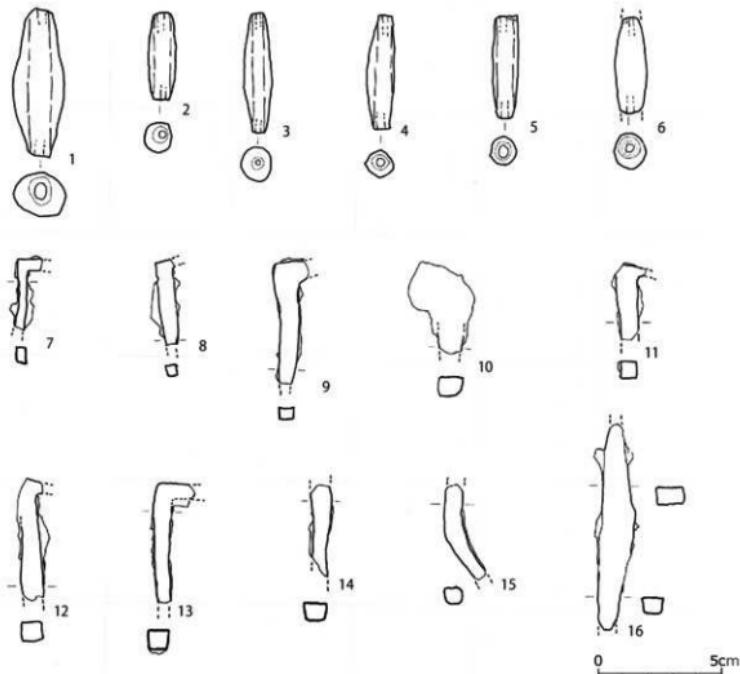
ある。15・21・22・23・24・26・28の見込みにはヨコナデ後のナデが確認でき、外底部には板状圧痕が残る。20の外底部には線状圧痕が確認できる。15・21・25・26・27の見込みには渦巻状の凹凸がある。25の外器面体部の底部近くに指オサエ痕がある。第44図16は5トレンチIV層出土の墨書きがある土師器壊底部付近の破片で、外底部には回転糸切痕がある。外器面には墨書きがあり、内器面には墨痕が残っている。墨書きは「大」、「十」の可能性があるが、正確には判読できない。

【V層出土土器】(第57図)

第57図1～8は5トレンチV層出土の土器である。1～5は外底部に回転糸切痕をもつ土師器小皿片である。1・4・5の外底部には板状圧痕が確認できる。2の外底部には線状の窪みがある。1・2・5の見込みにはヨコナデの後にナデを加えている。4の見込みは渦巻状の凹凸が顕著で、中央ではナデが施されている。6・7は外底部に回転糸切痕がある土師器壊片である。7は残存部の見込みに渦巻状の凹凸が確認できる。8は内外器面にヘラ磨きを施した瓦器片である。中世前期の構成器種の一つで、12世紀代のものと思われる（中島1998）。

【4号土坑、5号土坑、IV層・V層出土土器の時期】

5トレンチから出土した土師器を口径・外底部の板状圧痕の有無、見込みのナデ調整の有無から時期を検討すると、熊本県北部～中央部の編年の9期（13世紀前半～中葉）から10期（13世紀後半）と考えられる（美濃口1994）。5トレンチの造構の時期としては13世紀前半～後半が想定できる。



第58図 北宮館跡 5トレンチIV層・V層出土遺物実測図

【出土陶磁器】(第44図)

第44図 6～15・17・18は5トレンチ出土の陶磁器である。6～15はIV層出土で、17・18はV層出土である。6は磁灶窯系陶器盤1類 I - 2 b (11世紀後半～12世紀前半) の口縁部から体部にかけての破片と考えられる(山本2000)。口縁部は肥厚し、断面形が方形に近い。口唇部に重ね焼きの目跡が残る。8は6の胎土と類似しており、6の体部である可能性がある。外器面の下半分が露胎である。7は青磁の口縁部片で、口縁部に沿って外器面に雷文帯がある。青磁C類(14世紀後半～15世紀前半)と考えられる(上田1982)。9の口縁部片は内湾気味の直口縁で、小さな玉縁をもつ。白磁碗II類で、大宰府C期(11世紀後半～12世紀前半)と考えられる(山本2000)。10は肉厚な玉縁をもつ口縁部片で、玉縁直下に回転ヘラ削り痕がある。白磁碗IV類で、大宰府C期(11世紀後半～12世紀前半)と考えられる(山本2000)。11の青磁高台片は、高台外器面が露胎で、疊付は釉を削り取り、高台内は釉を環状に削り、中心部付近が凸状になっている。龍泉窯系青磁碗IV類で、大宰府G期(14世紀初頭～後半)と考えられる(山本2000)。12は青磁の口縁部片で、内器面に片彫蓮華文が施されている。龍泉窯系青磁碗I - 2類で、大宰府D期(11世紀後半～12世紀前半)と考えられる。13は体部片で、外器面下部が露胎である。外器面に櫛目文、内器面にジグザグ文がある。同安窯系青磁と考えられる。14は青磁の底部片で、外底部は釉を搔きとる。龍泉窯系青磁皿I - 1 a類で、大宰府D期(11世紀後半～12世紀前半)と考えられる(山本2000)。15は外器面に蓮弁文のある龍泉窯系青磁碗II類と思われ、大宰府E期(13世紀前後～前半)と考えられる(山本2000)。17は備前焼の甕か壺の口縁部片である。折り曲げた口縁部が頭部に着いている。折り曲げた量が多く、玉縁が大きい。中世2期(13世紀中頃～14世紀前葉)と考えられる(乗岡2005)。18は白磁碗の口縁部片で、口縁端部が屈折して上端部が水平になっている。白磁碗V - 4類で、大宰府D期(12世紀中頃～後半)と考えられる(山本2000)。

【IV層・V層出土土製品】(第58図)

第58図 1～4は5トレンチIV層出土、5・6は5トレンチV層出土の土錐である。1～4は完形品である。1はほぼ中央部が膨らんだ大型品で、2～4は中央部が僅かに膨らみ。上下両端が細くなった小・中型品である。5・6はほぼ中央部がやや膨らんだ中型品である。5は上端部付近、6は上下両端部が欠けている。

【IV層出土鉄器】(第58図)

第58図 7～16は5トレンチIV層から出土した鉄釘片である。鉄釘の体部断面形は方形、長方形を呈している。7・8・9・11・13の上端部は「L」字形に屈曲している。10は鋸が著しいので形状が分からない。14・15は体部の一部分で、15は下端部付近が曲がっている。16は上下先端部を欠いており、体部断面形が長方形の合釘である。右側面のほぼ中央部に突起が確認できる。その突起がある部分の幅が最も広く、上下両端に向けて幅が狭くなる(堀川・梅沢1962)。

⑨ 北宮館跡（菊之城跡）5トレンチ、菊之池B遺跡R1調査区1号石組の自然科学分析について

はじめに

菊之池B遺跡（熊本県菊池市深川所在）では、発掘調査の結果、13世紀前半とみられる石組遺構が菊池川に近接して検出されていることから、「菊池一族」に関連した船着き場跡の可能性が指摘されている。

本分析調査では、遺構等から出土した炭化材を対象として、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施し、当時の年代観や用材に関する資料を作成する。

1. 試料

試料は、「北宮館跡（菊之城跡）5トレンチ IV層（炭化物）」、「北宮館跡（菊之城跡）5トレンチ 4号土坑炭化物」、「菊之池B遺跡R1調査区 1号石組裏込め石内出土」より出土した炭化材3点である。これらを対象として、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。この他、「1号石組裏込め石内出土」より採取された、炭化物を包有する土壤（灰褐色の砂質シルト）1点を対象として、珪藻分析の概査をあわせて実施する。

2. 炭化材の分析

2-1. 分析方法

(1) 炭化材同定

炭化材同定は、年代測定の試料調整の際に削り落とした部分を用いる。木口（横断面）・板目（放射断面）、板目（接線断面）の各削片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(2) 放射性炭素年代測定

炭化材は、実体顕微鏡で観察し、周囲を削り落として付着物等を取り除き、50mg程度に調整する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube と Ionplus社のAge 3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。曆年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk 2009)、較正曲線はIntCal20 (Reimer et al. 2020)である。

第2表 樹種同定結果

試料名		樹種
北宮館跡5トレンチ	IV層（炭化物）	モチノキ属
北宮館跡5トレンチ	4号土坑炭化物	ツバキ属
菊之池B遺跡R1調査区	1号石組裏込め石内出土	クスノキ科

第3表 放射性炭素年代測定結果

番号	方法	補正年代 (曆年較正用) BP	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代				Code No.
				年代値	確率%	YU-	pal-	
IV層（炭化物）	AAA (IM)	625±20 (625±20)	-25.98 ±0.44	cal AD 1303 - cal AD 1324	647 - 627 calBP	32.6		
				σ cal AD 1355 - cal AD 1368	595 - 583 calBP	18.1		
		625±20 (625±20)	-25.98 ±0.44	cal AD 1380 - cal AD 1392	570 - 558 calBP	17.6	YU-	pal-13657
				2 cal AD 1298 - cal AD 1329	632 - 621 calBP	39.3		
4号土坑炭化物	AAA (IM)	655±20 (655±20)	-29.23 ±0.49	σ cal AD 1338 - cal AD 1396	612 - 554 calBP	56.1		
				cal AD 1295 - cal AD 1307	635 - 643 calBP	23.1		
		655±20 (655±20)	-29.23 ±0.49	σ cal AD 1364 - cal AD 1385	587 - 565 calBP	45.1	YU-	pal-13658
				2 cal AD 1285 - cal AD 1321	665 - 629 calBP	43.0	14296	
1号石組裏込め 石内出土	AAA (IM)	635±20 (634±20)	-27.39 ±0.52	σ cal AD 1357 - cal AD 1390	593 - 560 calBP	52.4		
				cal AD 1302 - cal AD 1321	649 - 629 calBP	31.7		
		635±20 (634±20)	-27.39 ±0.52	σ cal AD 1358 - cal AD 1369	592 - 581 calBP	17.4	YU-	pal-13659
				2 cal AD 1293 - cal AD 1329	658 - 622 calBP	40.8	14297	
				σ cal AD 1346 - cal AD 1395	605 - 555 calBP	54.7		

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5) 曆年の計算には、OxCal v4.4を使用。

6) 曆年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。

7) 較正データーセットは、IntCal20を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を九めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

2-2. 結果

(1) 炭化材同定

結果を第2表に示す。「IV層（炭化物）」がモチノキ属、「4号土坑炭化物」がツバキ属、「1号石組裏込め石内出土」がクスノキ科に同定された。以下、解剖学的特徴を述べる。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で管孔は単独および2～3個が放射方向に複合する。道管は單穿孔、壁孔は交互状。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周間状。

・モチノキ属 (Ilex)

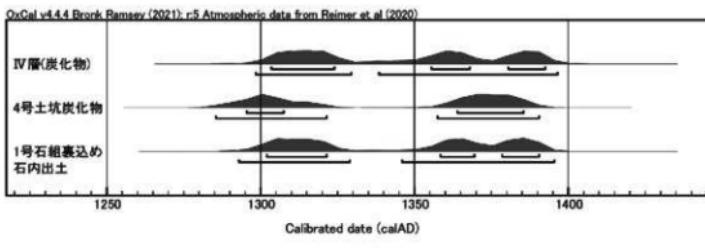
散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～5個が複合して散在する。道管は階段穿孔、壁孔は対列状。内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・ツバキ属 (Camellia) ツバキ科

散孔材で、管孔は小さく、単独および2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔、壁孔は対列～階段状。放射組織は異性、1～4細胞幅、5～40細胞高。

(2) 放射性炭素年代測定

結果を第3表に示す。炭化材は定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラファイトは十分得られている。同位体補正を行った値は、「IV層（炭化物）」が 625 ± 20 BP、「4号土坑炭化物」が 655 ± 20 BP、「1号石組裏込め石内出土」が 635 ± 20 BPである。



第59図 历年較正結果

历年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、歴年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20 (Reimer et al., 2020) を用いる。 2σ の値は、「IV層(炭化物)」がcalAD1298～1396、「4号土坑炭化物」がcalAD1285～1390、「1号石組裏込め石内出土」がcalAD1293～1395である。

2-3. 考察

樹種同定の結果、炭化材は広葉樹のクスノキ科、モチノキ属、ツバキ属に同定された。いずれも暖地に多い種類を多く含み、現在の九州地方の山野で普通にみられる。用途は不明であるが、炭化していることから燃料材等に使われたと考えられ、種類構成から周辺で入手しやすい樹木を使用したと推測される。全国的な傾向をみると、燃料材や枕材など簡易的に用いられる木材は、周辺から採取して用いられるため複雑な組成を示し、周辺植生を反映すると考えられている（伊東・山田編, 2012）。一方、年代値はいずれも歴年で14世紀を示し、推定される年代値より新しい。本遺跡は何度か改修した形跡があることから、改修後の年代観を表している可能性もある。

3. 珪藻分析概査

(1) 分析方法

試料を少量とり、傾斜法で砂分を除去した後、スメアスライドを作成し、観察を行う。

(2) 結果

試料には、粘土～シルト粒径の粒子がみられるのみで、珪藻化石は検出されない。

引用文献

- Bronk RC. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
 林 昭三. 1991. 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫. 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東隆夫. 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東隆夫. 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
 伊東隆夫. 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東隆夫. 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 伊東隆夫・山田昌久（編）. 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.

- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S. 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト。伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach AH, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト。伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

(3) 確認した遺構の保護について

確認調査で確認した遺構は、遺構保存の目的と確認調査時の掘り下げ深度を示すために、土のう袋やブルーシートで遺構を覆った後に、調査で掘り上げた土を重機で埋め戻した。調査区ごとに遺構の保護措置について述べる。

R 1 調査区（第60図1・2）

R 1 調査区の1号石組、2号石組の擂鉢状の石組の底面は平坦に、壁面は壁の傾斜に沿った状態で土のう袋を積んだ。さらに、その上に土のう袋を重ねて保護した。平坦面にある石組は石の上に土のう袋を二段に載せた。また、2号石組の東側側壁は底面から傾斜した壁面に沿って、下から上に向けて土のう袋を重層的に積み上げて保護した。これら以外の箇所は一段の土のう袋で覆った。1号石組のⅢ層上面まで掘り下げた箇所はブルーシートで覆った。

R 2 B 区（第60図3・4）

R 2 B 区の3号石組の西側半分は検出面の石組が残っているので、石と石の隙間に土のう袋を密着させた。その上に土のう袋を重ねて保護した。それ以外の箇所は調査区全面に一段の土のう袋が及ぶようにした。3号石組の東側半分は深掘りを行ったので、最下面で検出した石組の上に土のう袋を重層的に載せ、壁面に露出出した石は壁面に沿うように土のう袋を重ねて、原位置が動かないよう保護した。

R 2 D 区（第60図5・6）

R 2 D 区の4号石組は二段の階段状の構造になっているので、その箇所の石が動かないように土のう袋を石に密着させ、その上に土のう袋を重ねて保護した。調査区の南端部付近には石がないので、一段の土のう袋で覆った。



1 (北から)



R 1調査区



3 (南から)

R 2 B区



4 (南から)



5 (北西から)

R 2 D区



6 (北東から)



7 (西から)

R 2 E区



8 (東から)



9 (南から)

北宮館跡5トレンチ



10 (東から)

第60図 遺構の保護措置

R 2 E 区（第60図7・8）

R 2 E 区の5号石組は掘り込みの底から石組の上端まで、石組の傾斜に沿って土のう袋を密着させた。さらに、密着した土のう袋を覆うように土のう袋を重ねた。また、石組の背後は底から最上段の石組までを石に密着した状態で土のう袋を配置し、その上に土のう袋を重ねて保護した。掘り込み内は段を保護するために段差を無くすよう土のう袋を載せ、全面を一段の土のう袋で覆った。

北宮館跡（菊之城跡）5トレンチ（第60図9・10）

北宮館跡（菊之城跡）5トレンチで検出した掘立柱建物跡の掘方、土坑は掘り下げた部分を山砂で覆い、その上に掘り込みの形状に合わせるように、土のう袋の大きさを調整して密着させ、その上面に土のう袋を重ねた。石列は表面を山砂で覆い、小さな石なので、原位置が動かないよう、石と石の隙間に土のう袋の大きさを調整して並べ、その上面から土のう袋を重ねて保護した。その他の箇所については、調査区全面を一段の土のう袋で覆った。

（4）まとめ

ここでは、菊之池B遺跡と北宮館跡（菊之城跡）の確認調査のまとめを行い、確認した遺構と河川の関係について述べる。

① 菊之池B遺跡について

【R 1 調査区】（第5図）

R 1 調査区では1号石組と2号石組を検出した。1号石組はほぼ南北方向に伸びるU字形の平面形を呈すると推定でき、その東側約半分を検出した。2号石組はほぼ東西方向に伸びるU字形の平面形になると想定でき、その先端部分を確認した。1号石組と2号石組の主軸方向は直交する位置関係である。

石組の時期については、V層を基盤とした石組を1期、Va層・Vb層を基盤とした石組を2期とした。これら1期・2期の石組は1号石組と2号石組の両者に存在する。3期の石組は1号石組の一部分で確認した。その箇所は2期の石組が崩落した部分を修復した部分である。修復には石ではなく版塗状の土を盛り、その盛土の上部に限って石を並べて組んでいる。1期と2期の石組が上下に重なっている箇所は、遺構保存の観点から1期石組の検出を必要最小限度の面積で行った。そのため、石組を確認した箇所が狭い範囲となっている。

1期の石組

1期の1号石組は調査区の西側に寄った箇所で確認した。石組の石は拳大から人頭大の大きさのものが殆どで、約5cm以下の小石が少數使用されている。1号石組の長軸と考えられる箇所の複合断面形は、北東端部付近にはほぼ平坦な面が約1.4mあり、平坦面の南側端部に緩い段があり、その箇所から南側に向けて緩やかに低くなり、約60cmの高低差がある（第7図C-D・E-F）。

1期の2号石組は調査区東側壁に沿った部分とその部分と直角方向に交わる深掘トレンチで確認した。石組の断面形は擂鉢状を呈しており、最深部で約60cmを測る。擂鉢状に窪む肩部には大型の石（長軸の長さ約20cm）を意識的に配置しており、それ以外の箇所には小型の石（長軸の長さ約2~10cm）を使用して築造している。

2期の石組

2期の1号石組は調査区の南西隅で確認した。石の大きさは1期と同様である。平面形がU字形になると推定した場合の短軸方向の断面形は、ほぼ平坦な底面から階段状に壁が立ち上がっている。階段状の壁は外側に開く二段構造になっている。下部の段は底面との高低差約20cmの緩やかな勾配で外側に立ち上がり、

上端部に幅約30~35cmの平坦面をもつ。その平坦面から上部の段の石を積んでおり、下部の段より急勾配で、高低差が約45cmある。最上部には大型の石（長軸の長さ約10~20cm）を配置している（第8図A~B）。この大型の石の配置状況は石組の東側壁端部に沿って直線的になっている。

2期の2号石組は調査区の南角から北側と西側の壁沿い範囲で確認した。石の大きさは1期と同様である。U字形平面形の先端部付近と考えられる箇所の西側壁の断面形は擂鉢状になっている（第8図C~D）。擂鉢状凹部の深さは約50cmで、底面から外に開きながら石を積んでいる。上端部には20~30cm幅の平坦面がある。調査区の南壁沿いに設定した深掘小トレンチの石組の石と石の隙間に置いた状態で土師器が出土した。土師器は13世紀後半~14世紀前半と考えられ、石組の築造年代を示す遺物である（第9図・第10図）。

3期の石組

3期の石組は1号石組の東側壁部分で確認した。2期の石組を修復したと考えられるのが3期の石組である。版築状に6層の土を積み、その上面に大型の石（長軸の長さ約15~70cm）を東壁に沿って直線的に配置し、直線的な石組の北東端部から連続して東側にも石を組んでいる。直線的に伸びる石組は2期で行われており、3期の修復で2期石組の形状を踏襲したものと考えられる（第11図）。

築造時期と使用時期

石組の築造時期や使用時期の参考資料となる土師器は、VI層出土、2期石組中出土、3期石組の版築状土層①層出土、砂①・②層出土の壺・小皿である。これら土師器の年代は13世紀後半~14世紀前半の時期である。同様に参考資料となる磁器は以下のとおりである。砂②層出土の白磁皿V類と考えられるものが、大宰府C期（11世紀後半~12世紀前半）である。3期石組の石の上出土の龍泉窯系青磁碗II類と考えられるものは、大宰府E期（13世紀前後~前半）である。

1号石組裏込め石内出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果は次のとおりである。較正用データーセットIntCal120を用いた 2σ の値はcalAD1293~1396である。

築造時期、使用時期を考える際、磁器は伝世品的性質をもつので、土師器の年代を参考にする。石組の1期と2期の時期区分した基盤となるVI層とV層出土土師器に明確な時期差は確認できない。3期の石組は2期石組の上位に築造されており、新旧関係がある。13世紀後半~14世紀前半の時期幅の中で、1期~3期を位置づけて、1期→2期→3期と変遷したと考える。放射性炭素年代測定結果を考慮すると、14世紀後半まで利用した可能性もある。

III層が堆積すると、1号石組と2号石組は土に埋もれ、使用できない状態になる。石組の機能が停止した時期を考えるには、III層出土遺物の上限が参考になる。出土遺物を抽出すると次のようになる。肥前磁器IV期（1690~1780）の口縁部片、肥前陶器擂鉢片（17世紀中頃~後半）、肥前磁器碗片（1710~1750）、肥前陶器IV期の胴部片（1690~1750）各1点である。また、III層から掘り込んだ溝状造構覆土出土土師質土器は18世紀代と考えられる。これらの遺物の時期から、17世紀末頃から18世紀中頃にかけてIII層が堆積したと考えられる。この時期には1号石組、2号石組は完全に土に埋もれていたと考えられ、石組としての機能が無くなつたと想定できる。

特殊な青磁

III層出土の青磁の中に、15世紀代と考えられる龍泉窯系青磁瓶の口縁部から頭部にかけてのものがある。頭部に稜線があるので、耳付タイプの可能性がある（第14図1）。また、脚部が確認できないが、香炉と考えられるものがある（第14図9）。これらの青磁は所有者の威信を示すもので、通常の生活の場で利用するのでなく、「ハレ」の場での利用が想定できる（小野2003）。

石組の用途

1号石組、2号石組は平面形がU字形を呈すると推定でき、石積は壁だけでなく、底面にも施されている。

1号石組は南側に向けて低く傾斜しており、南側からの侵入を意識した構造となっている。R 1 調査区の南側に隣接するR 2 A区の調査成果を併せて考えると、1号石組の南側は菊池川旧河川と推定できる。旧河川から侵入する石組であれば、石組の構造から川船の船着場の可能性が高い。2号石組は1号石組と直交する状態の船着場と考えられる。

【R 2 B区】

R 2 B区では3号石組を検出した。使用された石は丸い円礫が殆どで、大きさから三つに分けることができる。大型（約40×20cm～約25×15cm）、中型（約15×15cm～約15×10cm）、小型（約7×7cm～約2×2cm）である。サンプルから石材を種類ごとに分けると、輝石安山岩（60%）、阿蘇溶結凝灰岩（20%）、花崗岩（10%）、花崗閃緑岩（約7%）、角閃石（約3%）である。これらの石は調査区近くの菊池川、直線距離で約15km北側に離れた迫間川で確保することができる。

石組の階段状構造

3号石組の検出時状況は四段の階段状構造になっており、北側から南側に向けて低くなる。最上部を一段目、最下部を四段目とする。調査区中央部での断面図を見ると、一段目の平坦面の幅は約12mで、平坦面南端部に高低差約15cmの段がある。二段面の平坦面の幅は約60cmで、平坦面南端部で高低差約20cmの段を造っている。三段目の平坦面の幅は約1.2mで、平坦面南端部には高低差約20cmの段がある。四段目には平坦面ではなく、南側に向けて緩やかな傾斜面になっている。水中ポンプを稼働しないと、二段目の平坦面まで水没する状態になる。

石組の部分的深掘り

検出面より下部の石組の状況を把握するために、3号石組の東側半分を最上位の石組より約60cmの深さを3回に分けて深掘りした。深掘りの結果、検出面での石組の下部にも検出面の石と同様な石が最下部まで積まれているのが明らかになった。最下部で確認したVI a層・VI b層は3号石組の基盤となる層であり、この状況は1号石組、2号石組と同じである。

築造時期と使用時期

VI層出土遺物を見ると、土師器は13世紀後半～14世紀前半、磁器は大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）、大宰府G期（14世紀初頭～後半）である。3号石組は13世紀後半～14世紀前半頃に築造され、14世紀後半頃まで使用していたと考えられる。

石組の用途

3号石組は南側に向かって低くなる階段状構造であり、二段目まで浸水する。石組の南端部は菊池川旧河川の中もしくは河川の近くと推定できる。河川に伴う状態で築造された構造物である3号石組は菊池川旧河川護岸である可能性が高い。

【R 2 D区】

R 2 D区では4号石組を検出した。使用されている石は大型石（約40×20cm～約45×40cm）、中型石（約15×10cm～約25×15cm）、小型石（約5×4cm～約10×8cm）の三つに分類できる。

石組の構造

使用された石の中で、大型石の配置に特色がある。調査区の北端部付近に東西方向の帯状に大型石を密集させて並べる。この石の並びの南端部から約1m南側の箇所にも大型石を東西方向の帯状に配置している。両者の断面図は南側に低くなる緩やかな二段の階段状になり、それぞれに平坦面がある。水中ポンプを止めると、上段の端部まで水に浸かる。

4号石組の基盤となる層はVI a層・VI b層であり、3号石組の状況と同じである。

石組の時期

4号石組の出土遺物は少なく、小片が殆どである。図化できた1点の青磁片は大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）と考えられる。この遺物が時期の参考資料となる。

石組の用途

4号石組はその構造や浸水状況から、3号石組と同様に河川護岸の可能性が高い。

【R2E区】

R2E区では5号石組を確認した。使用された石は大型石（約30cm×10cm～約50×20cm）が殆どである。小型石の利用は少数で、大型石と大型石の隙間に配置している。

石組の構造

5号石組は1号石組～4号石組と比較すると、構造的に異なる。5号石組は深さ約30cmの掘り込みを行い、その東壁に沿って底から四段の石を積んでいる。その石組の断面形は斜めに外側に開き、最も外側の石は三段の石組を背後から押さえる状態で配置している。

掘り込み内の土層

掘り込み内に堆積している土に自然堆積ではない状況が確認できる。④層下端部、⑤層上下端部、⑥層上端部、⑦層上端部に層の凹凸が著しい。この状況は⑤層の土を人為的に除去した跡と考えられる。掘り込み内に継続的に水が溜まる状態で水底に土砂が堆積すると、水深が確保できないため、浚渫したと想定できる。

築造時期と使用時期

5号石組覆土、VI a層出土の土師器は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。5号石組中出土の青磁片は大宰府F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）と考えられる。また、石組覆土出土の天目片は14世紀前半～後半以降と考えられる。5号石組は13世紀後半頃に築造され、14世紀後半頃まで使用されたと考えられる。

石組の用途

5号石組は土層堆積状況から石組内側に水が溜まる施設端部の構造物と考えられる。その施設としては池状造構、水路などが想定できる。

【R2A区】

R2A区には人工的な構造物は無く、確認した土層から菊池川旧河川の中と考えられる。R2A区はR1調査区の南側に直線距離で約30m離れた隣接地点にある。R1調査区は船着場と考えられることから、船着場の南側には菊池川旧河川があり、そこから船が侵入し、着岸したと想定できる。

【R2C区】

R2C区では遺構は確認できず、土層の状況からR2A区と同様に菊池川旧河川の中と考えられる。掘削層から13世紀後半～14世紀前半の土師器片、大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられる同安窯系青磁片が出土した。

【R2F区】

R2F区では遺構は確認できていない。③層中に多量の石を確認し、石の平面形・大きさで7種類に分類した。平面形が楕円形・不整楕円形の石は、大きさ（長軸×短軸）から5種類に分けた。それらは約50cm×約40cm・約40cm×約20cm・約25cm×約20cm・約15cm×約10cm・約1cm未満×約1cm未満の石である。

平面形が円形の石は、直徑で3種類に分けた。それらは約7cm・約4cm・約1cm未満の石である。最も大きい約50cm×約40cmの楕円形・不整楕円形の石は少数で、それ以外の大きさの石は多量に確認できる。このような石の分布状況と水成堆積層と考えられる④層の砂層の存在、さらに、調査区は明治期の字図の「中川原」の範囲に含まれることから、調査区は菊池川旧河川の河原の可能性が高い。

出土遺物

R 2 F 区から出土した遺物は土師器、陶磁器で、時期幅が大きい。土師器は小片のため、時期比定ができるが、外底部に回転糸切痕が確認でき、大まかに12世紀以降のものと考えられる。陶磁器は中世～近世のものが出土している。これらの中で、古いものが大宰府D期（12世紀中頃～後半）で、新しいものが17世紀～19世紀代である。時期幅のある遺物は菊池川旧河道の存続時期の参考資料となる。

② 北宮館跡（菊之城跡）について

北宮館跡（菊之城跡）では1トレンチ～5トレンチで確認調査を行った。

【検出遺構】

1トレンチではピット1、遺構として確定できなった遺物集中区を確認した。

2トレンチでは1号溝跡、1号土坑、炭化物集中箇所、礫集中箇所を検出した。

3トレンチでは1号溝跡、2号土坑、3号土坑、ピット群を確認した。1号溝跡は2トレンチで確認した溝跡と一連のものと考えられる。ピット群の中で、7号ピット～13号ピットは1号溝跡と直交する状態で、直線的に並んでおり、横跡の可能性がある。

4トレンチでは2号溝跡を確認した。2号溝跡は1号溝跡と比較すると、規模が大きい。2号溝跡はほぼ東西方向に伸びると想定でき、1号溝跡と直交状態で、方形区画の高まりの北端部と平行状態の位置関係になっている。

5トレンチでは1号掘立柱建物跡、1号石列跡、4号土坑、5号土坑をV層上面で検出した。1号石列跡は掘立柱建物跡に伴う雨水施設と考えられる。1号掘立柱建物跡の1号掘方が焼土ブロックを切っており、検出面には焼土や炭化物が多量に含まれるので、建物は火災等の後に製造されたと考えられる。「メ」の刻書土師器が出土した5号土坑は掘立柱建物跡の3号掘方から切られている。火災後に建てられた建物と刻書「メ」（占う）との関連性があるのだろうか。4号土坑からは土師器小皿4個体、土師器壺9個体が一括して出土し、土師器の上には人為的に破碎した円礫を置いていた。

2トレンチ・3トレンチで確認した1号溝跡の伸びる方向は、方形区画の高まりとほぼ直交・平行する位置関係になる。また、1号掘立柱建物跡は桁・梁の判断ができないが、建物の軸方向と1号溝跡との位置関係はほぼ直交・平行状態である。1号掘立柱建物跡、1号石列跡、1号溝跡は一連の施設の可能性がある。

【出土遺物】

1トレンチから出土した主な遺物は土師器、陶磁器である。出土土師器の多くは13世紀前半～後半と考えられ、口径がやや大きい12世紀末～13世紀初頭に比定できるものが少數含まれる。磁器は白磁・青磁で、大宰府C期・D期・E期・F期と考えられる。これらの時期幅としては（11世紀後半～12世紀前半）～（13世紀中頃～14世紀初頭前後）である。陶器には磁灶窯系の盤と考えられるものがある。

2トレンチの主な出土遺物は土師器、陶磁器である。土師器は1トレンチと同様に13世紀前半～後半のものである。白磁は大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）、ビロースクタイプII類（13世紀末～14世紀前半）と考えられる。青磁には大宰府D期（12世紀中頃～後半）、大宰府G期（14世紀初頭～後半）と考えられるものがある。陶器は磁灶窯系盤I～2類（11世紀後半～12世紀前半）と考えられる。

3トレンチの主な出土遺物は土師器、須恵器、磁器である。土師器は1・2トレンチと同様に13世紀前半

～後半と考えられる。須恵器は13世紀頃と考えられる東播系須恵器である。白磁には大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）と考えられるものがある。青磁は大宰府D期（12世紀中頃～後半）、F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）と考えられる。

4トレーナーから出土した主なものは磁器、瓦質土器である。磁器には12世紀前半～後半と考えられる禾目天目茶碗、大宰府E期（13世紀前後～前半）と考えられる白磁、森田編年D群（14世紀後半～15世紀頃）と考えられる白磁がある。瓦質土器は15世紀以降と考えられる風炉である。

5トレーナーの主な出土遺物は、土師器、陶磁器、土錐、鉄釘である。土師器は4号・5号土坑、IV・V層から出土している。これらの時期は13世紀前半～後半と考えられる。陶器には磁灶窯系盤1類I～2b（11世紀後半～12世紀前半）、備前焼（13世紀中頃～14世紀前葉）と考えられる製品がある。白磁は大宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）、大宰府D期（12世紀中頃～後半）と考えられるものがある。青磁は大宰府D期（11世紀後半～12世紀前半）、大宰府E期（13世紀前後～前半）、大宰府G期（14世紀初頭～後半）、青磁C類（上田）（14世紀後半～15世紀前半）と考えられる。土錐は6点、鉄釘は角釘9点、合釘1点が出土した。

【放射性炭素年代測定】

北宮館跡（菊之城跡）5トレーナーIV層の炭化物は、較正用データーセットIntCal12を用いた 2σ の値はcalAD1298～1396である。北宮館跡（菊之城跡）5トレーナー4号土坑炭化物は、較正用データーセットIntCal12を用いた 2σ の値はcalAD1285～1390である。

【北宮館跡（菊之城跡）の性質】

遺跡の現況から、館跡は四方を堀に囲まれていると推定でき、その中央部に平面形が方形の高まりがある。高まりの比高差は現況で約0.8m～約1.8mである。方形の高まりの長さは東側が約45m、北・西・南側の長さはそれぞれ約70mである。堀と推定される箇所を含めると、南北方向の長さ約90m、東西方向約100mの方形区画になる。

この区画内の高まり部分で掘立柱建物跡、溝跡、石列跡が確認されたことから、館跡として考えられる。4号土坑一括出土土師器や5トレーナー出土土師器から、遺構の時期を13世紀前半～後半と考える。

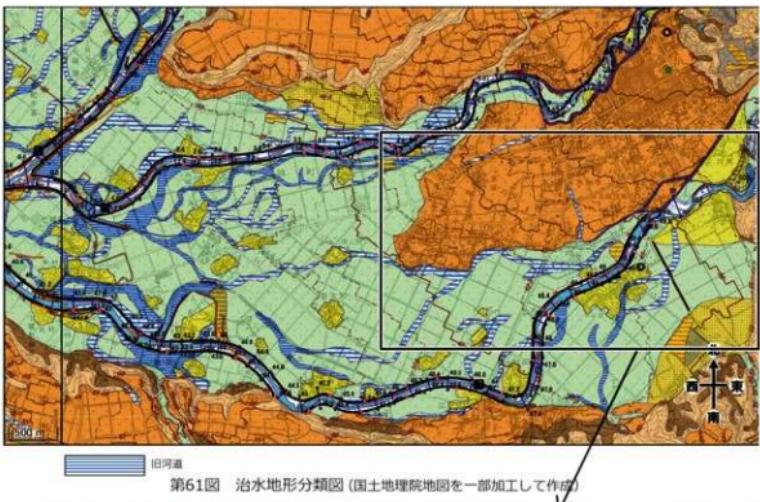
また、1～3トレーナーから出土した土師器は図化したものが182点、図化していないものを合わせると300点以上になる。約75m²の確認調査面積からの土師器出土量としては、非常に多い。さらに、中国からの輸入陶磁器や瓦質土器の風炉も出土している。中でも、禾目天目茶碗は所有者の威信財として注目できる。これらのことから館跡は領主館跡の可能性が高い。

③ 確認した遺構と菊池川の関係

確認した遺構は1号石組～5号石組と館跡で、河川や河原と考えられる調査区がある。これらと河川との関係について整理する。

第61図は国土地理院治水地形分類図「菊池」の関係箇所を抜き出したものである。治水地形分類図は国・都道府県が管理する河川流域の中で、平野部の自然堤防、扇状地、旧河道、後背地などの地形分類や堤防などの工作物を表した主題図である。この図の中で菊池川の「旧河道」として表示された部分に着目し、検討を行う。第61図の長方形に開いた部分を拡大したのが第62図で、調査区等の位置を図中に示した。R1調査区、R2A区、R2B区、R2C区、R2D区、R2E区、R2F区の調査区はこの旧河道の北岸（右岸）に沿った箇所に分布している。このことは各調査区の調査成果から想定した遺構の用途や調査区の性質と符合する。1号・2号石組は旧河道から侵入する船着場、3号・4号石組は旧河道の護岸施設、5号石組は旧河道と関連する水を貯えた施設。R2A区・R2C区は旧河道の中、R2F区は旧河道の河原とそれぞれの用途・性質をもつと考えられる。現在の菊池川と北宮館跡（菊之城跡）は直線距離で約225m離れた位置関係にある。

旧河道の存在から、中世の北宮館跡（菊之城跡）は旧河道の北西方向の隣接地に立地していたことが明確になった。館跡と旧河道の直線距離は約40mで、館跡のすぐ傍には旧菊池川が流れていた。館跡は水運を利用した活動を展開するのに適した場所で、館跡周辺の旧河川関連施設がその活動を支えていたと考えられる。



第62図 菊池川旧河道と調査区（第61図を部分的に拡大）